

幼児期の発育・食事・食行動に関する研究レビュー及び整理

研究分担者 多田 由紀（東京農業大学応用生物科学部栄養科学科）

研究要旨

幼児の発育・発達・健康に関連する栄養・食生活の心配ごと、保護者の課題、および課題に対する支援の在り方に関する先行研究を収集し、ガイドラインで示す「子どもの栄養・食生活の心配ごと及び保護者の課題」ならびに「子ども・保護者の栄養・食生活の課題の改善のための支援の方向性」の枠組みに沿って、調査項目および関連性の結果を整理することにより報告状況を把握した。最終的に採択された 144 件の論文を整理した結果、子どもの「発育・発達・健康」と子どもの「食事への関心・行動」に関わる論文が最も多かったものの、特定の要因と結果の関連性を明らかにすることはできなかった。また、子どもの心配ごとに対する保護者の対応、さらには保護者や幼児の栄養・食生活の課題改善のための支援の在り方に関する研究は全体的に不足していた。

A. 研究目的

平成 27 年乳幼児栄養調査の結果によると、肥満傾向、やせ傾向の子どもについて、約 4 割の保護者は子どもの体格の認識に相違があったこと、子どもにむし歯のある者に、「欲しがる時にあげることが多い」「甘い飲み物やお菓みに偏ってしまう」「特に気をつけていない」と回答した保護者の割合が高いなど、幼児期の栄養・食生活等をめぐる問題点が示されている。一方で、8 割の保護者は子どもの食事の心配事を抱えていることや、保護者の就寝時刻が遅いと子どもも就寝時刻が遅い割合が高いこと、保護者の朝食摂取頻度が低い家庭の子どもに朝食を食べない者の割合が多いなど、保護者に対する支援の在り方を検討する必要性も示されている。そのため、幼児期における心身の発育・発達や基本的な生活習慣の形成などの特徴を踏まえ、適切な栄養摂取や食生活の支援について明示し、保護者への支援の充実を図る必要がある。しかし、

我が国においてはこれまでに、幼児期の栄養・食生活について、科学的根拠に基づき、具体的な支援の方法が示されたガイドラインは提示されていない。そのため、「幼児期のための健やかな発育のための栄養・食生活支援ガイド」を策定することが求められている。

以上の背景から、本研究では、幼児の発育・発達・健康に関連する栄養・食生活の心配ごと、保護者の課題、および課題に対する支援の在り方に関する先行研究を収集し、ガイドラインで示す「子どもの栄養・食生活の心配ごと及び保護者の課題」ならびに「子ども・保護者の栄養・食生活の課題の改善のための支援の方向性」の枠組み（以下関連図）に沿って調査項目および関連性の結果を整理することによって報告状況を把握すること、ならびに幼児を対象とした研究における今後の課題を提示することを目的とした。

B. 方法

1. 論文の抽出

データベースの種類は医学中央雑誌、NII論文情報ナビゲータ（以下、CiNii）、科学技術情報発信・流通総合システム（以下J-STAGE）、独立行政法人科学技術振興機構（現在は株式会社ジー・サーチ）が提供する科学技術文献情報データベース（JDreamIII）および米国国立医学図書館（National Library of Medicine, NLM）が提供する文献データベース（PubMed）を用いた。発行年の範囲は2000年1月1日～2019年12月31日とした。キーワードは（幼児 or 小児 or 子ども or 保育園 or 幼稚園）、（生活習慣 or 食習慣 or 食行動 or 食事 or 食生活 or 食事時間 or 偏食 or 運動 or 遊び or 食育 or 栄養指導 or 給食）、

（父親 or 母親 or 保護者 or 保育士）などを組み合わせて検索した。CiNii以外のデータベースでは、いずれも統制用語を指定した。PubMedではさらに（Japan or Japanese）の検索語を追加した。さらに、各分担研究者が各専門領域における論文をハンドサーチも含めて収集した。

次に、表1に示した採択基準に基づき論文のスクリーニングを行った。なお、関連図には食物アレルギーの記載があるが、食物アレルギーは医師の診断を踏まえた対応が必要であること、並びに科学的根拠に基づいた食物アレルギーの栄養食事指導の手引きが厚生労働科学研究班によってすでに示されていることから、本研究における採択基準からは、食物アレルギーに関する論文を除外した。

表1. 論文の採択基準

【項目同士の関連性を検討した論文】

- ① 学術雑誌（紀要を除く、査読有）に掲載されている原著論文のうち、統計解析を行っているもの。
- ② 観察研究（分析疫学研究）、介入研究。
- ③ 日本人で健常な幼児を対象としている（対象集団の特徴について記載がある）。
- ④ 関連図に記載された内容（食物アレルギーを除く）に関する調査項目がある。
- ⑤ <観察研究のみ> 「発育・発達・健康」「食事・間食・飲料」「食事への関心・行動」「生活」に含まれる小項目のうち、一方が「増える」「減る」ことで他の変化が期待できる要因との統計的な関連を検討している。
- ⑥ <介入研究のみ> 「発育・発達・健康」「食事・間食・飲料」「食事への関心・行動」「生活」に含まれる小項目に関する介入内容が含まれ、介入の効果が報告されている。

【実態を示した論文】

- ① 学術雑誌（紀要を除く、査読有）に掲載されている原著論文。
 - ② 観察研究（分析疫学研究）。
 - ③ 日本人で健常な幼児を対象としている（対象集団の特徴について記載がある）。
 - ④ 関連図に記載された内容（食物アレルギーを除く）に関する調査項目がある。
-

一次スクリーニングでは、データベース検索により抽出された論文について、表題

及び抄録から複数データベース間で重複した論文及び採択基準に合致しない論文を除

外した。二次スクリーニングでは本文を精読し、一次スクリーニングと同様に論文を除外し、最終採択論文を決定した。以上の作業は、調査員2名で行い、判断が異なった場合は協議の上で決定した。

2. 最終採択論文の結果の検討

データベース検索及びハンドサーチにより最終的に採択された論文は、調査対象（地域、特性、人数、年齢層）、調査方法（研究デザイン・介入方法）、テーマに関連する調査項目、アウトカム指標（利点、重要性に関する調査項目）、根拠となりうる研究結果、統計解析手法、調整変数、キーワードについて整理した。

3. 調査項目の分類

採択基準を満たす論文に含まれていた調査項目を、関連図における横軸の大項目（「発育・発達・健康」「食事・間食・飲料」「食事への関心・行動」「生活」）および縦軸の大項目（「子どもの心配ごと」「保護者」「支援者の活動」）のいずれかに分類した。さらに、大項目に分類した調査項目を以下の小項目に分類した。すなわち、発育・発達・健康は「身体的」「口腔機能」「精神的」、食事・間食・飲料は「量」「質」、食事への関心・行動は「食事をつくる力」「食事を食べる力」に分類した。分類は調査員2名がそれぞれ検討し、判断が異なった場合は協議の上で決定した。

小項目の出現頻度のカウントにおいては、その小項目に含まれる1つ以上の用語を調査項目に含む論文数をカウントした。すな

わち、単一の研究で小項目内の複数の項目を調査した場合も1つとカウントした。

4. 関連数の集計

個々の研究における調査項目は多岐にわたっており、概念図上の矢印で項目間の関連性を示すことが困難であった。そのため、全小項目を縦軸および横軸に配置したマトリックスを作成し、各小項目同士の関連性の結果を報告した論文数をカウントした。

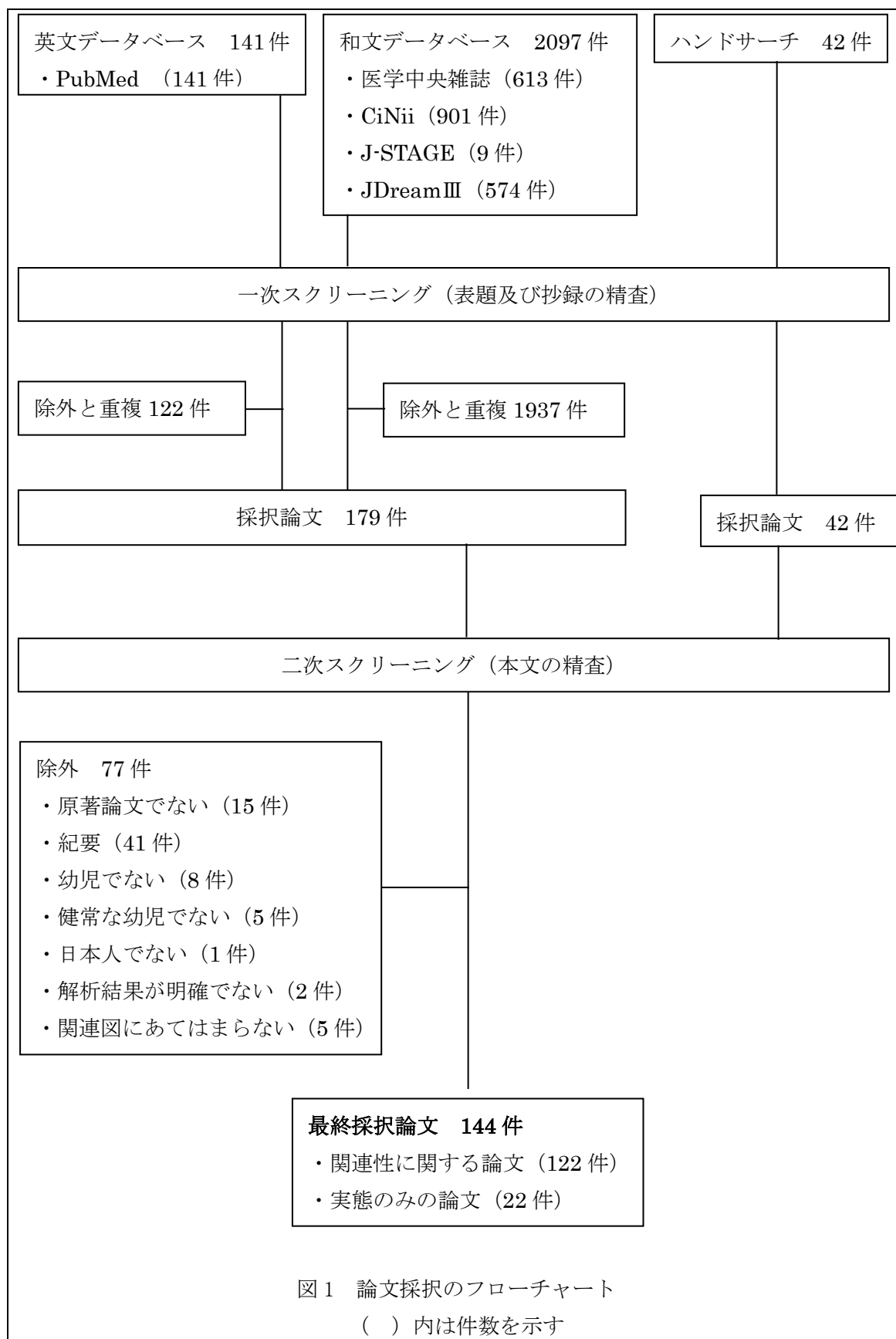
C. 結果

1. 論文の抽出

論文抽出の結果を図1に示した。英文データベース検索の結果、PubMedで141件が抽出された。和文データベースの検索結果、医学中央雑誌で613件、CiNiiで901件、J-STAGEで9件、JDreamIIIで752件、合わせて2229件が抽出された。これらの表題および抄録から、複数データベース間での重複した論文及び採択基準に合致しない論文を除外し、179件を採択した。また、ハンドサーチの結果、表題および抄録から42件を採択した。続いて、これらの本文を精読した二次スクリーニングによって採択基準に合致しない論文を除外し、144件を最終採択論文とした。

2. 刊行年と件数

2000～2004年が37件、2005～2009年が33件、2010～2014年が40件、2015～2019年が34件であった。



3. 研究デザイン

横断研究が 110 件と最も多く、縦断研究が 22 件、介入研究が 12 件であった。ただし、横断研究とした 3 件（論文番号 211、212、1001）は、調査は縦断的であったが、本研究で関連性に用いた結果は横断的であったため、横断研究に含めた。

4. 対象者

3 歳未満のみが 23 件、3～6 歳のみが 94 件、3 歳未満と 3～6 歳の両方を含むものが 21 件であった。これらのうち、小学生以上を含むものは 6 件、保護者を含むものは 70 件、支援者を含むものは 17 件であった。なお、保護者のみが 2 件、支援者のみが 3 件、保護者と支援者のみが 1 件であった。縦断研究の場合、調査開始時の対象者の年齢で分類した。

5. 調査項目の分類

採択基準を満たした論文の概要を表 3 に示した。各大項目および小項目に分類した調査項目は以下のとおりである。

(1) 子どもの発育・発達・健康

子どもの「発育・発達・健康」のうち、身体的項目には、関連図にある発育（肥満度）、排便習慣、食事時におなかがすいていない（食欲がない）の他、やせ、やせすぎ、太りやすい、思春期の肥満、おむつのとれた時期、離乳食の進めやすさ、育てやすさ、身長、便秘、下痢、味覚・聴覚・嗅覚、運動発達、出生時体重、腹痛、疲労度、体調不良、風邪をひきやすい、顔色が悪い、癖（指しゃぶり、口呼吸）、脂質代謝に関わる血液検査値が良くない、骨評価度、体温、身体意識（幼児が自身の体をどれだけ意識できているか）、中学時代の QOL を分類し

た。口腔機能には、関連図にある噛みにくい、仕上げ磨きしていないの他、保護者による仕上げ磨き、虫歯（う歯、う蝕）、咀嚼力、咬合力、大臼歯・歯の萌出状況、歯のすり減り、歯肉炎指標、口臭、苦味に対する感受性を分類した。ただし、関連図に記載された「歯が痛い」「飲み込みにくい」「口からこぼしやすい」という表現の調査項目は論文中にはみられなかった。

精神的項目には、関連図にある食事が楽しくなさそう（食事中に楽しい会話をする）、食事が美味しくなさそうの他、社会適応、社会性発達、自閉的傾向、友人とのかかわり、気が散りやすい、よく泣く、かんしゃくを起こしやすい、生活充実度、内向的傾向・外交的傾向、新規食品に対する恐怖心、自発的性格、中学時代の QOL を分類した。ただし、関連図に記載された「安心できない」「食事が安全でない」という表現の調査項目は論文中にはみられなかった。なお、中学校時代の QOL に関しては、下位領域に身体的項目と精神的項目の両者を含むため、それぞれの分類に加えた。

(2) 子どもの食事・間食・飲料

子どもの「食事・間食・飲料」のうち、量には、関連図にある食べる量が少ない・多い、むら食いがある、食事・間食の回数（多い・少ない）、飲料の種類と量を管理していないの他、喫食率、朝食欠食、18 か月以上の授乳、エネルギー摂取量を分類した。質には、関連図にある栄養バランスが良くない、食品・料理の種類・組合せが良くない、食べたことのある食物の種類が少ない、ファーストフード・即席麺・加工食品が多い、食べるものの固さ・大きさがわからな

い、食事と間食に気をつけていないの他、栄養素等摂取量（尿中 Na 排泄量、尿中 K 排泄量）、離乳食、母乳、粉ミルクでの授乳、甘い食べ物・飲み物、堅い食べ物、離乳食で食品の種類を増やすことを心がけなかった、調理済み食品の使用、外食、サプリメントを使用している、を分類した。ただし、関連図に記載された「彩りがよくない」という表現の調査項目は論文中にはみられなかった。

(3) 子どもの食事への関心・行動

子どもの「食事への関心・行動」のうち、食事をつくる力には、関連図にある食べ物への関心がない、食材の栽培体験がない、料理づくりのお手伝いをしていない、食事の準備や後片付けのお手伝いをしていないの他、食に関する知識を分類した。食事を食べる力には、関連図にある食べるものが偏る、あそび食べがある、だらだら食べる、速く食べる、よく噛まない、食具を使えない、家族や保護者と一緒に食べる機会が少ないの他、食事マナー、好き嫌い、嫌いでも努力して食べる、残さず食べる、じっとしてられない、食事に要する時間、咀嚼回数、よく噛んで食べる、片噛み、つめこむ、すぐに飲み込まず口にためる、を分類した。

(4) 子どもの生活

子どもの「生活」の生活習慣には、関連図にある就寝・起床時間が遅い、運動（外遊び）をしていない、電子メディアの視聴時間が長い、食事・間食時間が規則正しくない、食事・間食のタイミングが遅いの他、睡眠時間が短い、起床の方法、遊び（室内

遊び、一人遊び）、テレビを見ながら食事をする習慣、習い事・クラブ活動、食事時刻・間食時刻を決めていない、夜間授乳、夜食、大便後の手洗い、帰宅後の手洗い、食事前の手洗い、食後の歯磨き、活発度、兄弟の存在、身体活動量、歯磨きの頻度を分類した。

(5) 保護者

保護者の「子の身体的健康・口腔機能を確認していない」には、予防接種の未受診、子どもの歯の汚れを分類した。ただし、「精神的健康」「発達特性」に関連する調査項目は論文中にはみられなかった。

保護者の「子の食事への関心・理解」には、関連図にある子の食事量・味付け・食べ方の理解がないの他、薄味への配慮、栄養バランスへの配慮、食生活・食習慣への配慮、食品選択への配慮、保護者による食育、食育への関心、10ヶ月以上の離乳食が大人と同じ食べ物、食材が偏らないようにする、よく噛んで食べることを考えて食品を選ぶ、堅いものを食べさせる、間食の種類・量を決めている、食品添加物への不安、食事に対して多くの情報源をつかう、幼稚園給食への満足度を分類した。ただし、「食品選択への配慮」「幼稚園給食への満足度」は、実態の論文でのみ得られた。また、「子の主体性を大切にしていない」「保育所等での子の食事の様子を知らない」という表現の調査項目は論文中にはみられなかった。

保護者の「食事づくり・食べる力」には、関連図にある食事づくりの得意・不得意さ、子どもと一緒にすることができないの他、箸の持ち方指導、食事マナーの指導、手伝いをさせる、家でのおかずの調理法、調理の

工夫、偏食への対応、偏食（好き嫌い）をなくす工夫、よく噛んで食べるよう注意をする、手作りへの心がけを分類した。

保護者の「自身の生活の理解」には、関連図にある生活リズム（食事時間・回数）、食生活スタイルの他、親の朝食摂取、起床就寝時刻、就労状況、親の栄養バランス、親の栄養素等摂取量、親の偏食、喫煙、妊娠中の喫煙、飲酒、ゆっくり食べる、姿勢を意識する、食事中にテレビをつけないようにしている、親の肥満度、世帯収入、サプリメントを摂取している、摂取食品群頻度、自分自身の健康管理及び食生活に関する認識、祖父母の存在、母親の齲歯、育児不安、精神的ストレス、親の骨評価値、昼間の保育者が母親、親の健康（高血圧）、両親の学歴を分類した。

(6) 支援者の活動

支援者の 1) 保護者への支援には、「親に子の身体的・精神的健康・口腔機能・発達特性を確認してもらう」に類似する表現の調査項目を分類した。

支援者の 2) 保護者への支援のうち、「親に子の食生活への関心をもってもらう」には、食育、栄養教育、子に自身の食生活への関心をもってもらう、親に子の食事量・食べ方の特徴を理解してもらう（昼食の食事形態、栄養士の存在）、0歳児保育の経験、保育施設での間食の提供を分類した。ただし、「親に子の食事量・食べ方の特徴を理解してもらう（昼食の食事形態、栄養士の存在）」は、実態の論文でのみ得られた。

支援者の 3) 保護者・子どもへの支援には、関連図にある「親・子の食事への関心・行動変容を促し、親・子の食事づくり力、

食べる力を向上してもらう」、「親・子に楽しく食べることの大切さを理解してもらう」に類似する表現の調査項目の他、食育、栄養教育、0歳児保育の経験を分類した。ただし、「親・子に楽しく食べることの大切さを理解してもらう」は、実態の論文でのみ得られた。また、「親の困り感に共感する」「親・子と一緒に作る、食べることの良さを理解してもらう」という表現の調査項目は論文中にはみられなかった。

支援者の 4) 保護者への支援には、関連図にある「親に子の生活習慣を見直してもらい、自身の生活習慣の子の食生活への影響を理解してもらう」「親に保育園等での食事の様子や保育者との関わりについて理解してもらう」、「親に子の支援（組織）への相談を提案する」に類似する表現の調査項目の他、0歳児保育の経験を分類した。ただし、「親に保育園等での食事の様子や保育者の関わりについて理解してもらう」のうち、保育者との関わりについては、実態の論文でのみ得られた。また、「親と子育て情報を共有し、使い方を理解してもらう」という表現の調査項目は論文中にはみられなかった。

なお、0歳児保育の経験に関しては、支援者の「親に子の食生活への関心をもってもらう」「子の食事への関心・行動変容を促し、親・子の食事づくり力、食べる力を向上してもらう」「親に自身の生活習慣を見直してもらい、自身の生活習慣の子の食生活への影響を理解してもらう」に共通して該当したため、それぞれの分類に加えた。

支援者の「子・親の食生活支援のために組織内の多職種と連携し、地域の様々な組織・団体と連携する」には、これに類似す

る表現の調査項目を分類した。

以上の分類から、関連図における各枠組みの小項目を調査項目に含む論文数を集計した結果を図2に示した。論文数が最も多かった小項目は子どもの「生活習慣」であり、次いで食事・間食・飲料の「質」、発育・発達・健康の「身体的」、食事・間食・飲料の「量」および食事への関心・行動の「食

事を食べる力」であった。最も少なかった小項目は支援者の活動の「子・親の食生活支援のために組織内の多職種と連携し、地域の様々な組織・団体と連携する」および「親に子の身体的・精神的健康・口腔機能・発達特性を確認して理解してもらう」であった。

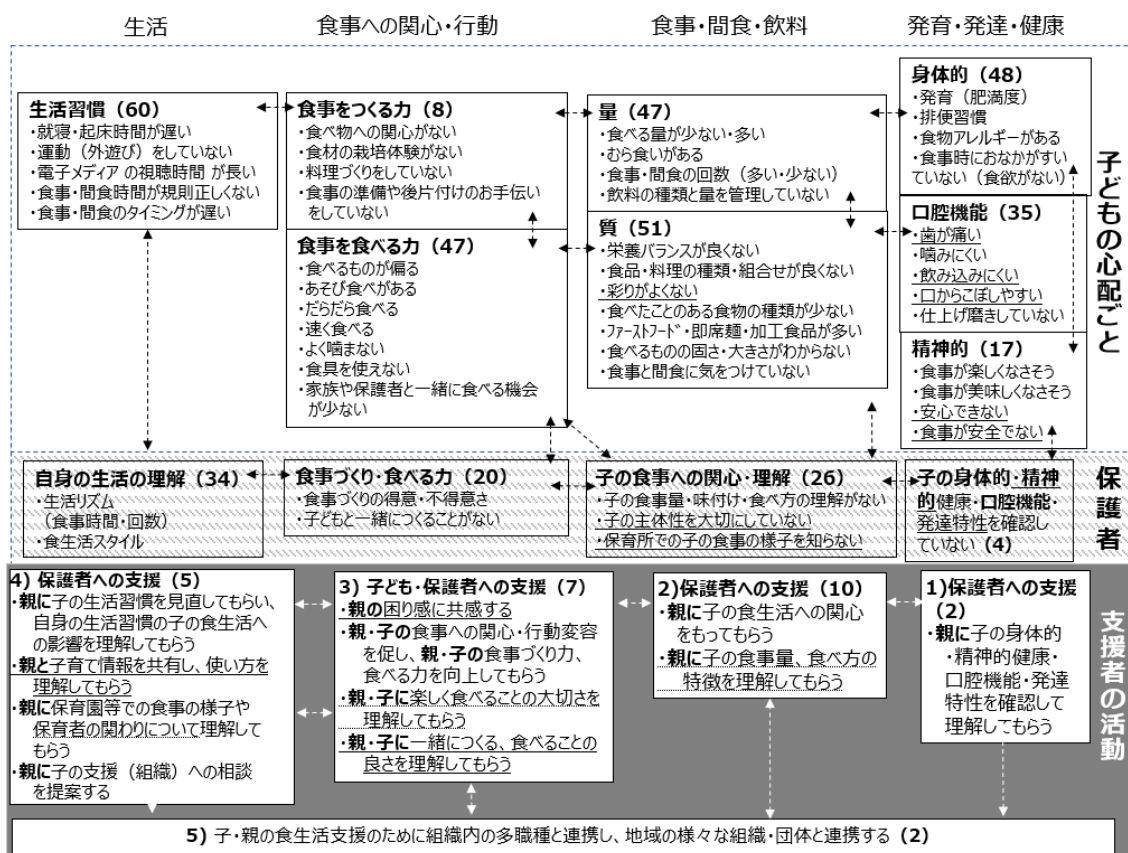


図2 関連図における各枠組みの内容に関する調査項目を含む論文数

※ () 内は小項目を調査項目に含む論文数

—— (実線) は採択論文中にみられなかった項目

..... (点線) は実態の論文でのみ報告された項目

6. 項目同士の関連性の検討

小項目同士の関連性を検討した論文数をカウントし、マトリックスに示した(図3)。最も論文数が多かったのは、子どもの発

育・発達・健康の「身体的」項目と、食事への関心・行動における「食事を食べる力」の関連であった。一方で、支援者の活動に関する論文および、多職種・地域との連携に関わる論文は少数であった。

D. 考察

これまでに、日本人の子どもを対象とした健康や食事に関する系統的レビューでは、やせ、共食、野菜摂取を促す教育プログラムなどは存在するものの、幼児に限定した系統的レビューは我々の知る限り公表されていない。本研究は幼児の発育・発達・健康に関連する栄養・食生活に関わる論文を広く収集したが、質問票に含まれた項目は多岐にわたっており、調査の信頼性および妥当性が不明な論文や、解析で交絡因子が考慮されていない論文など、エビデンスのレベルは様々であった。したがって、特定の要因と結果の関連を明らかにすることはできなかった。小項目同士の関連性を明らかにするには、幼児を対象とした更なる研究報告が必要である。

また、子どもの課題に対する保護者の対応、さらには保護者や幼児の支援の在り方に関する研究は全体的に不足していた。「幼児期のための健やかな発育のための栄養・食生活支援ガイド」では支援の在り方を提示する必要があるが、支援者がガイドラインを活用することによって保護者の困りごと、幼児の食生活上の課題などが改善するかどうかは長期的な検討が必要である。

E. 結論

日本人の健常な幼児を対象とした発育・発達・健康に関連する栄養・食生活の心配ごと、保護者の課題、および課題に対する支援の在り方に関する先行研究を広く収集した結果、子どもの「発育・発達・健康」と子どもの「食事への関心・行動」に関わる検討はある程度なされていたものの、支援者の活動に関する研究が不足していることが明らかになった。

F. 健康危機情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

厚生労働科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）

総合研究報告書

			子ども								保護者				支援者の活動					
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	
			発育・発達・健康			食事・間食 飲料		食事への関心・行動			生活	発育・健康	食事・間食 飲料	食事への関心・行動	生活	発育・健康	食事・間食 飲料	食事への関心・行動	生活	多職種・地域との連携
			身体的	口腔機能	精神的	量	質	食事を作る力	食事を食べる力											
子ども	A	身体的	3	1A	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		B	口腔機能	2	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
			精神的	2	1	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	C	1C	2C	3C	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		D	量	16	16	2	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	E		1D	2D	3D	4D	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
		F	質	12	16	2	5	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	G		1E	2E	3E	4E	5E	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
		H	食事を作る力	0	0	0	1	2	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	I		1F	2F	3F	4F	5F	6F	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
J		食事への関心・行動	22	6	6	5	8	4	6	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
	K	1G	2G	3G	4G	5G	6G	7G	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
L		生活	21	13	3	5	6	1	9	11	—	—	—	—	—	—	—	—		
	M	1H	2H	3H	4H	5H	6H	7H	8H	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
保護者		I	発育・健康	1	2	0	0	0	0	0	0	—	—	—	—	—	—	—	—	
	1I		2I	3I	4I	5I	6I	7I	8I	9I	—	—	—	—	—	—	—	—		
	J	食事・間食 飲料	4	4	1	2	6	2	6	2	1	3	—	—	—	—	—	—	—	
		1J	2J	3J	4J	5J	6J	7J	8J	9J	10J	—	—	—	—	—	—	—	—	
K	食事への関心・行動	2	1	0	1	5	1	5	1	0	3	0	—	—	—	—	—	—		
	1K	2K	3K	4K	5K	6K	7K	8K	9K	10K	11K	—	—	—	—	—	—	—		
L	生活	9	5	1	3	7	0	11	5	0	4	4	3	—	—	—	—	—		
	1L	2L	3L	4L	5L	6L	7L	8L	9L	10L	11L	12L	—	—	—	—	—	—		
支援者の活動	M	発育・健康	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	—	—	—	—	
		1M	2M	3M	4M	5M	6M	7M	8M	9M	10M	11M	12M	13M	—	—	—	—		
	N	食事・間食 飲料	2	0	4	1	2	1	2	1	0	3	1	1	0	0	—	—	—	
		1N	2N	3N	4N	5N	6N	7N	8N	9N	10N	11N	12N	13N	14N	—	—	—	—	
	O	食事への関心・行動	0	1	1	0	0	1	3	0	0	2	1	0	0	0	—	—	—	
		1O	2O	3O	4O	5O	6O	7O	8O	9O	10O	11O	12O	13O	14O	15O	—	—	—	
	P	生活	1	0	2	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	1	0	—	
		1P	2P	3P	4P	5P	6P	7P	8P	9P	10P	11P	12P	13P	14P	15P	16P	—	—	
Q	多職種・地域との連携	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
1Q	2Q	3Q	4Q	5Q	6Q	7Q	8Q	9Q	10Q	11Q	12Q	13Q	14Q	15Q	16Q	17Q	—	—		

図3 項目同士の関連性が報告された論文数

※上段、論文数：下段、関連が見られた項目が属する小項目（縦軸（アルファベット）および横軸（数字））の分類

表3-1. 採択した幼児期の発育・食事・食行動などに関する論文の概要(関連性を検討した論文)

論文情報				調査対象		方法		調査項目				
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年	巻号	ページ	調査地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	研究デザイン/ 介入/介入 期間	調査方法/ 介入内容	テーマに関連する 調査項目	アウトカム指標 (利点、重要性に関する調査 項目)
101	真名子 香織, 久野(永田) 一恵, 荒尾 恵介, 水沼 俊美	朝食の食欲がない幼児の夕食の食欲と生活時間・共食者・遊ぶ場所・健康状態との関係	栄養学雑誌	2003	61	1	pp.9-16 不明	S市内私立幼稚園29園の2~5歳の園児2,145人(男児1,095人、女児1,050人)	横断研究	質問紙調査	朝食の食欲	健康状態 夕食の食欲 生活時間(起床時刻・朝食時刻・夕食時刻・就寝時刻) 共食者 遊ぶ場所
102	田中 裕, 安梅 勲江, 酒井 初恵, 宮崎 勝宣, 庄司 ときえ	長時間におよぶ乳児保育の子どもへの発達への影響に関する5年間追跡研究	保健福祉学会誌	2005	12	1	pp.23-32 全国	認可保育園71か所の保護者と保育専門職で2000年と2006年に回答し、2000年に障害や発達の遅れのなかった30人	縦断研究 (前向きコホート研究)/5年間	質問紙調査	家族と一緒に食事をする機会 育児支援者の有無	子どもの発達に関する項目として運動発達(粗大運動, 微細運動), 社会性発達(生活技術, 対人技術), 言語発達(コミュニケーション, 理解)
103	江田 節子	幼児の朝食の共食状況と生活習慣, 健康状態との関連について	小児保健研究	2006	65	1	pp.55-61 神奈川県	横浜市M幼稚園の3~6歳の園児161人(男児71人、女児90人)	横断研究	質問紙調査 最近1週間の家庭での食事状況調査	朝食の共食状況, 夕食の共食状況	健康(食物アレルギー, 排便, う痔, 肥満等(12項目)) 食物の摂取状況 朝食と夕食の食欲 生活時間(起床時刻, 朝食の時刻, 就寝時刻)
104	森脇 弘子, 戎 淳子, 前大進 教子, 松原 知子	3歳児と保護者の食生活と共食頻度との関連	日本食生活学会誌	2009	20	1	pp.68-73 広島県	3歳児の保護者364人	横断研究	質問紙調査	朝・夕食の家族のそろう食事頻度(朝食・夕食に家族が揃う頻度から2つのクラスターに分類し, 共食頻度が高い群と低い群に群分け)	<子ども> 健康状態(排便頻度, 肥満度, 気になる症状, 等) 生活習慣(起床・就寝時刻, 毎日外で遊ぶ, 等) 食習慣(朝食の摂取, 好き嫌い等) <保護者> 子どもと健康や食事の話をする 子どもへの食事のしつけ
105	黒川 通典, 角谷 千尋, 吉田 幸恵	乳幼児の朝食と夕食の共食頻度とその関連要因	医学と生物学	2013	157	2	pp.170-175 大阪府	泉南郡岬町に住む未就学児(0~6歳)447人	横断研究	質問紙調査	家族との朝食共食頻度 家族との夕食共食頻度 「ほとんど毎日食べる」「週に4~5日食べる」「週に2~3日食べる」「ほとんど食べない」 →「ほとんど毎日食べる」を共食群, それ以外を非共食群	食事時間を楽しんでい る 家族とおいしく食べてい る 食事の時間を楽しみにして いる 毎日排便がある 嫌いなものも頑張って食べ る 食事を残さず食べる 「いただきます」「ごちそうさ ま」のあいさつをする 食事の用意や後片付けを手 伝う よく噛んで味わって食べる 主食・主菜・副菜をそろえて 食べることが1日に2回以上 ある ほとんど毎日朝食を食べる
106	志澤 美保, 義村 さや香, 趙 朔, 十一 元三, 星野 明子, 桂 敏樹	幼児期の食行動に関連する要因の研究: 自閉症的傾向, 感覚特性および育児環境に焦点をあてて	日本公衆衛生学会誌	2018	65	8	411-419 不明	A県2市に研究協力の同意が得られた保育所, 幼稚園, 療育機関に通う4~6歳の子供583人の養育者	横断研究	質問紙調査	自閉症的傾向 感覚情報処理評価尺度 育児環境指標(家族で食事を する機会を含む)	食行動の問題数 ※食行動の問題として, 偏食, じっと座っていられない, 立ち歩く, 気が散る, 食事中おしゃべりが多く, なかなか進まない, 口にいっぱい詰め込んでしまう, よく噛まないで飲み込む, 時々話まじりになる, いつも同じ食べ物を食べたがる, スプーン・フォークや箸がうまく使えない, いつまでの口にためてなかなか飲み込まない, 決まった時間に食べられない, 一度食べたものを口から出すなどを質問。

根拠となりうる研究結果		調査項目の分類			
	統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目 「発育・発達・健康」「食事・間食・飲料」「食事への関心・行動」「生活」	小項目	縦軸 「子どもの心配ごと」「保護者」「支援者の活動」
<p>朝食の食欲が「あまり食べない」及び「ほとんど食べない」子どもは、「よく食べる」と答えた群に比べて</p> <ul style="list-style-type: none"> 起床時刻、朝食時刻、夕食時刻、就寝時刻が遅い乳児の割合が高かった。 両親と食べる幼児の割合が低く、子どもだけで食べる割合が高かった。 「どちらかといえば戸外で遊ぶことが多い」と答えた幼児の割合が低く、「どちらかといえば室内で遊ぶことが多い」幼児の割合が高かった。 風邪をひきやすい、疲れやすい、やせすぎていると答えた幼児の割合が高く、太りやすいと答えた幼児の割合は低かった。 夕食もあまり食べないやほとんど食べないと答えた幼児が多かった。 	<p>統計解析: スピアマンの順位相関係数、クラスカル・ウォリス検定、Mann-Whitney検定 調整変数: なし</p>	<p>食欲 生活習慣 共食者 遊ぶ場所 健康状態</p>	<p>生活 食事への関心・行動 発育・発達・健康</p>	<p>生活習慣(就寝・起床時刻が遅い、運動(外遊び)をしていない、食事のタイミングが遅い) 食事を食べる力(家族や保護者と一緒に食べる機会が少ない) 身体的(発育(やせすぎ、太りやすい)、食事時におなかがすいていない、健康状態(疲労度、風邪をひきやすい))</p>	<p>子どもの心配ごと 保護者の活動</p>
<ul style="list-style-type: none"> 5年後の粗大運動のリスクには、「家族で食事をする機会」が少ないこと、「育児支援者の有無」がないことが関連していた。 微細運動のリスクには、「育児に対する自信」がないこと、「社会適応」がないことが関連していた。 対人技術のリスクには、「家族で食事をする機会」が少ないこと、「きょうだい」がないことが関連していた。 コミュニケーションのリスクには「育児支援者」がないことが関連していた。理解のリスクには、「家族で食事をする機会」の少なさが関連していた。 	<p>統計解析: χ^2検定、フィッシャーの検定 調整変数: なし</p>	<p>乳児保育 発達 育児環境 かかわりの質 子育て・子育て支援</p>	<p>生活 食事への関心・行動 発育・発達・健康</p>	<p>身体的(運動発達) 精神的(社会性発達) 食事を食べる力(家族や保護者と一緒に食べる機会が少ない) 4) 親に子の支援(組織)への相談を提案する</p>	<p>子どもの心配ごと 支援者の活動</p>
<p>子どもだけで朝食を食べる子どもは、朝食の時刻や就寝時刻が遅く、便秘がちである割合が高かった。また、牛乳・乳製品、肉類、野菜類の摂取量が有意に低かった。</p> <p>朝食をよく食べる幼児では、起床時刻、朝食の時刻、就寝時刻が早い幼児の割合が高く、スナック菓子を除き各食品の摂取量が有意に高かった。</p> <p>・スナック菓子の摂取量が多いほど、食欲のない幼児が有意に高かった。</p>	<p>統計解析: χ^2検定、Welchの検定 調整変数: なし</p>	<p>共食状況 食欲 生活習慣 健康状態</p>	<p>生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康</p>	<p>生活習慣(就寝・起床時刻が遅い、食事のタイミングが遅い) 食事を食べる力(家族や保護者と一緒に食べる機会が少ない) 質(食品の種類、組み合わせがよくない) 身体的(便秘、食事時におなかがすいていない)</p>	<p>子どもの心配ごと 保護者の活動</p>
<ul style="list-style-type: none"> 共食頻度が高い群の子どもは、毎日排便し、間食の時間を決めていて、朝7時までに起床し、毎日屋外で遊び、好き嫌いがない者が多かった。 共食頻度が高い群の保護者は、食事中心に楽しい会話をし、はしの正しい持ち方をさせる、手伝いをさせる、偏食をしない者が多かった。 	<p>統計解析: クラスタ分析、χ^2検定 調整変数: なし</p>	<p>記載なし</p>	<p>生活 食事への関心・行動 発育・発達・健康</p>	<p>生活習慣(起床時刻が遅い、運動(外遊び)をしていない、間食時間が規則正しくない) 食事を食べる力(食べるものが偏る(好き嫌い)、家族や保護者と一緒に食べる機会が少ない) 身体的(排便習慣) 精神的(食事中に楽しい会話をし、自身の生活の理解(食生活スタイル(親の偏食)) 食事づくり・食べる力(箸の持ち方指導、手伝いをさせる)</p>	<p>子どもの心配ごと 保護者の活動</p>
<ul style="list-style-type: none"> 朝食の共食群は非共食群に比べて、食事時間を楽しんでいる、食事をおいしく食べている、毎日排便がある、嫌いなものも頑張って食べる、食事を残さず食べる、「いただきます」「ごちそうさま」のあいさつをする、食事の用意や後片付けを手伝う、よく噛んで味わって食べる、主食・主菜・副菜をそろえて食べることが1日に2回以上ある、ほとんど毎日朝食を食べる者の割合が高かった。 夕食の共食群は非共食群に比べて、主食・主菜・副菜をそろえて食べることが1日に2回以上ある者の割合が高かった。 	<p>統計解析: χ^2検定 調整変数: なし</p>	<p>共食頻度 幼児 食事 食意識 食行動</p>	<p>食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康</p>	<p>食事をつくる力(食事の準備や後片付けのお手伝い) 食事を食べる力(食事マナー、食べるものが偏る(嫌いでも努力して食べる、残さず食べる)、よく噛まない、家族や保護者と一緒に食べる機会が少ない) 量(食事の回数(朝食欠食)) 身体的(排便習慣) 精神的(食事を楽しく食べる、食事を美味しく食べる) 子の食事への関心・理解(栄養バランスへの配慮)</p>	<p>子どもの心配ごと 保護者の活動</p>
<p>・食行動の問題数の多さには、自閉症的傾向があること、味覚、聴覚が敏感であること、人的関わりが少ないこと、社会的サポートが少ないことと関連していた。</p>	<p>統計解析: 重回帰分析(ステップワイズ法) 調整変数: なし</p>	<p>食行動、自閉症的傾向、感覚特性、育児環境、養育者支援</p>	<p>生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康</p>	<p>4) 親に子の支援(組織)への相談を提案する 生活習慣(食事時間が規則正しくない) 食事を食べる力(食べるものが偏る、あそび食べがある(じっとしていられない)、だから食べる、よく噛まない、つめこむ、食具を使えない、すぐに飲み込まず口にとめる) 身体的(味覚、嗅覚、聴覚) 精神的(自閉症的傾向)</p>	<p>子どもの心配ごと 支援者の活動</p>

論文情報				調査対象		方法		調査項目					
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年	巻号	ページ	調査地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	研究デザイン/ 介入内容 期間	調査方法/ 介入内容	テーマに関連する 調査項目	アウトカム指標 (利点、重要性に関する調査 項目)	
107	白木 まさ子, 大村 雅美, 丸井 英二	幼児の偏食と生活環境との 関連	民族衛生	2008	74	6	249-289	静岡県	静岡市内19の公立 保育園に通う3~6 歳の園児を持つ保 護者1161人	横断研究	質問紙調査	体格 属性 健康状態 生活習慣 食事・間食の状況 離乳食の与え方 子どもの食事で日頃困って いること・気になること	偏食の有無
108	竹下 登紀子, 小嶋 汐美, 大村 雅美, 白木 まさ子	幼児の食・生活習慣・健康に ついての横断調査~母親の 食育への関心の有無による 検討~	日本栄養 士会雑誌	2016	59	8	24-32	静岡県	静岡市公立保育所 10か所で行った アンケート調査回答 者606名	横断研究	質問紙調査	母親の食育への関心の有 無	園児の健康状態、生活習 慣、食事の状況
109	平元 泉, 大高 麻衣子, 志賀 博	幼児・児童・生徒の咀嚼機能 の発達	日本咀嚼 学会雑誌	2018	28	1	28-35	秋田県	3歳以上の保育園 児638名	横断研究	質問紙調査	出生体重、身長・体重、齲歯 の有無、歯齡	咀嚼能力
110	佐藤 ななえ, 吉池 信男	実験食における咀嚼回数を 指標とする小児の咀嚼行動 に関連する因子の検討	栄養学雑 誌	2010	68	4	253- 262	岩手県	盛岡市の対象幼稚園 2園の5歳児61 名	横断研究	実測および質 問紙調査	身体状況、口腔診査、食事 に要した時間、咬合力、咀 嚼高度にかかわる生活習 慣・食習慣、日常の食事の 状況、周囲の大人の配慮の 状況	咀嚼回数
111	Okubo H, Murakami K, Masayasu S, Sasaki S	The relationship of eating rate and degree of chewing to body weight status among preschool children in Japan: A Nationwide cross-sectional study	Nutrients	2019	11	64		44県	374保育園に通う5 ~6歳の園児4451人	横断研究	質問紙調査	食べる速さ、かむ回数、栄養 素等摂取量(BDHFQ3y)、母親 と父親の体重と身長	体重、兄弟の数、身体活 動、出生時体重、エネルギー 摂取量、栄養素摂取 量、地域、両親の学歴、両 親の体重状態
112	服部 伸一, 足立 正, 嶋崎 博嗣, 三宅 孝昭	テレビ視聴時間の長短が幼 児の生活習慣に及ぼす影響 研究	小児保健 研究	2004	63	5	516-523	岡山県	岡山県内の公立保 育所4園と公立幼稚 園5園の3~5歳児 を持つ保護者459名	横断研究	質問紙調査	テレビ視聴時間	幼児の生活習慣

根拠となりうる研究結果		調査項目の分類				
	統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目	小項目	縦軸	
	<p>・3、4歳群、5、6歳群いずれも、食欲がない、夕食時間が決まっていない、親子で食事作りをすることが殆どない、離乳食において食品の種類を増やすことを心がけなかった幼児に偏食の割合が高かった。</p> <p>・3、4歳群では、虫歯がある、やせ、起床時刻が決まっていない、夕食時に主食、主菜、副菜を揃えることをあまり気にしない、間食を食べる場所が決まっていない、離乳食において薄味を心がけない、市販のベビーフードをよく利用した幼児に偏食の割合が高く、間食を食べない幼児で、偏食の割合が低かった。</p> <p>・5、6歳群では、就寝時刻が22～23時あるいは決まっていない、朝食を時々食べる、殆ど食べない、間食の時間が決まっていない幼児に偏食の割合が高かった。</p>	偏食、発育、母親の食意識	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	生活習慣(就寝・起床時間が遅い、食事時刻が規則正しくない(食事時刻・間食時刻を決めていない)) 食事を食べる力(食べるものが偏る) 量(食事・間食の回数(朝食欠食)) 質(ファーストフード・即席めん・加工食品が多い、食べたことのある食物の種類が少ない(離乳食で食品の種類を増やすことを心がけなかった)) 身体的(発育(やせ)、食事時におなかがいっぱい) 口腔機能(う歯) 食事づくり・食べる力(子どもと一緒につくることがない) 子の食事への関心・理解(子の味付けへの理解がない(薄味への配慮)、栄養バランスへの配慮)	子どもの心配ごと 保護者	
	<p>3～6歳児をもつ母親の食育への関心がない群では</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝食を毎日食べる幼児、 ・夕食時に主食・主菜・副菜をそろえることを心がける人 ・親子で食事作りをすることがある人 ・間食の場所・時刻を決めている人 ・離乳食を口の動きに合わせて、硬さ、形状を変えた人 ・離乳食で薄味を心がけた人 ・離乳食を口の動きを確認して食べさせた人 ・離乳食の食べ物の種類を増やすように心がけた人、の割合が少なく ・離乳食で市販のベビーフードを利用した人 ・食欲がないどちらともいえない幼児、の割合は多かった。 <p>・3～4歳児では母親の食育への関心がないほど、就寝時刻が決まっていない幼児の割合が増え、戸外遊びを好む幼児の割合は、関心が「有り」群と比較して、少なかった。</p>	統計解析: χ^2 検定 調整変数: なし	母親・食育・生活習慣	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	生活習慣(就寝・起床時間が遅い、運動(外遊び)をしていない、食事時刻が規則正しくない(食事時刻を決めていない)) 量(食事の回数(朝食欠食)) 質(ファーストフード・即席めん・加工食品が多い、食べたことのある食物の種類が少ない(離乳食で食品の種類を増やすことを心がけなかった)) 身体的(食事時におなかがいっぱい) 食事づくり・食べる力(子どもと一緒につくることがない) 子の食事への関心・理解(子の味付けへの理解がない(薄味への配慮)、栄養バランスへの配慮、食育への関心) 子の口腔機能を確認していない	子どもの心配ごと 保護者
	<p>・3歳児に比べて4歳児・5歳児は咀嚼能力が高く、成長とともに増加した。</p> <p>・児童や生徒を含めた解析では、年齢の段階が進んでいること、出生体重が2500g以上であること、齲歯が無いことが咀嚼能力の高さと関連していた。</p>	統計解析: 一元配置分散分析、Bonferroniの多重比較 調整変数: なし	咀嚼能力	発育・発達・健康	身体的(出生体重) 口腔機能(齲歯、咀嚼力、大臼歯・歯の萌出状況)	子どもの心配ごと
	<p>・肥満傾向であるほど食事時間が短く、かむ回数が少なかった。また「材料やおやつは、よく噛んで食べることを考えて選んでいる」という保護者の関わりが多いほど咀嚼回数が有意に多かった。</p> <p>・食事に要した時間では、「すぐに飲み込まず、いつまでも口の中に入れていたことがある」ほど長く、「よく噛まずに食べている」ほど短かった。</p>	統計解析: 重回帰分析(ステップワイズ法による変数選択を行った) 調整変数: なし	咀嚼行動	食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	食事を食べる力(だから食べる、速く食べる(食事に要する時間)、よく噛まない(咀嚼回数)、すぐに飲み込まず口にとめる) 身体的(発育(肥満度)) 子の食事への関心・理解(よく噛んで食べることを考えて食品を選ぶ)	子どもの心配ごと 保護者
	<p>・食べるのが速い子どもは、男の子、年齢が高い、身長が高い、体重が重い、多くの兄弟を持つ、身体活動量が多い、出生時体重が2500～3999g、エネルギー・炭水化物の摂取量が多い、脂質の摂取量が少ない、両親のBMIが25以上の者が多かった。</p> <p>・よく噛んで食べる子どもは、女の子、身体活動量が高い、身長が低い、体重が軽い、タンパク質・食物繊維の摂取量が多い者が多かった。</p> <p>・食べる速さが速い子どもほどBMI-Zスコアが高く、過体重の頻度が高く、やせの頻度が低かった。</p> <p>・よく噛む子どもほどBMI-Zスコアが低く、過体重の頻度が低かった。</p>	統計解析: ロジスティック回帰分析、スピアマンの相関係数、マンテル-ヘンツェル χ^2 検定 調整変数: 性別、年齢、兄弟の人数、身体活動、出生時体重、地域、両親の学歴、両親の体重状態、栄養素等摂取量	食べる速さ、かむ回数、体重	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	身体的(発育(肥満度、身長)、出生時体重) 質(栄養バランスが良くない、栄養素等摂取量) 食事を食べる力(速く食べる、よく噛まない) 生活習慣(兄弟の存在、身体活動量)	子どもの心配ごと 保護者
	<p>テレビ視聴時間が短いほど、排便習慣があり、大便後の手洗いの習慣があり、就寝時刻が午後9時までである割合が高く、就寝時刻と起床時刻に規則性があり、朝食摂取頻度が高く、朝食の質が高く、嫌いな食品が少なく、間食摂取時刻に規則性があり、園へ行く支度を自分でする頻度が高く、テレビ番組を決めて見ている頻度が高く、食事のテレビ視聴の頻度が低い者の割合が高い</p>	統計解析: χ^2 検定、一元配置の分散分析、多重比較(LSD法) 調整変数: なし	幼児、テレビ視聴時間、生活習慣	生活 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	生活習慣(就寝・起床時間が遅い、電子メディアの視聴時間が長い(テレビを見ながら食事をする習慣)、食事時間が規則正しくない、大便後の手洗い) 量(食事・間食の回数(朝食欠食)) 質(栄養バランスが良くない) 身体的(排便習慣)	子どもの心配ごと

論文情報					調査対象	方法	調査項目				
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年 巻 号	ページ	調査地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	研究デザイン/ 介入 期間	調査方法/ 介入内容	テーマに関連する 調査項目	アウトカム指標 (利益、重要性に関する調査 項目)
113	石原 融, 武田 康久, 水谷 隆史, 岡本 まさ子, 古川 美奈子, 田村 右内, 山田 七重, 成 順月, 中村 和彦, 飯島 純夫, 山縣 然太郎	思春期の肥満に対する乳幼児期の体格と生活習慣の関連 母子保健長期縦断研究から	日本公衆衛生雑誌	2003 50 2	106-117	山梨県塩山市	1987年4月から1991年3月に出生し、2001年1月に小学校4年生から中学校1年生である児童生徒737名	縦断研究 /10年11か月	質問紙調査	1歳6か月時と3歳時の体格、生活習慣、食物摂取頻度	思春期の体格(肥満度)
114	三藤 聡	尾道市における乳幼児のう蝕有病状況に影響を与える生活・環境要因について	口腔衛生学会雑誌	2006 56 5	688-708	広島県尾道市	3歳児健診受診者1167名	縦断研究 /1年6か月	1歳6か月健診3歳児健診 質問紙調査	〈1歳6か月健診〉 家庭環境、授乳状況、間食習慣、飲料の摂取状況、食事習慣、口腔清掃習慣、習癖および予防処置 〈3歳児健診〉 授乳状況を除く、上記と同じ	う蝕有病状況
115	武副 礼子, 平井 和子, 前田 昭子, 辻野 もと子, 山本 照子, 岡田 祥子, 樋口 寿, 岡本 佳子, 前田 雅子	幼児に対する健康管理と両親の健康認識	日本食生活学雑誌	2002 13 3	192-197	大阪府 奈良県 神奈川県	幼稚園と保育所に通う5～6歳児(男女各々大阪269名と277名、奈良130名と118名、神奈川79名と92名)とその両親(父母各々大阪425名と469名、奈良226名と233名、神奈川108名と147名)	横断研究	質問紙調査	排便頻度	食生活に関する意識、排便に関する意識
116	大木 薫, 稲山 貴代, 坂本 元子	幼児の肥満要因と母親の食意欲・食行動の関連性について	栄養学雑誌	2003 61 5	289-298	東京都	幼児健康診断を受診した保育所(園)児、幼稚園児245名(4、5歳児、男児119名、女児126名)	横断研究	質問紙調査	身体測定値、生化学検査値、食物摂取頻度、生活状況(子どもの生活状況、子どもの食行動、母親の食意欲、母親の食行動)	肥満度
117	井上 真美子, 米野 吉則, 西口 純子, 大平 曜子	幼児の咀嚼習慣に関する研究: 咀嚼態様、母親の食意欲との関連性	兵庫大短期大学部研究集録	2012	46 33-41	兵庫県	H幼稚園に通う3～5歳児225名(男児113名、女児112名)の母親	横断研究	質問紙調査	幼児の咀嚼習慣	咀嚼態様、健康状態、母親の食意欲
118	渋谷 由美子, 滝田 齋	幼児の心身の発達と生活習慣	日本小児科医学会報	2006	31 159-162	岡山県 香川県	幼稚園と保育所に通う3歳児120名(男児62名、女児58名)、5歳児125名(男児55名、女児70名)	横断研究	質問紙調査	幼児の生活習慣(就寝時刻、起床時刻、就寝時刻や起床時刻がほしい決まっているか、起床時は自分で起きるか、起床時の機嫌はどうか、朝食摂取の有無、朝食時刻、偏食の有無、残さず食べるか)	幼児の心身発達到達度

根拠となりうる研究結果		調査項目の分類			
	統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目 「発育・発達・健康」「食事・間食・飲料」「食事への関心・行動」「生活」	小項目	縦軸 「子どもの心配ごと」「保護者」「支援者の活動」
<ul style="list-style-type: none"> ・1歳6か月時の「室内で一人で遊ぶことが多い」、3歳時の「おやつ時間を決めずにもらっていた」は思春期の肥満のリスクであった。 ・「牛乳」摂取頻度高いほど、思春期の肥満のリスクが有意に低かった。 	統計解析：共分散構造解析 調整変数：性別、学年、3歳時のカフ指	思春期肥満、共分散構造解析、生活習慣、縦断研究、幼児健康診査、牛乳	生活 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	生活習慣(室内遊び、一人遊び、間食時間が規則正しくない) 量(飲料の種類と量を管理していない) 身体的(思春期の肥満)	子どもの心配ごと
<ul style="list-style-type: none"> ・1歳6か月時および3歳時ともに祖父母と同居していた群の有病率は、1歳6か月時、3歳時ともに同居していなかった群の有病率に比較して有意に高かった。 ・1歳6か月児の間食回数が少ないほど3歳時の有病率が低かった。 ・1歳6か月時および3歳時ともに間食の規則性が「無し」群の有病率は、ともに規則性が「有り」群の有病率に比較して高かった。 ・ジュースの摂取頻度、ジュースの1日摂取量、スポーツ飲料の摂取頻度が多いほど有病率が高かった。 ・食事中にテレビを見ていた群の有病率は、食事中にテレビを見ない群の有病率に比較して有意に高かった。 ・就寝前に飲食をしていた群の有病率は、就寝前の飲食をしていなかった群の有病率に比較して有意に高かった。 ・3歳時に仕上げ磨きを毎日していないと、有病率が高かった。 ・吸指癖「無し」の群の有病率は、吸指癖「有り」の群の有病率に比較して有意に高かった。 	統計解析： χ^2 検定、ロジスティック回帰分析 調整変数：	乳幼児歯科保健、質問紙調査、生活・環境要因、ロジスティック回帰分析	生活 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	生活習慣(電子メディアの視聴時間が長い(テレビを見ながら食事をする習慣)、食事時間が規則正しくない(食事時刻・間食時刻をきめていない)、食事のタイミングが遅い(夜食)) 量(間食の回数、飲料の種類と量を管理していない) 身体的(指しゃぶり) 口腔機能(舌触、仕上げ磨きをしていない) 自身の生活の理解(祖父母の存在)	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> ・幼児、父親、母親ともに排便回数の少ないものほど「健康に適した食生活」に対する認識が低かった。 	統計解析： χ^2 検定 調整変数：なし	記載なし	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	自身の生活の理解(自分自身の健康管理に関する認識) 身体的(排便習慣) 子の食事への関心・理解(子の食事量・味付け・食べ方の理解がない)	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> ・母親からみた子どもの食事の様子は、非肥満群において「だから食いが有意に高く、肥満群において「早食い」が有意に高かった。 ・肥満群の母親は、母親からみて「子どもの食事量が多い」と考え、子どもが肥満した場合「食事量を減らす」という対応をとるものが多くみられた。また、子どもの体重を知っている母親が少なく、離乳食をその母親が与えていたケースが少なかった。 ・母親の食意識や食行動に関する第1因子「食事の与え方」(間食の時間を決めている、食事は欲しだけ与える、間食の量を決めている、離乳食の量を決めている、間食の選択は大人がする)は、子どもの「夕食を毎日食べる」「食事が楽しみ」との間に正の相関が、「夕食後さらに食べる」との間に負の相関がみられた。 ・母親の食意識や食行動に関する第2因子「栄養表示への関心」は、子どもの「屋内で遊ぶ」との間に負の相関が、「よく噛む」との間に正の相関がみられた。 ・母親の食意識や食行動に関する第3因子「食事の減量およびカロリー重視」は、子どもの「夕食後さらに食べる」「食事が楽しみ」「早食い」との間に正の相関が、「だから食いが良い」「固いものが苦手」との間に負の相関がみられた。 ・母親の食意識や食行動に関する第4因子「外食・中食の利用」は、子どもの「夕食後さらに食べる」との間に正の相関が、「食事が楽しみ」との間に負の相関がみられた。 	統計解析： t 検定、 χ^2 検定、主成分分析、バリマックス回転法、 t 検定 調整変数：なし	肥満の子ども、子どもの食習慣、母親の食意識、主成分分析	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	生活習慣(室内遊び、食事時刻・間食時刻を決めていない、食事のタイミングが遅い(夜食)) 食事を食べる力(だから食べる、速く食べる、よく噛まない) 質(外食) 身体的(発育(肥満度)) 口腔機能(噛みにくい) 精神的(食事が楽しくなさそう) 子の食事への関心・理解(子の食事量・食べ方の理解がない) 子の身体的健康を確認していない	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> 〈幼児の咀嚼習慣と咀嚼態と関連性〉 ・幼児の咀嚼習慣において、噛んでいる群は噛んでいない群に比べて、早食いでない児の割合が高かった。 ・幼児の硬い食べ物の摂取において、硬い食べ物食べている群は食べていない群に比べて、片噛みでない児、口の中に溜める傾向のない児、偏食でない児、食欲のある児の割合が高かった。 〈幼児の咀嚼習慣と健康状態との関連性〉 ・幼児の硬い食べ物の摂取において、硬い食べ物食べている群は食べていない群に比べて、腹痛がない児の割合が高かった。 ・幼児の口を開けて食べる状態において、口を開けていない群は口を開ける群に比べて、口呼吸でない児の割合が高かった。 〈幼児の咀嚼習慣と母親の食意識との関連性〉 ・幼児の硬い食べ物の摂取において、食べている群は食べていない群に比べて、硬いものを食事に入れる母親、ゆっくり食事をする母親、姿勢を意識する母親、調理を工夫する母親の割合が高かった。 	統計解析： χ^2 検定 調整変数：なし	幼児、咀嚼、母親の食意識	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	食事を食べる力(食事マナー、食べるものが偏る、速く食べる、咀嚼回数、片噛み、口ためる) 質(食品・料理の種類・組み合わせが良くない(堅い食べ物)) 身体的(健康(腹痛)、癖(口呼吸)、食事時におなかがすいていない) 自身の生活の理解(ゆっくり食べる、姿勢を意識する) 食事づくり・食べる力(調理の工夫) 子の食事への関心・理解(硬いものを食べさせる)	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> ・3歳児の朝食欠食児の割合は、上位群(発達到達度90%以上)に比べて下位群(発達到達度90%未満)で有意に高かった。 ・3歳児の食事を残す幼児の割合は、上位群に比べて下位群で有意に高かった。 ・3歳児の偏食のある幼児の割合は、上位群に比べて下位群で有意に高かった。 ・5歳児の朝食開始時刻が午前7時30分以前の幼児の割合は、下位群に比べ上位群で有意に高かった。 ・5歳児の食事を残す幼児の割合は、上位群に比べ下位群で有意に高かった。 	統計解析： χ^2 検定 調整変数：なし	幼児、発達到達度	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	生活習慣(食事のタイミングが遅い) 食事を食べる力(食べるものが偏る) 量(食べる量が少ない・多い、喫食率、食事の回数(朝食欠食)) 身体的(発育)	子どもの心配ごと

論文情報				調査対象	方法	調査項目							
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年	巻号	ページ	調査地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	研究デザイン/ 介入期間	調査方法/ 介入内容	テーマに関連する 調査項目	アウトカム指標 (利点、重要性に関する調査 項目)	
119	関根 道和, 山上 孝司, 沼田 直子, 濱西 島子, 陳 曉莉, 飯田 恭子, 斎藤 女博, 川南 勝彦, 箕輪 眞澄, 徳井 教孝, 吉村 健清, 徳村 光昭, 南里 清一郎, 杉 森 裕樹, 吉田 勝美, 鏡森 定信	3歳時の生活習慣と小学4年時の肥満に関する6年間の追跡研究—富山出生コホート研究の結果より	厚生指	2001	48	8	14-21	富山県	3歳児健診時に富山県在住の6,762人(男児3,405人、女児3,357人)調査開始時の平均年齢は3.4歳(2.5歳~4.3歳)	コホート研究/追跡期間6.3年	質問紙調査	3歳児健診時の両親の体格、児童の体格、児童の食習慣、運動習慣、睡眠習慣、食事内容	小学4年生時の児童の体格(BMI)
120	泉 秀生, 前橋 明, 町田 和彦	朝の排便時間帯別にみた保育園5-6歳児の生活実態	厚生指 標(0452-6104)	2011	58	13	7-11	埼玉県、東京都、神奈川県、富山県、石川県、岡山県、香川県、高知県、沖縄県	保育園5-6歳児のうち、排便実態状況に関して「定時にする」と答えた幼児565名の保護者	横断研究	質問紙調査	排便実施状況、排便時刻	就寝時刻、起床時刻、起床時の機嫌、朝食開始時刻、朝食時のテレビ視聴状況、登園のために家をでる時刻、帰宅後のテレビ・ビデオ視聴時間、夕食開始時刻、夕食後のおやつ摂取状況
121	今井 具子, 加藤 美樹, 金城 安裕, 奈, 近藤 彩乃, 園田 悠貴	園児に対する自記式チェックカレンダーを用いた「早寝・早起き・朝ごはん」食育活動の有効性	日本未病システム学会雑誌	2010	15	2	312-316	愛知県	保育園・幼稚園に通う園児71名(男児36名、女児35名)とその保護者	前後比較 /約2~4 か月	質問紙調査、 自記式「早寝・早起き・朝ごはん」チェックカレンダーへの記録	食事、生活習慣等	食育活動前後の園児の生活状況
122	杉浦 令子, 坂本 元子, 村田 光範	幼児期の生活習慣病リスクに関する研究	栄養学雑誌	2007	65	2	67-73	東京都	Y市にある保育園、保育所、幼稚園に通園し、1984~2002年の小児生活習慣病予防健診に参加した4~6歳の幼児5,001名(男児2,631名、女児2,470名)	横断研究	質問紙調査	食習慣調査、生活状況調査	身長・体重(肥満度)、血中総コレステロール値
123	Chei ChoyLye, Toyokawa Satoshi, Kano Katsumi	茨城県の就学前児童における食習慣と肥満の関係 Relationship between eating habits and obesity among preschool children in Ibaraki Prefecture, Japan	民族衛生	2005	71	2	73-82	茨城県	未就学児(3~6歳)2,408名	横断研究	質問紙調査	基本属性、幼児の食習慣、母親の就業状況、幼児の生活環境	BMI
124	米山 京子, 池田 順子	幼児の生活行動および疲労症状発現度との関係	小児保健研究	2005	64	3	385-396	奈良県	奈良市および近郊都市の幼稚園4園、保育園3園の3~6歳児624名(男児324名、女児300名)	横断研究	質問紙調査	起床・就寝を含む社会生活、食行動及び各種食品、嗜好品の摂取状況、体格	疲労症状
125	徳村 光昭, 南里 清一郎, 関根 道和, 鏡森 定信	朝食欠食と小児肥満の関係	日本小児科学会雑誌	2004	108	12	1487-1494	富山県	3歳時9,426名、小学1年時9,472名、小学4年時6,252名、中学1年時6,098名	縦断研究 /12年	質問紙調査	朝食摂取、生活習慣、食習慣	肥満度

根拠となりうる研究結果		調査項目の分類			
	統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目 「発育・発達・健康」「食事・間食・飲料」「食事への関心・行動」「生活」	小項目	縦軸 「子どもの心配ごと」「保護者の活動」
<p>・3歳児健診時に児童・父親・母親が肥満の場合、小学4年生時の児童の肥満のオッズ比は有意に高値であった。</p> <p>・3歳児健診時の食事内容で、卵類、インスタント麺類、ファストフード類の摂取頻度が高いほど、小学4年生時の児童の肥満のオッズ比は高値であった。逆に野菜類は、摂取頻度が低い場合に肥満のオッズ比は高値であった。</p> <p>・3歳児健診時の生活習慣で、間食時間を決めていないほど小学4年生時の児童の肥満のオッズ比は高値であった。</p> <p>・就寝時刻が遅くなるほど、また、睡眠時間が短くなるほど肥満のオッズ比は高値であった。</p>	<p>統計解析:対応のないt検定、χ^2検定、ロジスティック回帰分析、単変量解析、多変量解析、Hosmer-Lemeshow検定</p> <p>調整変数:多変量解析では初回調査時の年齢、性、児童・両親の肥満の有無、追跡期間を調整した。</p>	<p>小児肥満、食習慣、運動習慣、睡眠習慣、コホート研究、富山スタディ</p>	<p>生活 食事・間食・飲料 発育・発達・健康</p>	<p>生活習慣(就寝・起床時間が遅い、間食時刻を決めていない) 質(食品・料理の種類・組み合わせが良くない) 身体的(発育(思春期の肥満)) 自身の生活の理解(親の肥満度)</p>	<p>子どもの心配ごと 保護者</p>
<p>排便状況別にみた平均生活時間 「登校前排便児」の方が、「降園後排便児」と比べて、夕食開始時刻、就寝時刻、起床時刻、朝食開始時刻は有意に早く、睡眠時間は有意に長く、帰宅後のテレビ・ビデオ視聴時間は短かった。</p> <p>朝の排便状況別にみた生活実態 ・男児において「登校前排便児」の方が、「降園後排便児」と比べて朝食時にテレビを「見ないときが多い」「見ない」、夕食後のおやつを「食べないときが多い」「食べない」幼児が有意に多かった。</p>	<p>統計解析:対応のないt検定、χ^2検定</p> <p>調整変数:なし</p>	<p>保育園児、排便状況、起床時刻、登園時刻、朝食開始時刻</p>	<p>生活 食事・間食・飲料 発育・発達・健康</p>	<p>生活習慣(就寝・起床時間が遅い、電子メディアの視聴時間が長い(テレビを見ながら食事をする習慣)) 量的(間食の回数) 身体的(排便習慣)</p>	<p>子どもの心配ごと 保護者</p>
<p>「カレンダーへの記録活動後は、「機嫌よく起きる」「食欲がある」「食事中によく話す」「食事中にテレビをあまり見ない」「おやつの量や時間を決めている」「栄養バランスを考えて食品・料理を選ぶ」対象者の割合が有意に増加した。</p>	<p>統計解析:Fisherの正確検定</p> <p>調整変数:なし</p>	<p>質問紙法、食行動、保育所、幼児、栄養士、食育、チェックリスト、幼稚園</p>	<p>生活 食事・間食・飲料 発育・発達・健康</p>	<p>生活習慣(起床の方法、電子メディアの視聴時間が長い(テレビを見ながら食事をする習慣)) 身体的(食事時におなかすいていない) 精神的(食事が楽しくなさそう(食事中に楽しい会話をする)) 子の食事への関心・理解(栄養バランスへの配慮、間食の種類・量を決めていない) 2)親に子の食生活への関心をもってもらう(食育) 4)親に子の生活習慣を見直してもらい、自身の生活習慣の子の食生活への影響を理解してもらう</p>	<p>子どもの心配ごと 保護者 支援者の活動</p>
<p>・ほとんどの食物・栄養素等で摂取量は肥満群の方が非肥満群よりも多く、特に肉類、豆類、主食類の摂取量は肥満群の方が有意に高値を示した。また、エネルギーおよび三大栄養素の摂取においても肥満群の方が有意に高値を示した。</p> <p>・ほとんどの食物・栄養素等で高TC群の摂取量の方が少なく、特に野菜類、果物類の摂取量では、正常群に比べ高TC群は有意に低値を示したが、卵類、乳類では高TC群の方が有意に高値であった。また、エネルギーおよび三大栄養素の摂取においても高TC群の方が有意に低値を示した。</p> <p>・食品群別および栄養素等摂取量と肥満度の相関を検討したところ、肥満度と肉類、豆類、野菜類、果物類、イモ類の摂取量との間に有意な正の相関、乳類の摂取量との間に有意な負の相関が認められた。</p> <p>・食品群別および栄養素等摂取量とTC値との相関を検討したところ、TC値と乳類の摂取量との間に有意な正の相関、魚類、豆類、野菜類、イモ類、砂糖類、エネルギー、タンパク質、脂質、炭水化物、鉄の摂取量との間に有意な負の相関が認められた。</p>	<p>統計解析:対応のないt検定、Pearsonの相関係数</p> <p>調整変数:なし</p>	<p>幼児、生活習慣病リスク、肥満、高コレステロール値、栄養教育</p>	<p>食事・間食・飲料 発育・発達・健康</p>	<p>量(食べる量が少ない/多い) 質(栄養素等摂取量、食品・料理の組み合わせが良くない) 身体的(発育(肥満度)、脂質代謝に関わる検査値が良くない)</p>	<p>子どもの心配ごと</p>
<p>・よく噛まない、食事にあまり遊ばないといった食習慣がある子どもは肥満のリスクが高かった。</p>	<p>統計解析:ロジスティック回帰分析</p> <p>調整変数:なし</p>	<p>質問紙法、食行動、ライフスタイル、摂食、咀嚼、断面研究、肥満、有病率、幼児、BMI、茨城県</p>	<p>食事への関心・行動 発育・発達・健康</p>	<p>食事を食べる力(あそび食べがある、よく噛まない) 身体的(発育(肥満度))</p>	<p>子どもの心配ごと</p>
<p>・食行動と疲労度との関係について、幼稚園児では「欠食あり」「夕食時間が決まっていない」「食事が楽しみでない」「おやつは欲しい時欲しいだけ」の場合に、疲労度「高い」の比率が高かった。保育園児では「欠食あり」「おやつは欲しい時欲しいだけ」の場合に疲労度「高い」が高かった。</p> <p>・園別食品摂取得点と疲労度の関係について、幼稚園児では疲労度「高い」群では、バランス得点が低く、ジュース類およびスナック菓子摂る頻度が多かった。保育園児では疲労度「高い」群ではジュース類を摂る頻度が多かった。</p> <p>・生活パターンと疲労症状発現度との関係について、生活時間に規律性がなく、食生活に問題(バランス得点が低い、ジュース類の摂取頻度が多い)があるパターンで疲労度が高かった。</p>	<p>統計解析:t検定、Mann-WhitneyのU検定、χ^2検定、多変量ロジスティック回帰分析</p> <p>調整変数:なし</p>	<p>食行動、食事調査、ライフスタイル、発生率、疲労度、保育所、幼児、幼稚園</p>	<p>生活 食事・間食・飲料 発育・発達・健康</p>	<p>生活習慣(就寝・起床時間が遅い、食事時刻を決めていない) 量(食事・間食の回数、飲料の種類と量を管理していない) 質(栄養バランスが良くない、食事と間食(甘いもの)に気を付けていない) 身体的(疲労度) 精神的(食事が楽しくなさそう)</p>	<p>子どもの心配ごと</p>
<p>・朝食を欠食する児の身長は3歳時から小学4年時にかけて低値を呈した。体重は、3歳時および小学1年時では低値を呈したが、小学4年時および中学1年時では肥満児出現率が有意に高かった。</p> <p>・朝食を欠食する児は、3歳時から「起床時刻が遅い」「就寝時刻が遅い」「夜食頻度が多い」「間食頻度が多い」「外食頻度が多い」「インスタント類を食べる頻度が多い」「母と朝食を食べない者が多い」傾向が認められた。</p> <p>・いずれの年代においても、両親の肥満群では肥満児頻度が最も高く、特に母親が肥満を呈し、かつ朝食を欠食する児において、肥満児頻度が顕著に高値である傾向が認められた。</p>	<p>統計解析:t検定、Mann-WhitneyのU検定、χ^2検定、多変量ロジスティック回帰分析</p> <p>調整変数:なし</p>	<p>質問紙法、コホート研究、小児、食行動、ライフスタイル、肥満、高山県</p>	<p>生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康</p>	<p>生活習慣(就寝・起床時間が遅い、食事のタイムラグが遅い(夜食)) 食事を食べる力(家族や保護者と一緒に食べる機会が少ない) 量(食事・間食の回数(朝食欠食)) 質(ファストフード・即席めん・加工食品が多い、外食) 身体的(発育(身長、肥満度)) 自身の生活の理解(親の肥満度)</p>	<p>子どもの心配ごと 保護者</p>

論文情報				調査対象	方法	調査項目						
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年	巻号	ページ	調査地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	研究デザイン/ 介入期間	調査方法/ 介入内容	テーマに関連する 調査項目	アウトカム指標 (利点、重要性に関する調査 項目)
126	長谷川 智子, 今田 純雄	幼児の食行動の問題と母子関係についての因果モデルの検討	小児保健研究	2004	63	6	626-634 東京都	都内私立幼稚園に在園する4歳児の母親(男児51名、女児60名)、5歳児の母親(男児47名、女児33名)の計191名	横断研究	質問紙調査	日常場面での行動、健康、子どもの食事に対する母親の態度、母親の子どもへの対応、母親のストレスに関する項目	子どもの食行動の問題
127	細谷 京子, 堀込和代, 下村 洋之助, 富岡 千寿子, 高橋 美恵子, 森田 美恵子, 下山 郁子, 鬼形 和道	K村における5歳児の小児生活習慣病検査結果と生活習慣との関連	小児看護 (0386-6289)	2003	26	4	521-527 群馬県	平成12年度小児生活習慣病検査の対象児90名(男児57名、女児33名)	横断研究	質問紙調査	対象児の生活背景と食事、睡眠、遊び、テレビ視聴時間等、母親の就業状況	小児生活習慣病検査結果
128	光岡 攝子, 堀井理司, 大村 典子, 笠柄 みどり, 鈴木 雅裕, 小峠 睦美	「幼児用疲労症状調査」からみた幼児の疲労と日常生活状況との関連	小児保健研究	2003	62	1	81-87 青森県、島根県、山口県	幼稚園児4・5歳児468名(男児231名、女児237名)	横断研究	質問紙調査	基本的な生活習慣	疲労症状
129	小林 美智子, 松永 恵子, 島田 友子	育児のQOLについての一考察 三歳児の身体意識と母親のQOL	Quality of Life Journal	2002	13	1	60-71 長崎県	3歳児健診受診者587名(男児324名、女児263名)とその保護者	横断研究	健診時の面接による身体意識調査、QOL質問票	身体部位・動作語認識能力、運動、身体イメージ形成	QOL
130	西田 弘之, 鷲野 嘉映, 竹本 康史, 春日 晃章, 横山 強, 杉浦 春雄, 中神 勝	幼稚園女児の踵骨骨質評価値とその関連因子 母親との類似性を中心に	民族衛生	2001	67	6	269-276 岐阜県	岐阜市内H幼稚園の女児82名(3歳児18名、4歳児35名、5歳児29名)とその母親	横断研究	骨量測定、質問紙調査	生育歴、身体状況、生活習慣、食生活(食欲の程度、偏食の有無、最近6か月の食品群別過当り摂取頻度)、体の丈夫さ、活発度	音響的骨質評価値
131	小松 啓子, 岡村 真理子	偏った食生活を伴う幼児達の生活習慣と健康について	チャイルドヘルス	2001	4	11	846-849 福岡県	保育所(園)に通う3～6歳の幼児5,490名	横断研究	質問紙調査	菓子類への依存状況 ※お菓子ばかり食べて食事を食べないという訴えがみられたお菓子依存群(依存群)と、何ら食行動に問題がみられなかった食行動良好群を(良好群)を比較した。	食事の様子、朝食の摂取状況、生活リズム、健康状況、排便状況
132	Miyake Takaaki, Matsuura Yoshimasa, Shimizu Norinaga	Study of the Effect of Life Circumstances on Body Temperature in Infants	学校保健研究	2001	43	4	309-312 東京都、大阪府、山口県	健康な幼児527名	横断研究	体温測定、生活習慣調査	居住形態、家族構成、遊びや運動などの生活習慣	幼児の体温
133	秋本 光子, 尾崎 正雄, 住吉 彩子, 渡辺 滋子, 宮崎 修一, 豊村 純弘, 石田 万喜子, 本川 涉	3歳児歯科健診での咀嚼習慣に関するアンケート調査 咀嚼傾向とその背景要因について	小児歯科学雑誌	2000	38	3	576-583 福岡県福岡市	3歳児健診に来所し、歯科検査を受診した幼児の保護者(男児239名、女子215名)	横断研究	質問紙調査	咀嚼能力健康調査票(咀嚼に関する23項目) 粗咀嚼群(食べる時、よく噛んで食べることができない)、平均咀嚼群、精咀嚼群(食べるとき、よく噛んで食べることができる)の3群に分類	食事状況、嗜好性、生活、体質傾向、神経質傾向、離乳食、家庭における食生活、健診結果
134	鏡森 定信, 山上 孝司, 関根 道和	小児期からの健康的なライフスタイルの確立に関する研究 3歳時の生活習慣と小学4年生時の肥満化に関する6年間の追跡研究	医報とやま	2000	1261	20-21	富山県	平成元年度生まれの3歳児健診時に富山県在住の児童6,113名	コホート研究/追跡期間6.1年	体格測定、質問紙調査	3歳時の食習慣、運動習慣、睡眠習慣、両親の体格	小学4年生時の児童の体格(BMI)

根拠となりうる研究結果		調査項目の分類			
	統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目 「発育・発達・健康」「食事・間食・飲料」「食事への関心・行動」「生活」	小項目	縦軸 「子どもの心配ごと」「保護者」「支援者の活動」
・幼児の食行動の問題(食物選択の幅の狭さ、食事中の気の散りやすさ)に直接的に影響を与えた要因は、「幼児の体調不良」「幼児の日常における気の散りやすさ」「母親の食事への配慮」であり、間接的に影響を与えた要因は、「母親の育児不安」「母親の精神的ストレス」であった。	統計解析:共分散構造分析 調整変数:なし	質問紙法、因子分析、食行動、心理的ストレス、母、不安、母子関係、幼児、共分散構造分析	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	食事を食べる力(食べるものが偏る、あそび食べがある) 身体的(健康状態(体調不良)) 精神的(気が散りやすい) 自身の生活の理解(育児不安、精神的ストレス) 子の食事への関心・理解(子の食事量・味付け・食べ方の理解がない)	子どもの心配ごと 保護者
※以下、検診項目の肥満度、T-C、TG、動脈硬化指数について異常値が1項目以上ある児をA群、4項目とも正常値であった児をB群とした。 ・就業している母親の児は専業主婦の児に比べて、睡眠時間が有意に短かった。 ・就業している母親の児は専業主婦の児に比べて、A群の割合が有意に高かった。 ・A群児の1日のテレビ視聴時間はB群児に比べて有意に長かった。 ・A群児の休日の屋内遊びの平均時間はB群児に比べて有意に長かった。 ・B群児のよくする外遊びの数はA群児に比べて有意に多かった。	統計解析:t検定、 χ^2 検定 調整変数:なし	Cholesterol(血液)、Triglycerides(血液)、質問紙法、家族特性、ライフスタイル、動脈硬化症、肥満指数、診断サービス、幼児、生活習慣病(診断)	生活 発育・発達・健康	生活習慣(就寝・起床時間が遅い、運動(外遊び)をしていない、室内遊び、電子メディアの視聴時間が長い) 身体的(脂質代謝に関わる血液検査値が良くない) 自身の生活の理解(就労状況)	子どもの心配ごと 保護者
・高疲労群(疲労得点が平均値+標準偏差より高い子ども)において、「朝食を摂取しない」「偏食が多い」と答えた子どもの割合が高く、食事量も有意に少なかった。	統計解析:t検定、分散分析、 χ^2 検定、因子分析(交互回転・バリマックス法) 調整変数:なし	質問紙法、因子分析、遊戯と玩具、食行動、睡眠、ライフスタイル、徴候と症状、テレビジョン、*疲労、幼児	食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	食事を食べる力(食べるものが偏る) 量(食べる量が少ない、食事の回数(朝食欠食)) 身体的(健康状態(疲労度))	子どもの心配ごと 保護者
・子どもの身体面の面積や描画得点は、母親のQOL得点の「身体領域」「経済」「子どもの食事づくり」と正の相関がみられた。	統計解析:t検定、Spearmanの順位相関係数、プロマックス法による因子分析 調整変数:なし	育児、身体、生活の質、母、幼児、意識調査、イメージ(知覚)	生活 食事への関心・行動 発育・発達・健康	身体的(身体意識) 自身の生活の理解(親の健康) 食事づくり・食べる力(食事づくりの得意・不得意さ)	子どもの心配ごと 保護者
・幼児の骨評価値は、「幼児の活発度」「母親の骨評価値」と正の相関が示された。	統計解析:一元配置分散分析、Scheffeの多重比較 調整変数:なし	質問紙法、回帰分析、骨粗鬆症(予防)、骨密度、踵骨(超音波診断)、ライフスタイル、母、幼児	生活 発育・発達・健康	生活習慣(活発度) 身体的(骨評価値) 自身の生活の理解(親の骨評価値)	子どもの心配ごと 保護者
・朝食を毎日食べると回答した者は、依存群は良好群に比べて有意に少なかった。 ・依存群は良好群に比べて、就寝時刻、起床時刻、朝食時刻、夕食時刻は有意に遅かった。 ・毎日排便があると回答した者は、依存群は良好群に比べて有意に少なかった。 ・依存群は良好群に比べて、風邪をひきやすい、顔色が悪い、疲れやすい、痩せすぎている、たびたび下痢や腹痛を訴える者が有意に多かった。	統計解析:記載なし 調整変数:なし	健康調査、食行動、ライフスタイル、排便、幼児	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	生活習慣(就寝・起床時間が遅い、食事のタイムラグが遅い) 食事を食べる力(食べるものが偏る) 量(食事の回数(朝食欠食)) 身体的(発育(やせ)、排便習慣(下痢)、健康状態(腹痛、疲労度、風邪をひきやすい、顔色が悪い))	子どもの心配ごと 保護者
・低体温に及ぼす生活環境因子として、22時以降の就寝、1日2時間以上のテレビ鑑賞、1日の平均睡眠時間が10時間未満、自然覚醒ではない、不規則な食生活と朝食の欠食が挙げられた。	統計解析:t検定、 χ^2 検定 調整変数:なし	環境、食事、睡眠、体温、体温変化、低体温症、幼児	生活 食事・間食・飲料	生活習慣(就寝・起床時間が遅い、電子メディアの視聴時間が長い、食事時間が規則正しくない) 量(食事の回数(朝食欠食)) 身体的(体温)	子どもの心配ごと 保護者
・食事状況において、粗咀嚼群は精咀嚼群に比べて、「いつも遊びながら食べている」「食事中は席を立つ」「3度の食事時間にはいつも食欲がない」「食べ物の好き嫌いが多い方である」「口を食器に近づけて食べる癖がある」「自分でお箸を持って食事ができない」の平均点が有意に低かった。(低い=その項目があてはまる) ・嗜好性において、粗咀嚼群は精咀嚼群に比べて、「肉類の方を好んで食べている」「野菜は嫌いである」「濃い味付けの方を好んで食べている」「食べにくいもの(ミンチ以外の肉や野菜)を嫌がる」「軟らかい食べ物の方が好きである」「歯ごたえのある食べ物の方が嫌いである」の平均点が有意に低かった。 ・離乳食において、粗咀嚼群は精咀嚼群に比べて、「2歳2か月頃、奥歯ですりつぶすものを食べなかった」「1歳8か月頃、食べて引きちぎるものを食べなかった」「1歳を過ぎても、主にお粥と同じ硬さのものを食べていた」「10か月を過ぎても、主に豆腐と同じ硬さのものを食べていた」「8か月を過ぎても、主にうらごしたドロドロ状のものを食べていた」「1歳までの離乳食に塊となったものを食べなかった」の平均点が有意に低かった。 ・家庭における食生活において、粗咀嚼群は精咀嚼群に比べて、「食事は特に栄養のバランスや食事量に注意して食べさせているわけではない」「1週間に献立で和食より洋食を多く作る」「インスタント食品やレトルト食品をよく利用する」「食事を感謝して食べるようにしつづけは厳しくない」の平均点が有意に低かった。	統計解析:因子分析、主因子法、バリマックス法、 χ^2 検定、t検定 調整変数:なし	質問紙法、口腔保健、習慣、食物の嗜好、咀嚼、幼児	食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	食事を食べる力(食事マナー、食べるものが偏る、あそび食べがある、よく噛まない、食具を使えない) 質(栄養バランスが良くない、食品・料理の種類・組み合わせが良くない(離乳食・堅い食べ物)、ファストフード・即席めん・加工食品が多い) 身体的(食事時におなかがすいていない) 子の食事への関心・理解(栄養バランスへの配慮、保護者による食育)	子どもの心配ごと 保護者
・小学4年生時の肥満化に関連する因子として、3歳時の「父の肥満」「母の肥満」「魚類摂取が少ない」「野菜の摂取が少ない」「大豆類の摂取が少ない」「粥類の摂取が多い」「インスタント種の摂取が多い」「ファーストフードの摂取が多い」「朝食の欠食」「不規則な間食」「就寝時刻が遅い」「睡眠時間が短い」が量反応関係を認める有意な因子であった。	統計解析:ロジスティック回帰分析、多変量解析 調整変数:初回の年齢、性別、追跡期間、両親の体格	健康、健康調査、小児、ライフスタイル調査・実態、追跡研究、肥満(病因・予防)、予防医学、富山県	生活 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	生活習慣(就寝・起床時間が遅い、間食時刻を決めていない) 量(食事の回数(朝食欠食)) 質(食品・料理の種類・組み合わせが良くない、ファストフード・即席めん・加工食品が多い) 身体的(発育(肥満度)) 自身の生活の理解(親の肥満度)	子どもの心配ごと 保護者

論文情報						調査対象	方法	調査項目					
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年	巻号	ページ	調査地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	研究デザイン/ 介入期間	調査方法/ 介入内容	テーマに関連する 調査項目	アウトカム指標 (利点、重要性に関する調査 項目)	
135	落合 富美江, 松浦 義行	幼児における体格と生活諸条件の関連 カウプ指数による検討	小児保健研究	2000	59	3	395-404	静岡県、愛知県、大阪府	幼稚園及び保育園の園児の母親388名(男児210名、女児178名)	横断研究	質問紙調査	幼児の身長・体重・発育現量値、母親の生活意識、母親の養育態度、幼児自身の生活状況	カウプ指数
136	金成 由美子, 杉浦 ミドリ, 福島 匡昭	3歳児の食行動「食が細い」の背景因子の検討	福島医学雑誌	2000	50	1	25-31	福島県	3歳児健康診査受診者811名(男児401名、女児410名)	横断研究	質問紙調査	食の細さ	食行動、生活行動
137	沼田 直子, 山上 孝司, そうけ島 茂, 鏡森 定信	幼児期から小児期における体格変化の推移と特に過体重に及ぼす生活習慣要因について	日本循環器管理研究協議会雑誌	2000	35	1	35-43	富山県	3歳時、小学1年の同時点での体重・身長データを入手できた8,364名	コホート研究/追跡期間6.3年	質問紙調査	生活習慣	体格
138	木浪 智佳子, 萬美奈子, 三国 久美	子どもの体格と子どもの生活習慣や体型に関する親の認識との関連	北海道医療大学看護福祉学部学会誌	2008	4	1	29-34	不明	A市内の7つの幼稚園と4つの保育園に通う4~6歳児916人	横断研究	質問紙調査	基本属性、体格、子どもの生活習慣や体型に関する親の認識	カウプ指数
139	Motohide Goto, Yukio Yamamoto, Reiko Saito, Yoshihisa Fujino, Susumu Ueno, Koichi Kusahara	The effect of environmental factors in childcare facilities and individual lifestyle on obesity among Japanese preschool children: a multivariate multilevel analysis	Medicine	2019	98	41	e17490	北九州市	北九州市の幼稚園と保育園56施設の4~6歳の子供2902人	横断研究	質問紙調査	BMI、妊娠中の体重増加量、乳児時の栄養方法、テレビ視聴時間、朝食習慣、朝食欠食、夜食摂取、主食としての菓子パン摂取、開食の取りすぎによる欠食、野菜摂取量、咀嚼、母親の就労状況、身体活動、外遊び、昼寝、給食のおかわり、保育施設での間食、身体計測の頻度	小児肥満
140	Toshihiko Takada, Shingo Fukuma, Sayaka Shimizu, Michio Hayashi, Jun Miyashita, Teruhisa Azuma, Shunichi Fukuhara	Association between daily salt intake of 3-year-old children and that of their mothers: A cross-sectional study.	Journal of clinical hypertension	2018	20	4	730-735	福島県白河市	3歳児641人とその母親	横断研究	3歳児健診	子ども年齢、性別、カウプ指数、兄弟(年上/年下)、祖父母との同居、主な養育者、食事を提供する者、保育施設への出席 母親年齢、BMI、喫煙、アルコール、仕事、高血圧、糖尿病、脂質異常症、塩分摂取量	3歳児の食塩摂取量

根拠となりうる研究結果		調査項目の分類			
	統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目 「発育・発達・健康」「食事・間食・飲料」「食事への関心・行動」「生活」	小項目	縦軸 「子どもの心配ごと」「保護者」「支援者の活動」
<ul style="list-style-type: none"> ・5歳時の食欲が「やや多く食べる」「多く食べる」児のカウプ指数は1歳から5歳までの各年齢で高値を示し、小食である児に比べて有意に高かった。 ・母親が食事のバランスを気をつけるがについて、男児では「気をつけている」母親を持つ児のカウプ指数が1歳から5歳までの各年齢で高値を示し、女児では「時々気をつけている」母親を持つ児のカウプ指数が1歳から5歳までの各年齢で高値を示した。 ・食事は規則的かについて、男児において「規則的に摂取している」児のカウプ指数が1歳から5歳までの各年齢で高値であり、「不規則である」児のカウプ指数は各年齢で低値であった。 	統計解析: Pearsonの相関係数、 χ^2 検定、一元配置分散分析、t検定 調整変数: なし	質問紙法、育児、食行動、ライフスタイル(調査・実態)、体格(調査・実態)、母性行動、幼児、意識調査、Kaup指数	生活 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	生活習慣(食事時間が規則正しくない) 量(食べる量が少ない) 身体的(発育(肥満度)、食事時におなかがすいていない(食欲がない)) 子の食事への関心・理解(栄養バランスへの配慮)	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> ・男児において、食が細い群は食が細くない群に比べて「家の中で遊ぶ方が好き」「よく泣く」「かんしゃくを起こしやすい」「じっとして絵本などを見てられない」「昼間の保育状況で母親がみている」者が有意に多く、「離乳開始が6か月以内」「離乳はうまくいった」「1歳まで育てやすかった」者は有意に少なかった。 ・女児において、食が細い群は食が細くない群に比べて「離乳はうまくいった」「昼間のおむつが2歳半までにとれた」者は有意に少なかった。 	統計解析: χ^2 検定、ロジスティック回帰分析 調整変数: なし	育児、小児の発達、食行動、幼児	生活 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	量(食べる量が少ない) 身体的(発育(おむつのとれた時期、離乳食の進めやすさ、育てやすさ)) 精神的(よく泣く、かんしゃくを起こしやすい、気が散りやすい) 自身の生活の理解(昼間の保育者が母親)	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> ・「食事の速度がやや早いあるいは早い」頻度は過体重のエピソードのある群(3歳時・小1時・両時期過体重)が高かった。 ・「夜食週1~2回以上」は小学1年時過体重、両時期過体重群が高かった。 ・3歳時正常群の体格の変化と3歳時点での生活習慣との関連について、「間食の時間が決まっていない」という回答が正常→過体重群で高い頻度を示し、正常→正常群、正常→やせの群になるに従い頻度は低下した。 ・3歳時正常群の体格の変化と小学1年時点での生活習慣との関連について、正常→過体重群では「夜食をほとんど食べない」者が、正常→正常群に比べて頻度が少なく、「食事の速度やや早食い以上」が他の2群に比べて顕著に頻度が高かった。 	統計解析: χ^2 検定 調整変数: なし	コホート研究、小児、ライフスタイル、体格、肥満、幼児、生活習慣病	生活 食事への関心・行動 発育・発達・健康	生活習慣(間食時刻を決めていない、食事のタイミングが遅い(夜食)) 食事を食べる力(速く食べる) 身体的(発育(肥満度))	子どもの心配ごと
<ul style="list-style-type: none"> ・「油を使った料理を食べることが多い」「食事をよく食べる」「おやつ(間食)をよく食べる」に該当する子どものカウプ指数の平均値は、そうでない群よりも高値であり、「食べ物をよく噛んで食べる」に該当する子どものカウプ指数の平均値はそうでない群よりも低値であった。 ・年齢別にみると、6歳では「インスタント食品やレトルト食品を食べることが多い」に該当する子どものカウプ指数の平均値は、そうでない群よりも高値であった。 	統計解析: t検定、相関係数 調整変数: なし	4~6歳児カウプ指数: 生活習慣・親の認識、小児肥満予防	食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	食事を食べる力(よく噛まない) 量(食べる量が少ない・多い、食事・間食の回数) 質(食品・料理の種類・組合せが良くない、ファストフード・即席麺・加工食品が多い) 身体的(発育(肥満度))	子どもの心配ごと 保護者 支援者の活動
<p>以下の項目は子どもの肥満の頻度を高める要因であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・母親のBMIが25以上 ・毎日の遊びがテレビ視聴またはゲームのみである ・週末に1日2時間以上テレビを見る ・間食のとりすぎによる欠食 ・少ない咀嚼 ・粉ミルクでの授乳 ・朝食欠食 ・母親の妊娠時の体重増加が20kg以上 <p>一方、保育施設での間食の提供は、子どもの肥満の頻度を低下させる要因であった。</p>	統計解析: バイナリロジスティック回帰分析、多重ロジスティック回帰モデル、マルチラベル分析 調整変数: すべての個人要因と環境要因	保育施設、小児肥満、マルチラベル分析、施設での間食、自己管理質問票	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	身体的(発育(肥満度)) 量(食事・間食の回数) 質(食品・料理の種類・組合せが良くない(粉ミルクでの授乳)) 食事を食べる力(よく噛まない) 生活習慣(遊び) 自身の生活の理解(食生活スタイル(親の肥満度)) 2親に子の食生活への関心を持ってもらう(保育施設での間食の提供)	子どもの心配ごと 保護者 支援者の活動
<ul style="list-style-type: none"> ・母親の1日の食塩摂取量が8.4g未満の群は、9.7g~11.5gの群、11.5g以上の群と比べて、子どもの1日の食塩摂取量が有意に高かった。 ・母親の1日の食塩摂取量が1g増加すると、子どもの1日の食塩摂取量は0.14g増加した。 ・子どものカウプ指数が1kg/m²高くなると、子どもの1日の食塩摂取量は0.17g増加した。 ・母親が高血圧であると、子どもの1日の食塩摂取量は2.09g多かった。 	統計解析: ロバスト回帰分析、感度分析、多変量ロジスティック分析 調整変数: 子どもの特性、母親の特性	記載なし	生活習慣 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	身体的(発育(肥満度)) 質(栄養素等摂取量) 自身の生活の理解(食生活スタイル(親の栄養素等摂取量)、親の健康(高血圧))	子どもの心配ごと 保護者

論文情報						調査対象	方法	調査項目					
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年	巻号	ページ	調査地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	研究デザイン/ 介入内容 期間	調査方法/ 介入内容	テーマに関連する 調査項目	アウトカム指標 (利点、重要性に関する調査 項目)	
141	Hitomi Okubo, Yoshihiro Miyake, Satoshi Sasaki, Keiko Tanaka, Yoshio Hirota	Rate of eating in early life is positively associated with current and later body mass index among young Japanese children: the Osaka Maternal and Child Health Study.	Nutrition Research	2017	37	20-28	大阪府寝屋川市および大阪府の他の市町村	ベースライン調査に参加した妊娠6~39週の妊婦のうち、4回の追跡調査にも参加しデータに欠損の無かった492人	縦断研究	質問紙調査	食べる速さ テレビ視聴時間 栄養素等摂取量 母親のBMI、勤務状況、学歴 家庭収入	BMI	
142	Mizuki Sata, Kazumasa Yamagishi, Toshimi Sairenchi, Ai Ikeda, Fujiko Irie, Hiroshi Watanabe, Hiroyasu Iso, Hitoshi Ota	Impact of Caregiver Type for 3-Year-Old Children on Subsequent Between-Meal Eating Habits and Being Overweight From Childhood to Adulthood: A 20-Year Follow-up of the Ibaraki Children's Cohort (IBACHIL) Study	Journal of Epidemiology	2015	25	9	600-607	茨城県	3歳児健診で配布されたアンケートに回答した者のうち、6歳、12歳、22歳での追跡調査に全て参加した4592人	縦断研究	質問紙調査	主な養育者(母親、祖父母、幼稚園・保育所職員)	間食(夕食前、就寝前、間食頻度)、体格、外遊び、
143	Yuki Morinaga, Takuya Tsuchihashi, Yuko Ohta, Kiyoshi Matsumura	Salt intake in 3-year-old Japanese children	Hypertension Research	2011	34	836-839	福岡県福岡市	福岡市佐原保健所で健診を受けた3歳児1424人	横断研究	尿検査、アンケート調査	BMI 出生順序 果物の摂取 間食	ナトリウム、カリウムの摂取量	
144	会退友美, 赤松 利恵	幼児の発達過程を通じた食欲と間食の内容・与え方、体格の検討	日本公衆衛生雑誌	2010	57	2	95-103	静岡県伊東市	平成12年度から15年度に出生した子ども1313人	縦断研究	1歳6か月児健診と3歳児健診の問診票	間食の与え方 間食の内容 肥満度	食欲
145	Hongbing Wang, Michikazu Sekine, Xiaoli Chen, Takashi Yamagami, Sadanobu Kagamimori	Lifestyle at 3 years of age and quality of life (QOL) in first-year junior high school students in Japan: results of the Toyama Birth Cohort Study	Quality of Life Research	2008	17	257-265	富山県	1989年4月2日~1990年4月1日に富山県内で生まれた子ども7289人	縦断研究	アンケート調査、身体計測	睡眠、身体活動、食習慣などのライフスタイル(3歳時)	QOL(中学1年時)	

根拠となりうる研究結果	調査項目の分類			
統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目	小項目	縦軸
<ul style="list-style-type: none"> ・30か月時の食べる速さが遅い子どもは、男の子であり、早生まれでなく、30か月時と42か月時の体重と身長が大きく、母親が専業主婦である割合が低かった。また、30か月時の食べる速さが遅い子どもは、テレビの視聴時間が短かった。 ・30か月時の食べる速さが遅いほど、30か月時のBMIが高かった。 ・30か月時の食べる速さが遅いほど、42か月時のBMIが高かった。 	統計解析：マンテルヘンツェル χ^2 検定、多重線形回帰分析 調整変数：子どもの性別と年齢、母親の年齢、BMI、教育レベル、家庭収入、妊娠中の喫煙状況、珊瑚30か月の勤務状況、出生順序、出生時体重、授乳期間、30か月のテレビ視聴時間、子どもの30か月のたんぱく質・脂質・食物繊維摂取量	食べる速さ、BMI、食事、日本の幼児、前向き出生コホート 生活習慣 食事への関心・行動 発育・発達・健康	身体的(発育(肥満度)) 食事を食べる力(速く食べる) 自身の生活の理解(生活リズム(就労状況))	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> ・男女ともに、3歳時の主な保育者が祖父母である子どもは、主に母親が保育を行う子どもと比べて、1日に3回以上間食をとり、過体重で、活動的で、母親が働いている者の割合が高く、BMIが高かった。また、母乳育児で、外遊びをする者の割合が低かった。それに加えて、男の子では、9時以降に起床し、好き嫌いなし、父親が働いている者の割合が低かった。 ・男女ともに、3歳時の主な保育者が幼稚園や保育所の職員である子どもは、主に母親が保育を行う子どもと比べて、1日に3回以上間食をとり、母親が働いている者の割合が高く、BMIが高かった。また、好き嫌いなし、父親が働いている者の割合が低かった。それに加えて、男の子では過体重である者の割合が高かった。女の子では就寝前に毎日間食をとる者の割合が高く、23時以降に就寝し、兄弟と暮らしている者の割合が低かった。 <p>主な保育者が祖父母である子どもは、主に母親が保育を行う子どもと比べて、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3歳、6歳では男女ともに、12歳では女の子で、夕食前に間食をとる者が多かった。 ・6歳では、男の子で、1日3回以上間食をとる者が多かった。 <p>主な保育者が幼稚園や保育所の職員である子どもは、主に母親が保育を行う子どもと比べて、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6歳では男女ともに、3歳、12歳では女の子で、夕食前に間食をとる者が多かった。 ・3歳では、女の子で、1日3回以上間食をとる者、就寝前に間食をとる者が多かった。 	統計解析： χ^2 検定、ロジスティック回帰分析 調整変数：授乳方法、起床時刻、就寝時刻、身体活動、外遊び、兄弟、好き嫌い、父親の就業状況	子ども、食習慣、過体重、コホート研究、疫学 生活習慣 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	身体的(肥満度) 量(間食の回数) 質(食品・料理の種類・組合せが良くない(母乳栄養) 食事を食べる力(食べるものが偏る(好き嫌い)) 生活習慣(就寝・起床時間が遅い、運動(外遊び)をしていない、食事のタイミングが遅い(夜食)、間食のタイミングが遅い、身体活動量、兄弟の存在) 自身の生活の理解(生活リズム(就労状況)、祖父母の存在)	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> ・上に兄弟がいる子どもは一番上の子どもと比べて、尿中ナトリウム排泄量が多く、尿中ナトリウム/カリウム比が大きかった。 ・日常的に間食をとる子どもはとらない子どもと比べて、BMIが高かった。 ・日常的に果物を食べる子どもは食べない子どもと比べて、尿中カリウム排泄量が高く、ナトリウム/カリウム比が小さく、BMIが高かった。 ・塩分摂取を意識する母親の子どもは、意識しない母親の子どもと比べて、尿中カリウム排泄量が多かった。 	統計解析：一元配置分散分析 調整変数：なし	子ども、砂糖の摂取、ナトリウム/カリウム比 生活習慣 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	身体的(発育(肥満度)) 量(間食の回数) 質(栄養素等摂取量(尿中Na排泄量、尿中K排泄量)、食品の種類、間食(甘いもの)に気を付けていない) 生活習慣(兄弟の存在) 子の食事への関心・理解(食生活・食習慣への配慮)	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> ・1歳6か月児では、「食欲なし/むら食い」の子どもは「食欲あり/普通」の子どもと比べて、間食の時間を決めていない、子どもが欲しがった時に与える、家族や近所の人からもらう、やせの者が多かった。 ・3歳児では、「食欲なし/むら食い」の子どもは「食欲あり/普通」の子どもと比べて、間食の時間を決めていない、子どもが勝手に食べる、健康的間食が0個である者が多かった。 	統計解析：クラスター分析、McNemar検定、ロジスティック回帰分析 調整変数：性別、3歳児の間食の与え方、間食の内容、飲満ち、1歳6か月の月児の食欲	幼児、食欲、間食 生活習慣 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	身体的(発育(やせ)、食事時におなかがすいていない(食欲がない)) 量(むら食いがある) 質(間食(甘いもの)に気を付けていない) 生活習慣(食事時間が規則正しくない(間食時刻を決めていない))	子どもの心配ごと
<ul style="list-style-type: none"> ・3歳時の朝食の摂取頻度が高く、食事時刻や間食時刻が規則的であるほど、中学1年時のQOLが高かった。 	統計解析： χ^2 検定 調整変数：年齢、性別、BMI、両親の就業状況、主な保育者	生活様式、QOL、子ども、思春期、富山出生コホート 生活習慣 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	身体的(中学時代のQOL) 精神的(中学時代のQOL) 量(食事の回数(朝食欠食)) 生活習慣(食事時間が規則正しくない)	子どもの心配ごと

論文情報				調査対象		方法		調査項目				
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年	巻号	ページ	調査地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	研究デザイン/ 介入期間	調査方法/ 介入内容	テーマに関連する 調査項目	アウトカム指標 (利点、重要性に関する調査 項目)
146	Hiroki Sugimori, Katsumi Yoshida, Takashi Izuno, Michiko Miyakawa, Machi Suka, Michikazu Sokine, Takashi Yamagami, Sadanobu Kagamimori	Analysis of factors that influence body mass index from ages 3 to 6 years: A study based on the Toyama cohort study	Pediatrics International	2004	46	3	302-310 富山県	1989年4月2日～ 1990年4月1日に富 山県内で生まれた 子ども8170人	縦断研究	アンケート調 査、身体計測	朝食、間食、共食、夜食、食 べる速さ、摂取食品、起床・ 就寝時刻、睡眠時間、排 便、身体活動、外遊び	体格
147	Sekine Michikazu, Yamagami Takashi, Hamanishi Shimako, Handa Kyoko, Saito Tomohiro, Nanri Seiichiro, Kawaminami Katsuhiko, Tokui Noritaka, Yoshida Katsumi, Kagamimori Sadanobu	Parental Obesity, Lifestyle Factors and Obesity in Preschool Children: Results of the Toyama Birth Cohort Study	Journal of Epidemiology	2002	12	1	33-39 富山県	1989年生まれの3歳 児8941名	縦断研究 /1992年 ～1994年	身体測定、質 問紙調査	身体活動、食習慣、睡眠習 慣	BMI
148	松坂 仁美, 前橋 明	保育園幼児の生活習慣と体格、体力・運動能力の実態と課題：就寝時刻からの分析	レジャー・ レクリエー ション研究	2018	なし	85	23-32 大阪府 神奈川 岡山 広島 香川	保育園4～6歳児 2,445人(男児1,177 人、女児1,268人)	横断研究	質問紙調査	就寝時刻(21前就寝群:A 群、21時台就寝群:B群、22 時以降就寝群:C群)	生活習慣調査(睡眠、食事、 余暇活動、テレビ・ビデオ等 の視聴)、カウプ指数、体力・ 運動能力テスト結果
201	佐藤 公子, 小田 慈, 下野 勉	10か月児のう蝕の関連要因が1歳6か月児う蝕におよぼす影響について	小児保健 研究	2008	6	1	89-95	A市Bセンターで10 か月児および1歳6 か月児歯科健康診 査をともに受診した 乳幼児415名(男児 230名、女児185名)	縦断研究 /8か月	健康診査票お よび歯科健康 診査結果	間食の回数 砂糖を含む甘味飲料水 生後10か月時点の離乳食 の種類	う蝕の有無 1歳6か月児の咀嚼状況
202	曾我部 夏子, 丸 山里 枝子, 中村 房子, 土屋 律子, 井上 美津子, 五 関 正江	都市部在住の乳幼児の口腔発達状況と食生活に関する研究 1歳2か月児歯科健診結果から	日本公衆 衛生会誌	2010	57	8	641- 648 東京都	1歳2か月児歯科健 診を受診した幼児 の保護者420名	横断研究	質問紙調査	乳歯萌出状況、離乳食の開 始、離乳食の進行の目安	現在の食事の調理形態
203	寺川 由美, 福田 浩, 辻 ひとみ, 井 村 元氣, 池宮 美佐子, 田端 信 忠, 今井 龍也	大阪市3歳児健診におけるう蝕と育児環境との関連	小児保健 研究	2018	77	1	35-40 大阪市	3歳児健診受診者 19400名(齲歯罹患 率) N区3歳児健診受診 者217名	横断研究	質問紙調査	社会経済指標、予防接種受 診状況、出産年齢、歯科受 診経験、歯の汚れ、間食時 間の規則性	う蝕の有無

根拠となりうる研究結果		調査項目の分類			
	統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目	小項目	縦軸
<p>男の子では、3歳時と6歳時の体型が「普通/普通」の子どもと比べて、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「肥満/普通」の子どもは、6歳時に、ジュースの摂取が少なく、食べる速さが速く、睡眠時間が9時間以下であり、かんしゃくを起こしやすい者が多かった。また、身体活動をよく好み、外遊びをよくする者が少なかった。 ・「普通/肥満」の子どもは、6歳時に、米と緑茶と卵・肉の摂取量が多く、パンとジュースの摂取量が少なく、食べる速さが速く、睡眠時間が9時間以下であり、クラブ活動をする者が多かった。間食を週1回以上とする者が少なかった。 ・「肥満/肥満」の子どもは、6歳時に、米と緑茶と卵・肉の摂取量が多く、パンの摂取量が少なく、食べる速さが速く、睡眠時間が9時間以下であり、休日に1日4時間以上テレビを見る習慣があり、かんしゃくを起こしやすい者が多かった。また、身体活動をよく好み、外遊びをよくする者が少なかった。 <p>女の子では、3歳時と6歳時の体型が「普通/普通」の子どもと比べて、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「肥満/普通」の子どもは、6歳時に、毎日朝食を食べる者が少なく、食べる速さが速く、自発的な性格の者が多かった。 ・「普通/肥満」の子どもは、6歳時に、毎日朝食を食べる者が少なく、米と卵・肉の摂取量が多く、パンの摂取量が少なく、食べる速が遅い者が多く、就寝時刻が22時以降である者が少なかった。 ・「肥満/肥満」の子どもは、6歳時に、米の摂取量が多く、パンの摂取量が少なく、食べる速さが速く、排便が規則的な時間にあり、平日に1日3時間以上テレビを見る者が多かった。 	統計解析:ピアソンの相関係数。多重比較、ペアウィズ比較、 χ^2 検定 調整変数:なし	子ども、コホート研究、肥満、富山出生コホート	生活習慣 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	身体的(発育(肥満度)、排便習慣) 精神的(かんしゃくを起こしやすい、自発的な性格) 量(食事の回数(朝食欠食)) 質(食品の種類) 食事を食べる力(速く食べる) 生活習慣(就寝時間が遅い、電子メディアの視聴時間が長い、運動(外遊び)をしていない、睡眠時間、身体活動量、クラブ活動)	子どもの心配ごと 「子どもの心配ごと」「保護者の活動」
<ul style="list-style-type: none"> ・父親が肥満である子どもは、そうでない子どもと比べて、肥満である者が多かった。 ・母親が肥満である子どもは、そうでない子どもと比べて、肥満である者が多かった。 ・昼寝を含む睡眠時間が短いほど、肥満である子どもが多かった。 	統計解析:検定、 χ^2 検定、ロジスティック回帰分析 調整変数:年齢、性別	質問紙法、コホート研究、小児、睡眠、ライフスタイル、断面研究、肥満、両親、BMI、富山県	生活 発育・発達・健康	生活習慣(睡眠時間が短い) 身体的(発育(肥満度)) 自身の生活の理解(食生活スタイル(親の肥満度))	子どもの心配ごと 保護者
<p>〈保育園幼児の生活習慣や生活活動状況の実態〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・睡眠状況は男女ともに、3群間に差はなかった。 ・起床の仕方で「いつも自分で起きる」と「自分で起きることの方が多い」を合わせた自律起床児は、男児女児ともにA群はC群より有意に多かった。 ・起床時の機嫌で「いつも機嫌が良い」と「機嫌の良いときの方が多い」を合わせた幼児は、男児女児ともにA群はC群より有意に多かった。 ・排便を「毎朝する」「朝するときの方が多い」幼児は、男児女児ともにC群はA群より有意に少なかった。 ・朝疲労症状の訴えは、男児女児ともにA群の訴えスコアがC群より有意に少なかった。 <p>〈就寝時刻にみた生活時間〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・C群の平均就寝時刻はA群より1時間以上遅く、起床、朝食、夕食開始時刻は30分程度遅かった。 	統計解析:一元配置分散分析、Bonferroniによる多重比較、 χ^2 検定、残差分析 調整変数:なし	記載なし	生活 発育・発達・健康	生活習慣(就寝・起床時間が遅い、起床の方法、食事のタイミングが遅い) 身体的(排便習慣、健康(疲労度))	子どもの心配ごと
<ul style="list-style-type: none"> ・1歳6か月児のう蝕は、保護者が「歯の清潔に注意している」者ほど少なく、「間食の回数」「砂糖を含む甘味飲料水」を高頻度で摂取している者ほど多かった。 ・生後10か月時点の離乳食が大人と同じものを食べている(つまり食事内容が子どもの咀嚼機能や発達段階を考慮したものでない、または保護者の咀嚼機能獲得に対する誤った認識によりそうしている)場合、1歳6か月時点で咀嚼に問題がある傾向がみられた。 	統計解析:ロジスティック回帰分析 調整変数:なし	う蝕、間食、摂食行動	食事・間食・飲料 発育・発達・健康	量(間食の回数、飲料の種類と量を管理していない) 口腔機能(噛みにくい、う蝕) 子の口腔機能を確認していない 子の食事への関心・理解(10か月以上の離乳食が大人と同じ食べ物)	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> ・幼児に与えているごはんの固さにおいて、乳児の生え方のステージIで「軟飯」を食べている割合が有意に高かった。一方、乳児の生え方のステージIIIで「普通飯」を食べている割合が有意に高かった。 ・幼児に与えているおかずの固さにおいて、乳児の生え方のステージIIIで「奥歯でかみつぶせる」、「大人と同じ固さ」が有意に多かった。 	統計解析: χ^2 検定 調整変数:なし	乳歯萌出、離乳食、口腔機能、食習慣、食形態	食事・間食・飲料 発育・発達・健康	質(食べ物の固さ・大きさがわからない) 口腔機能(歯の萌出状況)	子どもの心配ごと
<ul style="list-style-type: none"> ・3歳児健診結果から、24区別のう蝕罹患率と社会経済指標との関係を見たところ、う蝕罹患率と平均世帯年収、母乳栄養率、平均世帯市民税には負の相関が、生活保護受給世帯率には正の相関がみられた。 ・N区のデータから、歯の汚れがあること、間食が不規則であることとともに、若年出産であることや予防接種を未受診であることがう蝕の患者率の高さと関連していた。 	統計解析: χ^2 検定、ロジスティック回帰分析 調整変数:なし	齲歯、育児環境、育児支援、子供の貧困	生活 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	生活習慣(食事時間が規則正しくない(間食時刻を決めていない)) 質(食品・料理の種類・組み合わせが良くない(母乳栄養)) 口腔機能(齲歯) 子の身体的健康・口腔機能を確認していない(予防接種の未受診、子どもの歯の汚れ)	子どもの心配ごと 保護者

論文情報				調査対象	方法	調査項目					
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年 巻 号	ページ	調査地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	研究デザイン/ 介入期間	調査方法/ 介入内容	テーマに関連する 調査項目	アウトカム指標 (利点、重要性に関する調査 項目)
204	石田直子, 中向井政子, 石黒祥, 加藤千鶴子, 渡辺晃子, 荒川浩久	3歳児のう蝕の有無とその影響要因の地域格差	口腔衛生学会雑誌	2015 65 1	26-34	神奈川県	神奈川県内14市の3歳児歯科健診受診児4047名	横断研究	質問紙調査	噛みごたえのある食べ物の摂取、よく噛んで食べる、テレビやビデオを見ながら食事をする習慣、甘いお菓子の摂取、甘い飲み物の摂取、保護者の仕上げ磨き	う蝕の有無
205	曾我部夏子, 田辺里枝子, 萩川摩有, 中村房子, 土屋律子, 井上美津子, 五関一曾根正江	1歳2か月児における母乳継続状況, 生活習慣およびう蝕との関係	小児保健研究	2011 70 4	479-485	東京都	1歳2か月児歯科健診を受診した保護者420名	横断研究	質問紙調査	母乳摂取状況	おやつや飲料の摂取状況、就寝・起床時刻、う蝕の有無
206	曾我部夏子, 田辺里枝子, 萩川摩有, 中村房子, 井上美津子, 五関一曾根正江	1歳2か月児における母乳・ミルク・牛乳の摂取状況と食生活との関連の検討	日本食育学会誌	2014 8 4	273-281	東京都	1歳2か月児歯科健診を受診した1歳1~3か月の幼児502名(男児250名、女児252名)	横断研究	質問紙調査	母乳、ミルク、牛乳の摂取状況(摂取の有無、摂取回数、摂取時刻)、現在の食事の調理形態、子どもの食事の様子で気になること、気を付けていること、食事作りで困っていることなどの食生活状況、乳歯萌出状況	食生活状況、乳歯萌出状況
207	丸山智美, 森田一三, 中垣晴男	3.4歳児における乳歯う蝕と食事摂取との関連—食事チェック表を用いた評価	金城学院大学論集	2007 3 2	1-7	愛知県	〇市にある小児専門開業歯科診療所であるM子ども歯科に受診した3、4歳児83人(男子40人、女子43人)	横断研究	口腔内診査 食事記録 食事チェック表	う蝕の有無、食品群別摂取頻度	う蝕の有無
208	木林美由紀, 大橋健治, 森下真行, 奥田豊子	幼児の咀嚼と食行動および生活行動との関連性	口腔衛生学会雑誌	2004 54 5	550-557	近畿圏	保育所と幼稚園の幼児141名(男児72名、女児69名)とその保護者141名、および幼稚園と保育所の担任教諭と担任保育士4名	横断研究	質問紙調査	対象児の体格、対象児の生活行動および健康状態、食行動、幼児期の育児の様子、保護者自身の食行動、育児に対する考え方、家族の健康への関心の程度	咀嚼能力(咀嚼回数、嚥出率、咬合力)
209	河原林啓太, 杉本明日菜, 赤澤友基, 上田公子, 北村尚正, 宮崎彩, 岩本勉	齲蝕罹患と生活習慣の相関とその解決課題	小児歯科学雑誌	2018 56 1	26-32	徳島県	徳島大学病院小児歯科に通院中の患児100名(0~9歳児、男児57名、女児43名)	横断研究	質問紙調査	家庭環境(祖父母の同居の有無、母親の就労、きょうだいの有無)、基本的な生活習慣(起床時間、就寝時間、食生活および甘味の摂取状況)、歯科に関する事項(1日の歯みがきの回数、フッ化物の使用経歴、かかりつけ歯科医の有無、齲蝕予防に関する知識)	齲蝕の有無
210	原正美, 高橋系一, 上田寛子, 古川漸	幼児のむし歯と食事の好き嫌いとの関連性	保育と保健	2013 19 2	63-67	東京都	D幼稚園4・5歳児113名とその保護者	横断研究	質問紙調査	幼児の好き嫌い、歯を磨く回数、歯磨きに関して家庭で注意していること、各食品の摂取頻度	幼児のむし歯の本数
211	大須賀恵子, 酒井映子, 佐藤祐造	幼児における複数う蝕発生要因構造と牛乳摂取の関連	心身科学	2011 3 1	13-20	不明	1997~2001年度に出生し、1.6歳児健康診査、3歳児健診の両方を受診した231名の幼児	横断研究	質問紙調査	生活習慣(おやつとの与え方と内容、歯磨き習慣、食習慣など)、生活環境(居住地域、世帯構成、出生順位、保育者など)、フッ素塗布回数	歯科検診結果(う蝕数等)

根拠となりうる研究結果		調査項目の分類			
	統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目	小項目	縦軸
生活習慣の要因では、「テレビやビデオを見ながら食事をする習慣がある」「甘いお菓子を毎日食べる」「甘い飲み物を毎日飲む」「保護者の仕上げ磨きをしていない」ほうがう蝕がある傾向にあった。	統計解析:ロジスティック回帰分析 調整変数:あり(交絡因子や影響因子を調整との記述はあるが、具体的な変数の記載はなし)	齲歯、地域格差、生活習慣	生活 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	生活習慣(テレビを見ながら食事をする習慣) 量(飲料の種類と量を管理していない) 質(食事と間食(甘いもの)に気を付けていない) 口腔機能(う蝕、保護者による仕上げ磨き)	子どもの心配ごと
・母乳を「寝る前」に飲んでいる群では、飲んでいない群に比べて起床時刻が遅く、朝食の時刻も遅く、食が細いと回答した者が多かった。 ・う蝕あり群で母乳を寝る前や夜間に飲むと回答した者が有意に多かった。	統計解析:χ ² 検定 調整変数:なし	う蝕、母乳摂取、食生活、生活習慣	生活 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	生活習慣(起床時間が遅い、食事のタイミングが遅い(夜間授乳)) 量(食べる量が少ない)	子どもの心配ごと
〈乳歯萌出状況との検討〉 ・ステージⅠはミルクあり群で38.0%、ミルクなし群で25.5%、ステージⅡはミルクあり群は54.0%、ミルクなし群で66.6%、ステージⅢはミルクあり群で8.0%、ミルクなし群で7.9%で2群間で有意な差がみられた。 (食事の様子で気になること) ・「食事量が少ない」「食べる量にムラがある」は母乳なし群に比べて、母乳ありで有意に高かった。 ・「食事量が多い」は母乳あり群に比べて、母乳なし群で有意に高かった。 (食事で気をつけていること・食事作りで困っていること) ・「食べる量が多すぎないこと」は母乳あり群に比べて、母乳なし群で有意に高かった。 ・「特にならない」は母乳あり群に比べて、母乳なし群で有意に高かった。 ・「食べる量が少なすぎる」は牛乳あり群に比べて、牛乳なし群で有意に高値を示した。 ・「食事のマナー」は牛乳なし群に比べて、牛乳あり群が有意に高値を示した。 ・「食べ物の種類が偏る」は母乳なし群に比べて、母乳あり群で有意に高値を示した。 ・「作り方がわからない」「特にならない」は母乳あり群に比べて、母乳なし群が有意に高値を示した。 ・「作るのが面倒だ」はミルクなし群に比べ、ミルクあり群で有意に高値を示した。	統計解析:χ ² 検定 調整変数:なし	記載なし	食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	量(食べる量が少ない・多い、むら食いがある、飲料の種類と量を管理していない) 質(食品・料理の種類・組み合わせが良くない) 口腔機能(歯の萌出状況) 食事づくり・食べる力(食事づくりの得意・不得意)	子どもの心配ごと 保護者
菓子、甘い菓子、ジュース、乳酸飲料はう蝕のある群において摂取頻度が有意に高かった。	統計解析:t検定 調整変数:なし	記載なし	食事・間食・飲料 発育・発達・健康	量(飲料の種類と量を管理していない) 質(食事と間食(甘いもの)に気を付けていない) 口腔機能(う蝕)	子どもの心配ごと
・偏食が少ない対象児は偏食が多い対象児に比べて、溶出糖量(%)が有意に高かった。 ・家族の食事を作るとき、意識して堅いものをメニューに加えている保護者の対象児は、咬合力が有意に高かった。 ・担任からの評価で「よく噛んでいる」と評価された対象児は「噛んでいない」と評価された対象児よりも最大咬合圧が有意に高く、さらに、「友人と積極的に遊ぶことができる」項目において、「とてもよく遊ぶ」と評価された対象児は「ふつう」と評価された対象児よりも溶出糖量(%)が有意に高かった。	統計解析:t検定、χ ² 検定、一元配置分散分析、多重比較 調整変数:なし	幼児、チューインガム法、デンタルプレスクール	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	食事を食べる力(食べるものが偏る、よく噛まない) 口腔機能(咀嚼力) 精神的(友人との関わり) 子の食事への関心・理解(堅いものを食べさせる)	子どもの心配ごと 保護者
(家庭環境と齲歯の関係) ・母親の就労なしの群に比べ、就労ありの群で齲歯罹患児の割合が高かった。 (睡眠と齲歯の関係) ・22時以前に就寝している児の群に比べ、22時以降に就寝している児の群で齲歯罹患児の割合が高かった。 (食事と齲歯の関係) ・1日のうち甘味摂取回数が2回未満の群に比べ、2回以上の群で齲歯罹患児の割合が高かった。 ・齲歯ありの群では、なしの群に比べ、3回の食事以外に摂取した甘味食品からより多くのエネルギーを摂取していた。	統計解析:Fisherの検定、Welchのt検定 調整変数:なし	齲歯罹患、生活習慣、自立支援	生活 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	生活習慣(就寝時刻が遅い) 量(間食回数) 質(栄養素等摂取量、食事と間食(甘いもの)に気を付けていない) 口腔機能(う蝕) 自身の生活の理解(就労状況)	子どもの心配ごと 保護者
・むし歯を有する児はむし歯のない児と比較して嫌いな食品数が有意に多かった。	統計解析:χ ² 検定 調整変数:なし	う蝕、食行動、食事、食物の嗜好、インタビュー、有病率、幼児、歯磨き、自己報告式質問調査、食物摂取頻度調査	食事への関心・行動 発育・発達・健康	食事を食べる力(食べるものが偏る(好き嫌い)) 口腔機能(虫歯)	子どもの心配ごと
・農村的地区に居住している、1日平均牛乳摂取量が50ml未満、第2子以降は、う蝕保有のリスクが高かった。 ・複数う蝕保有率は、1日平均牛乳摂取量50ml未満で41.3%、50ml以上400ml以下23.4%、401ml以上54.5%で、1日牛乳摂取量が多くても少なくとも複数う蝕を保有する割合が高かった。 ・3歳時にう蝕を10本以上保有している者は、牛乳摂取量が適正でなく、哺乳瓶を使う、母乳やミルクを飲みながら寝る、間食時間を決めていない者が多かった。	統計解析:二項ロジスティック回帰分析、対応のないt検定、Pearsonのχ ² 検定 調整変数:なし	幼児、複数う蝕、1日平均牛乳摂取量、生活習慣、複合要因	生活 食事・間食・飲料	生活習慣(食事のタイミングが遅い(夜間授乳)、間食時刻を決めていない) 量(飲料の種類と量を管理していない) 口腔機能(う蝕)	子どもの心配ごと

論文情報				調査対象	方法	調査項目							
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年	巻号	ページ	調査地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	研究デザイン/ 介入期間	調査方法/ 介入内容	テーマに関連する 調査項目	アウトカム指標 (利点、重要性に関する調査 項目)	
212	大須賀 恵子, 千野 直仁	幼児のう蝕有病と生活習慣・生活環境複合要因	心身科学	2010	2	1	17-24	不明	1997～2001年度に出生し、1.6歳児健康診査、3歳児健診の両方を受診した188名の幼児	横断研究	質問紙調査	生活習慣(おやつとの与え方と内容、歯磨き習慣・食習慣など)、生活環境(住居地域、世帯構成、出生順位、保育者など)	歯科検診結果(う蝕数、処置歯の歯数、塗銀歯数、う蝕罹患型、歯の汚れの状態、軟組織の異常の有無、歯のその他の異常、指しゃぶりなど)
213	森田 一三, 磯崎 篤則, 堀内 省剛, 藤居 正博, 赤井 淳二, 長 哲也, 柘植 紳平, 丸山 進一郎, 中垣 晴男	幼稚園児用歯の生活習慣セルフチェック票「歯のけんこうつくり得点」の作成	学校保健研究	2009	51	2	95-101	47都道府県	幼稚園に通う5歳児1,313名(男児659名、女児618名、性別不明36名)	横断研究	質問紙調査	歯科保健に関する質問6項目、食生活習慣に関する質問11項目、生活習慣に関する質問13項目	う蝕経験歯数
214	佐野 祥平, 有木 信子, 桐山 千世子, 石井 浩子, 前橋 明	幼児の健康福祉に関する研究 幼児の口臭の実態と口臭改善のための保育実践ならびに健康的な暮らしづくり	保育と保健	2007	14	1	65-68	不明	保育園の4歳児18名、5歳児18名の計36名(男子18名、女子18名)	前後比較 /2か月	口臭測定、口腔内診査、質問紙調査、保育現場および家庭での口腔内清掃指導(歯科保健指導)	生活状況、口腔内状態、身体状況	幼児の口腔内の硫化水素濃度、トリメチルメルカプタン濃度
215	三田村 理恵子, 笹谷 美恵子, 山内 美穂, 齋藤 郁子, 高橋 正子	幼児の生活習慣、食生活状況と乳歯う蝕との関連	小児保健研究	2007	66	3	442-447	北海道	幼稚園児281名(男児145名、女児136名)	横断研究	質問紙調査	歯磨き習慣、幼児期(現在)の食生活状況、1日の食事記録	う蝕の有無
216	有木 信子, 木村 千枝, 福田 京子, 桐山 千世子, 佐野 祥平, 前橋 明	幼児の口臭の実態および保護者への啓発活動	保育と保健	2007	13	1	23-27	不明	保育園の4歳児と5歳児44名(男児22名、女児20名)	横断研究	口臭測定、口腔内診査、質問紙調査、保護者啓発および職員研修	就寝時刻、起床時刻、朝食摂取時刻、家を出て通園する時刻、朝食の摂取状況、排便状況	口臭成分濃度、歯肉炎や放置したう蝕の有無、舌苔の付着状況
217	吉田 須美子, 岡崎 光子	幼児の夕食喫食時刻と咀嚼状況	小児保健研究	2005	64	3	397-407	東京都、埼玉県	1～2歳児52名、3～5歳児97名	横断研究	質問紙調査	夕食喫食時刻	食行動、日常生活習慣および生活状況、食習慣、保護者の食事作りの態度
218	北川 真理子, 長岡 友子, 中嶋 久美子, 菱 亜由美	幼児の歯とそれをとりまく環境について	保育研究	2003	41		126-132	北海道	札幌市内A幼稚園の父母174名	横断研究	質問紙調査	①1日に歯を磨く回数②歯を磨く時間帯③歯並びで気になる点④間食について⑤給食について⑥お弁当について	う蝕の有無
219	寺本 幸代	小児歯肉炎の疫学的研究 ロジスティック回帰分析による罹患程度と環境要因の関連について	神奈川歯学	2000	35	2-3	82-100	富山県	幼稚園・保育園に在園する3歳から6歳までの園児424名、小学5・6年生342名	横断研究	口腔診査、質問紙調査	口腔衛生習慣、食事習慣、間食習慣、一般生活習慣	歯肉炎罹患状況(PMA)

根拠となりうる研究結果		調査項目の分類			
	統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目 「発育・発達・健康」「食事・間食・飲料」「食事への関心・行動」「生活」	小項目	縦軸 「子どもの心配ごと」「保護者の活動」
<ul style="list-style-type: none"> ・農村地区に居住、母乳やミルクを飲みながら寝る、間食回数が3回以上、昼間の保育者が祖母である者は、う歯罹患のリスクが高かった。 ・1歳6か月時に母乳を飲みながら寝る、親が仕上げ磨きをしていない、間食時間を決めていない、ミルクを飲みながら寝る、間食回数3回以上といった好ましくない生活習慣をもつ幼児は、3歳児のう歯数が多かった。 	統計解析:ロジスティック回帰分析、Pearsonのχ ² 検定 調整変数:なし	幼児、う歯、生活習慣、生活環境、複合要因	生活 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	生活習慣(間食時刻を決めていない、食事のタイミングが遅い(夜間授乳)) 量(間食回数) 口腔機能(仕上げ磨きをしていない(保護者による仕上げ磨き)、う歯) 自身の生活の理解(祖父母の存在)	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> ・男子では、外から帰ると手を洗う園児に比べ洗わない園児では7.1倍う歯が増加するリスクがみられた。 ・女児では、朝ご飯後の歯磨きをする、夕ご飯後の歯磨きをする、夕ご飯後の間食をしない、食事中テレビをみない、毎日テレビを2時間以上みない、外から帰ると手を洗う幼稚園児がう歯のリスクが低かった。 ・男女合わせた場合、夕ご飯後歯磨きをする、夕ご飯後に間食をしない、食事中テレビを見ない、外から帰ると手を洗うことをする幼稚園児がう歯のリスクが低かった。 ・ロジスティック回帰分析の結果、「夕ご飯後の歯磨き」の回帰係数が最も大きく、続いて「帰宅後の手洗い」であった。 	統計解析:オッズ比、ロジスティック回帰分析、Mann-WhitneyのU検定 調整変数:なし	う歯、生活習慣、自己評価、幼稚園児	生活 食事・間食 発育・発達・健康	生活習慣(電子メディアの視聴時間が長い(テレビを見ながら食事をする習慣)、帰宅後の手洗い、食後の歯磨き) 量(間食回数) 口腔機能(う歯)	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> ・朝食の摂取状況が悪い幼児ほど、幼児の口腔内から発生する硫化水素濃度およびトリメチルメルカプタン濃度が高かった。 ・歯科保健指導後の幼児の口腔内から発生する硫化水素濃度およびトリメチルメルカプタン濃度は、指導前に比べて有意に低下した。 	統計解析:相関係数 調整変数:なし	ガスロマトグラフィ、Sulfhydryl Compounds、質問紙法、育児、口腔症状、口臭、歯科保健教育、ライフスタイル、舌、保育所、硫化水素、幼児、Methanethiol、舌苔	食事・間食・飲料 発育・発達・健康	量(食事の回数(朝食欠食)) 口腔機能(口臭) 1)親に子の身体的・精神的健康・口腔機能・発達特性を確認して理解してもらう	子どもの心配ごと 支援者の活動
<ul style="list-style-type: none"> ・う歯あり群では、なし群に比べて母親や兄弟のう歯罹患率が有意に高かった。 ・歯磨きの仕方に関して、自分で磨く、親が仕上げ磨きをする児の割合がう歯なし群で高かった。 ・「歯磨きを行うタイミング」では、う歯なし群は食後すぐ磨くと答えた割合が、う歯あり群と比べて高くなる傾向にあった。 ・う歯あり群が外食に行く割合、加工食品を利用する割合はう歯なし群と比べ有意に高く、歯ごたえのある食品を良く摂取する児の割合が低くなる傾向がみられた。 ・う歯なし群は、主菜の欠食率がう歯あり群より有意に低かった。1日を通して主食・主菜・副菜をそろえて食べていた園児の割合は、う歯なし群で高くなる傾向が認められた。 	統計解析:χ ² 検定 調整変数:なし	う歯、幼児、食習慣	生活 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	質(栄養バランスが良くない、食品・料理の組み合わせが良くない(堅い食べ物)、ファストフード・即席めん・加工食品が多い、外食) 口腔機能(仕上げ磨きをしていない、齲歯) 自身の生活の理解(母親の齲歯)	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> ・朝食摂取状況と口臭成分濃度の関連をみると、硫化水素濃度は「毎朝食べる」群よりも「だいたい食べる」群で有意に高かった。メチルメルカプタン濃度も「毎朝食べる」群よりも「だいたい食べる」群で有意に高かった。 	統計解析:相関係数 調整変数:なし	ガスロマトグラフィ、Sulfhydryl Compounds、健康教育、口腔症状、口臭、食行動、舌、硫化水素、幼児、小児保健医療サービース、保護者、Methanethiol、舌苔	食事・間食・飲料 発育・発達・健康	量(食事の回数(朝食欠食)) 口腔機能(口臭) 2)親に子の食生活への関心をもってもらう(食育)	子どもの心配ごと 支援者の活動
<ul style="list-style-type: none"> ・1~2歳児において、夕食時刻が決まっている群は決まっていない群に比べて、就寝時刻は早い傾向であり、夜の睡眠時間は有意に長かった。 ・3~5歳児において、夕食時刻が決まっている群は決まっていない群に比べて、起床・就寝時刻は有意に早く、夜の睡眠時間は有意に長かった。 ・3~5歳児において、夕食時刻が決まっている群は決まっていない群に比べて、「朝食喫食時刻は決まっている」者の割合が有意に高かった。 ・3~5歳児において、夕食時刻が決まっている群は決まっていない群に比べて、保護者が「よく噛んで食べるよう注意している」「硬いものは軟らかく煮ている」者の割合が有意に高かった。 ・1~2歳児で夕食時刻が決まっている群の「好き嫌いや何でも食べる」グループは、「そうではない」グループに比較し、咀嚼能力、咀嚼習慣、咀嚼動作は有意に大きかった。 ・3~5歳児で夕食時刻が決まっている群の「好き嫌いや何でも食べる」グループは、「そうではない」グループに比較し、咀嚼習慣、咀嚼動作は有意に大きかった。 ・1~2歳児で夕食時刻が決まっている群の「噛み応えのあるものでも食べさせる」グループは、「そうではない」グループに比較し、咀嚼能力、咀嚼動作は有意に大きかった。 ・3~5歳児で夕食時刻が決まっている群の「市販食品を使用しない」グループは、「使用する」グループに比較し、咀嚼能力、咀嚼動作は有意に大きかった。 	統計解析:t検定、χ ² 検定、一元配置分散分析 調整変数:なし	質問紙法、時間、食行動、睡眠、摂食、咀嚼、態度、幼児、保護者	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	生活習慣(就寝時刻が遅い、食事時刻を決めていない) 食事を食べる力(食べるものが偏る) 質(ファストフード・即席めん・加工食品が多い) 口腔機能(咀嚼力) 食事づくり・食べる力(調理の工夫、よく噛んで食べるよう注意をする) 子の食事への関心・理解(堅いものを食べさせる)	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> ・虫歯の多い児は少ない児に比べて、チョコレート、キャンディ、アイスクリームなどの甘い物を間食として与えられていた。 	統計解析:なし 調整変数:なし	質問紙法、う歯、給食、食行動、歯列、歯、*小児歯科医療、幼児、歯磨き、間食	食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	口腔機能(虫歯) 質(間食(甘いもの)に気を付けていない)	子どもの心配ごと
<ul style="list-style-type: none"> 〈幼児期〉 ・PMAと、食生活習慣の「食事時間の長さ」「間食の規則性」「1日の肉類の摂取量」「1日の食事の摂取量」との間に有意な正の関連が認められた。 〈学童期〉 ・PMAと、食生活習慣の「1日のご飯の摂取頻度」「1日の果物の摂取頻度」との間に有意な正の関連、「1日の夜食の摂取頻度」との間に有意な負の関連がみられた。 	統計解析:Kendallの順位相関係数、ロジスティック回帰分析 調整変数:なし	疫学、口腔衛生、歯科健康調査、歯肉炎(疫学病因)、小児、食行動、発生率、ロジスティックモデル	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	生活習慣(食事時間が規則正しくない、食事のタイミングが遅い(夜食)) 食事を食べる力(だから食べる、速く食べる) 量(食べる量が少ない・多い) 質(食事・料理の種類・組み合わせが良くない) 口腔機能(歯肉炎指標)	子どもの心配ごと

論文情報						調査対象	方法	調査項目					
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年	巻号	ページ	調査地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	研究デザイン/ 介入期間	調査方法/ 介入内容	テーマに関連する 調査項目	アウトカム指標 (利点、重要性に関する調査 項目)	
220	岡崎 光子, 柳沼 裕子	幼児の摂食状況としゃく能力並びに歯の擦り減りとの関係	栄養学雑誌	2001	59	2	61-69	東京都	墨田区内の5公立保育園児146人(4歳児男児40人、女児32人、5歳児男児41人、女児33人)、1市立保育園児34人(4歳児男児8人、女児10人、5歳児男児10人、女児6人)とその保護者	横断研究	質問紙調査	幼児の食生活および咀嚼(生活習慣および生活状況、食事の仕方、食品の嗜好、食物の噛み方、咀嚼能力向上を意図した食事作り・食べさせ方)、食物繊維量	幼児の咬合力、歯の擦り減り状況
221	村上 多恵子, 中垣 晴男	保育所での幼児の摂食行動と母親の自己状態	交流分析研究	2000	25	2	133-139	愛知県	名古屋市内6ヵ所の園児220名の母親	横断研究	質問紙調査	幼児の摂食行動 A群:あまり噛まずに飲み込み食事時間が短い幼児 B群:なかなか飲み込まないで食事時間が長い幼児 C群:吸嚙癖のある幼児 対照群:それ以外の幼児	幼児の摂食行動
222	岡崎 光子	幼児における咀嚼訓練の意義	小児科	2000	41	12	2167-3175	東京都	(栄養教育群) S区内のA私立幼稚園児(4-5歳32名)と区立B・C保育園児(4-5歳48名) (対照群) 同区立3保育園児(4-5歳57名)	2群比較 /1年間	「よく噛むことを習慣化させ、園児の咀嚼能力を向上させること」をテーマとした栄養教育、咬合力測定(4回)		咀嚼能力
223	溝口 恭子, 鞆止 勝彦, 丹後 俊郎, 養輪 真澄	関東都市部における1歳6か月時から3歳時にかけてのう蝕発生と授乳状況ならびに関連する要因の検討	日本公衆衛生雑誌	2003	50	9	867-878	神奈川県川崎市	川崎市中原保健所における1歳6か月児健診時にう蝕がなく、平成13年6月から9月に同じ保健所で3歳児健診を受診した者491人	縦断研究	アンケート調査、口腔診査	1歳6か月児および3歳児の健康診査結果、1歳児および3歳児の口腔診査結果、家庭環境、生活習慣、食習慣、歯科保健	う蝕
224	丸山 聡	低年齢児歯科疾患要因の統計学的分析	松本歯学	2008	34	1	34-47	長野県	保育園に通園した3歳から6歳までの園児計640名(男児295名、女児345名)	横断研究	口腔内診査、質問紙調査	口腔衛生習慣、食習慣、間食習慣	口腔内診査結果
225	中山 佳美, 森 満	18~23ヶ月の小児におけるう蝕のリスク因子の検討 Risk factors associated with early childhood caries in 18- to 23-month-old children in a Japanese city	保健医療科学	2017	66	5	545-552	北海道	18~23か月児2771名	横断研究	質問紙調査	性別、出生時体重、家庭内での喫煙者、妊娠中の母親の喫煙、夜間授乳、間食習慣、食具の共用、社会経済状況	う蝕の有無
226	Hongyan Chen, Shiro Tanaka, Korenori Arai, Satomi Yoshida, Koji Kawakami	Insufficient Sleep and Incidence of Dental Caries in Deciduous Teeth among Children in Japan: A Population-Based Cohort Study.	Journal of pediatrics	2018	198		279-286	神戸市	18か月で虫歯がなく、睡眠に関する情報があり、3歳で歯科検診の記録がある71,069人	縦断研究	18か月時、3歳時の歯科検診と質問紙調査、18か月時の睡眠に関するアンケート調査	18か月時の就寝時刻および規則性、睡眠時間および規則性、背景特性、口腔衛生、ライフスタイル要因、既往歴	虫歯(3歳時)

根拠となりうる研究結果	調査項目の分類				
	統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目 「発育・発達・健康」「食事・間食・飲料」「食事への関心・行動」「生活」	小項目	縦軸 「子どもの心配ごと」「保護者の活動」
<p>〈幼児の歯の擦り減りとの関連〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日頃から保護者が幼児の食事作りには「手作りを心がけている」と回答した者は、歯の擦り減りあり群に比べて、擦り減りなし群で有意に少なかった。 ・「外食をよくする」と回答した者は、擦り減りあり群に比べて、擦り減りなし群で有意に多かった。 <p>〈幼児の咬合力との関連〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外食の少ない幼児の咬合力は、多い幼児に比べて有意に大きかった。 ・市販食品の使用頻度が少ない幼児の咬合力は、多い幼児に比べて有意に大きかった。 ・食物繊維摂取量と咬合力との間に有意な正の相関がみられた。 <p>〈保護者の食事作りおよび食事の食べさせ方に関する態度と食物繊維摂取量との関連〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「手作りの食事を心がけられた」「市販食品には必ず手を加えられている」幼児の食物繊維摂取量は「そうでない」幼児に比較して、それぞれ有意に多かった。 	<p>統計解析:t検定、χ^2検定、数量化1類調整変数</p>	<p>歯牙磨耗症、摂食、咀嚼、歯、幼児</p>	<p>食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康</p>	<p>質(栄養素等摂取量、外食) 口腔機能(歯のすり減り、咀嚼力) 食事づくり・食べる力(手作りへの心がけ)</p>	<p>子どもの心配ごと 保護者</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・B群幼児は対照群に比べて、「硬いものが噛めない」「食べることに意欲的でない」「柔らかいものばかりを好む」者が有意に多く、「食べることに執着する」者は有意に少なかった。 ・C群幼児は対照群に比べて、「柔らかいものばかりを好む」者が有意に多かった。 	<p>統計解析:Fisherの直接確立計算、χ^2検定、t検定 調整変数:なし</p>	<p>育児、行動、自我、食行動、摂食、母、保育所、幼児</p>	<p>食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康</p>	<p>食事を食べる力(だから食べる、速く食べる、よく噛まない、すぐに飲み込まず口にためる) 質(食品・料理の種類・組み合わせが良くない(堅い食べ物)) 口腔機能(咀嚼力)</p>	<p>子どもの心配ごと 保護者</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・咀嚼能力は栄養教育開始時には、栄養教育群と対照群間に差はみられなかったが、第2回測定時、第3回測定時、第4回測定時には栄養教育群の咀嚼能力は対照群に比較して有意に増大した。 	<p>統計解析:記載なし 調整変数:なし</p>	<p>健康教育、食行動、咀嚼、幼児、栄養指導、咀嚼機能検査</p>	<p>食事への関心・行動 発育・発達・健康</p>	<p>口腔機能(咀嚼力) 1)親に子の口腔機能を確認して理解してもらおう 2)子の食事への関心・行動変容を促し、親・子の食事づくり、食べる力を向上してもらおう(食育)</p>	<p>子どもの心配ごと 保護者の活動</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・母乳育児である群は、母乳育児でない群に比べて、1歳6か月時から3歳時にかけてのう蝕発生が少なかった。 ・3歳時に甘味飲食を1日3回以上する子どもは、そうでない子どもに比べて、1歳6か月時から3歳時にかけてのう蝕発生が少なかった。 	<p>統計解析:オッズ比、ロジスティック回帰分析 調整変数:なし</p>	<p>う蝕発生、リスク要因、ロジスティック回帰分析、母乳摂取の継続、1日3回以上の甘味飲食</p>	<p>食事・間食・飲料 発育・発達・健康</p>	<p>口腔機能(う蝕) 量(間食の回数) 質(食品・料理の種類・組み合わせが良くない(母乳栄養))</p>	<p>子どもの心配ごと</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・年少園児において、dmf(乳児う蝕指標)と「1日の食事回数」「間食の有無」との間に有意な正の相関がみられた。また、PMA(歯肉炎指標)と「1日の食事時間」「1日の水分摂取量」「間食の有無」との間に有意な正の相関がみられた。食事回数が「2回以下」は「3回以上」に比べて、間食を「する」は「しない」に比べて、dmfは有意に高くなった。食事時間が「早い」は「ゆっくり」に比べて、水分摂取量が「1000ml未満」は「1000ml以上」に比べて、間食を「する」は「しない」に比べて、PMAは有意に高くなった。 ・年中園児において、dmfと「1日の水分摂取量」との間に有意な正の相関がみられた。また、PMAと「間食の有無」との間に有意な正の相関がみられた。水分摂取量が「1000ml未満」は「1000ml以上」に比べて、dmfは有意に高くなった。間食を「する」は「しない」に比べて、PMAは有意に高くなった。 ・年長園児において、dmfと「1日の食事時間」「間食の規則性」との間に有意な正の相関がみられた。また、PMAと「偏食の有無」「間食の有無」「間食の規則性」との間に有意な正の相関がみられた。食事時間が「早い」は「ゆっくり」に比べて、dmfは有意に高くなった。偏食を「する」は「しない」に比べて、間食を「する」は「しない」に比べて、間食規則性が「不規則」は「規則的」に比べて、PMAは有意に高くなった。 	<p>統計解析:Kendallの順位相関係数、ロジスティック回帰分析 調整変数:なし</p>	<p>記載なし</p>	<p>生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康</p>	<p>生活習慣(食事時間が規則正しくない) 食事を食べる力(食べるものが偏る、だから食べる、速く食べる) 量(食事・間食の回数、飲料の種類と量を管理していない) 口腔機能(う蝕、歯肉炎指標)</p>	<p>子どもの心配ごと</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・授乳期間が18か月以上の児、夕食後の甘い飲み物やおやつ等の飲食の習慣がある児は、う蝕経験歯数が有意に多かった。 	<p>統計解析:ロジスティック回帰分析 調整変数:なし</p>	<p>齲歯、授乳、家庭内の喫煙状況、出生体重</p>	<p>生活 食事・間食・飲料 発育・発達・健康</p>	<p>生活習慣(間食のタイミングが遅い) 量(間食の回数、飲料の種類と量を管理していない、18か月以上の授乳) 口腔機能(う蝕)</p>	<p>子どもの心配ごと</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・18か月の就寝時刻が遅いほど、3歳での虫歯、上顎前歯の虫歯、上顎臼歯の虫歯、下顎前歯の虫歯、下顎臼歯の虫歯の発生率が高かった。 ・18か月の睡眠時間が短いほど、3歳での虫歯、上顎前歯の虫歯、上顎臼歯の虫歯、下顎前歯の虫歯の発生率が高かった。 	<p>統計解析:ピアソンの相関係数、バイナリロジスティック回帰分析 調整変数:臨床的特性、ライフスタイル特性</p>	<p>記載なし</p>	<p>生活 発育・発達・健康</p>	<p>口腔機能(虫歯) 生活習慣(就寝時刻が遅い、睡眠時間が短い)</p>	<p>子どもの心配ごと</p>

論文情報				調査対象	方法	調査項目						
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年	巻号	ページ	調査地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	研究デザイン/ 介入期間	調査方法/ 介入内容	テーマに関連する 調査項目	アウトカム指標 (利点、重要性に関する調査 項目)
227	Miyuki Saido, Keiko Asakura, Shizuko Masayasu, Satoshi Sasaki	Relationship Between Dietary Sugar Intake and Dental Caries Among Japanese Preschool Children with Relatively Low Sugar Intake (Japan Nursery School SHOKUKU Study): A Nationwide Cross-Sectional Study	Maternal and Child Health Journal	2016	20	3	556-566 44県(都道府県)	保育園に通う5~6歳児5158人	横断研究	調査票(ライフスタイル、食事)	遊離糖の摂取量 エネルギー摂取量 歯磨きをする頻度(朝晩) 睡眠時間 両親の学歴 身体活動	虫歯
228	Nanae Sato, Nobuyo Yoshiike	Dietary Patterns Affect Occlusal Force but Not Masticatory Behavior in Children	Journal of Nutritional Science and Vitaminology	2011	57	3	258-264 岩手県盛岡市	盛岡市内の2つの幼稚園に通う5歳児45人	横断研究	咬合力テスト 食事記録	摂取する食品の種類、摂取量	咬合力
229	M Tsuji, K Nakamura, Y Tamai, K Wada, Y Sahashi, K Watanabe, S Ohtsuchi, K Ando, C Nagata	Relationship of intake of plant-based foods with 6-n-propylthiouracil sensitivity and food neophobia in Japanese preschool children	European Journal of Clinical Nutrition	2012	66		47-52 愛知県	愛知県にある2つの幼稚園に通う4~6歳323人	横断研究	味覚検査 質問紙調査 食事記録	苦味に対する感受性 新規の食物に対する恐怖	野菜の摂取量 大豆製品の摂取量
230	Keiko Tanaka, Yoshihiro Miyake, Satoshi Sasaki	Intake of dairy products and the prevalence of dental caries in young children	Journal of Dentistry	2010	38	7	579-583 福岡県	2006年6月~2007年1月に北九州市で3歳児健診を受けた子ども2058人	横断研究	3歳児健診 質問紙調査	乳製品の摂取量	虫歯
231	上野 祐可子, 佐伯 和子, 良村 貞子	1歳半児の歯の萌出と15品目の食物摂取状況との関連	日本公衆衛生雑誌	2017	64	3	143-149 不明	大都市および近郊の4市で1歳半健診を受診した18~20か月児の保護者202名	横断研究	質問紙調査	歯の萌出状況(本数、奥歯の萌出状況)	食物の硬さ(15品目の食物摂取状況)
301	黄川田 美玲, 安梅 勤江, 丸山 昭子, 田中 裕, 酒井 初恵, 宮崎 勝宣	保育園を利用する4歳児の発達への複合的な関連要因に関する研究: 母親のストレスに焦点をあてて	保健福祉学会誌	2006	12	2	pp.15-24 全国	全国認可保育園67園の保護者と園児のデータがそろい、担当保育専門職から「障害あり」とした者を除いた4歳児419人	横断研究	質問紙調査	家族で食事をとする機会	子どもの発達(保育園児用発達検査票を用い、保育専門職が評価) 問題行動(指しゃぶり、人見知り等5項目) 健康状態(食欲不振、生活リズムの乱れ等3項目)
302	北川 千加良, 渡邊 智之, 盛岡 亜有, 末田 香里, 酒井 映子	園児の食育行動目標としての著しいに関連する要因	愛知学院大学心身科学	2017	9	1	9-17 愛知県	T市内の公立・私立を含む幼稚園4園、保育園8園に通う5歳児404名とその保護者	横断研究	聞き取り調査(園児) 質問紙調査(保護者)	著しい(園児) 生活習慣(園児) 生活習慣(保護者) 家庭環境(保護者) 食意識(保護者)	著しい
303	西野 美佐子	幼稚園教師が把握する幼児の健康実態と健康教育の必要性-生活充実感と健康増進への取り組みとの関連を踏まえて-	保育と保健	2010	16	2	64-73 不明	幼稚園教師262名	横断研究	質問紙調査	健康増進活動に対する取り組み状況および、取り組みを実現するために幼稚園教師がとっている園内教師間の相互サポートならびに保護者や地域との連携や行政・社会政策、制度に対する提案等の働きかけの程度	幼児の生活充実度

根拠となりうる研究結果		調査項目の分類			
	統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目	小項目	縦軸
<ul style="list-style-type: none"> ・虫歯のある子どもは、無い子どもと比べて、睡眠時間が長く、両親の学歴が高く、エネルギー摂取量が少なく、朝歯みがきをずる頻度と晩に歯みがきをずる頻度が高かった。また、居住地域にも有意な差があった。 ・1日の総エネルギー摂取量に占める遊離糖からのエネルギー摂取割合が高いほど、虫歯の本数が多かった。 ・1日の総エネルギー摂取量に占める遊離糖からのエネルギー摂取割合が比較的低い子どもにおいて、摂取エネルギー量1000kcalあたりのカルシウム、リン酸塩、でん粉、ビタミンD摂取量が多いほど、虫歯の本数が少なかった。 	統計解析: t検定、 χ^2 検定、多変量ポアソン回帰分析 調整変数: 母親の学歴、朝と晩の歯みがき頻度、居住地域	虫歯、砂糖の摂取、未就学児、予防、日本	生活習慣 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	口腔機能(虫歯) 量(エネルギー摂取量) 質(栄養素等摂取量) 生活習慣(睡眠時間、歯磨きの頻度) 自身の生活の理解(両親の学歴)	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> ・食物繊維摂取量、不溶性食物繊維摂取量の少ない群は、多い群、中程度の群と比べて、咬合力が弱かった。 ・水溶性食物繊維摂取量の少ない群は、多い群と比べて、咬合力が弱かった。 ・咀嚼に影響を与えると考えられる90の食品の摂取量が少ない群は、多い群と比べて、咬合力が弱かった。 ・野菜の摂取量、芋・野菜の摂取量、芋・野菜・きのこの摂取量の少ない群は、多い群と比べて、咬合力が弱かった。 	統計解析: シヤフィロウィルク検定、スピアマンの相関係数、マンホイットニーのU検定、ボンフェローニ検定 調整変数: なし	食事パターン、食物摂取、咬合力、咀嚼能力測定装置、咀嚼行動	食事・間食・飲料 発育・発達・健康	口腔機能(咬合力) 質(栄養素等摂取量、食品・料理の種類・組合せが良くない)	子どもの心配ごと
<ul style="list-style-type: none"> 男子 ・苦味に対する感受性の高い群は、低い群に比べて、大豆製品の摂取量が少なかった。 ・新規食品に対する恐怖が高い群は、低い群、中程度の群と比べて、野菜と大豆製品の摂取量が少なかった。 ・新規食品に対する恐怖が高い群は、低い群、中程度の群と比べて、苦味に対する感受性が高い子どもと低い子どものどちらにおいても、野菜の摂取量が低かった。 ・新規食品に対する恐怖が低い群は、中程度の群、高い群と比べて、苦味に対する感受性が高い子どもにおいて、大豆製品の摂取量が多かった。 	統計解析: スピアマンの相関係数 調整変数: 年齢、BMI、両親による食事のコントロール、摂取する食品の種類、総エネルギー摂取量	食事、植物性食品、食物新規恐怖、苦味、プロビルチオウラシル、未就学児	食事・間食・飲料 発育・発達・健康	口腔機能(苦味に対する感受性) 精神的(新規食品に対する恐怖) 質(食品の種類)	子どもの心配ごと
<ul style="list-style-type: none"> ・ヨーグルトの摂取量が多いほど、虫歯のリスクが低かった。 	統計解析: 対数二項回帰分析 調整変数: 性別、歯磨きの頻度、フッ素塗布の経験、間食頻度、母親の妊娠中の喫煙、家庭内での受動喫煙の環境、両親の学歴	横断研究、乳製品、虫歯、摂取、日本	食事・間食・飲料 発育・発達・健康	口腔機能(虫歯) 質(食品の種類)	子どもの心配ごと
<ul style="list-style-type: none"> ・「ステキ・ソテー1切れ」は、臼歯のかみ合わせが2組未満の児の方が、2組以上ある児より有意に食べてた。 	統計解析: χ^2 検定、Fisherの直接確率検定 調整変数: なし	食物の硬さ、歯の萌出	発育・発達・健康 食事・間食	質(食べるものの固さ・大きさがわからない) 口腔機能(咀嚼力・歯の萌出状況)	子どもの心配ごと
<ul style="list-style-type: none"> ・家族で食事を一緒にする機会がめったにないことは、社会適応のリスクと関連していたが、子どもの発達、問題行動、健康状態のリスクとの関連はみられなかった。 	統計解析: 多重ロジスティック回帰分析 調整変数: あり ・子どもの発達項目、問題行動、健康状態を目的変数 ・それ以外を説明変数	発達 ストレス 育児環境 育児意識 保育サービス	食事への関心・行動 発育・発達・健康	食事を食べる力(家族や保護者と一緒に食べる機会が少ない) 精神的(社会適応)	子どもの心配ごと
<ul style="list-style-type: none"> ・正しく著が使える園児では保護者が食事中に著使いを教育しているものが有意に高かった。 ・著を正しく使える園児は使えない園児よりも習い事をしてしている比率が高かった。 ・正しく著が使える園児は食事を楽しんでいる者が多く、食事を残さないで食べており、食事を楽しみにしているといった食事への期待が高い者が多かった。 ・著を正しく使える保護者では、感謝の気持ちを育成している者が多かった。 	統計解析: χ^2 検定、二項ロジスティック回帰分析 調整変数: なし	食育行動目標、著使い、家庭環境、生活習慣、食意識	生活 食事への関心・行動 発育・発達・健康	生活習慣(習い事) 食事を食べる力(食べるものが偏る(残さず食べる)、食具を使えない) 精神的(食事が楽しくなさそう) 食事づくり・食べる力(著の持ち方指導)	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> ・健康増進活動の取り組みについての得点が高い群は低い群に比べて、幼児の生活充実得点が高いことが示された。 ・幼稚園教師が取り組む連携(教師間、保護者、地域などの試み)についての得点が高い群は低い群に比べて、幼児の生活充実得点が高かった。 	統計解析: χ^2 検定 調整変数: なし	質問紙法、因子分析、学校、教育評価、教員、健康教育、健康増進、健康への態度、生活の質、ライフスタイル、人間関係、幼児、実態調査、幼稚園	食事・間食・飲料 発育・発達・健康	精神的(生活充実度) 2)親に子の食生活への関心をもってもらう(食育) 5)子・親の食生活支援のために組織内の多職種と連携し、地域の様々な組織・団体と連携する	子どもの心配ごと 支援者の活動

論文情報						調査対象	方法	調査項目					
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年	巻号	ページ	調査地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	研究デザイン/ 介入期間	調査方法/ 介入内容	テーマに関連する 調査項目	アウトカム指標 (利益、重要性に関する調査 項目)	
304	石塚 玲, 桂田 恵美子	幼児の情緒的・行動的問題に関する諸要因 母親の育児不安と早期保育および子どもの生活状態からの検討	家族心理学研究 (0915-0625)	2008	22	2	129-140	関西地方	保育園に通う2~6歳児264名とその母親	横断研究	質問紙調査	子どもの行動チェックリスト (CBCL)、育児不安尺度、子どもの生活状態、0歳児保育経験	CBCL尺度による外向的・内向的問題尺度得点および総得点 ※内向的問題(ひきこもり、身体的訴え、不安・抑うつ)、外向的問題(非行行動、攻撃的行動)
401	馬場 文, 小林 孝子, 川口 恭子, 小島 亜未, 田畑 真実, 浦田 民恵, 中本 潤, 齋藤 かおり	乳幼児のkey age別にみた食生活および食教育に関する現状と課題: A町の実態調査	人間看護学研究	2019	17		47-55	不明	A町乳幼児健診受診児の保護者90名	横断研究	質問紙調査、健診問診票と健診結果の転記	保護者の食教育行動や意識	保護者の食事準備の知識・技術・負担感、受診児の生活状況
402	白木 裕子	幼児をもつ保護者の食生活と食育への取り組みとの関連	日本小児看護学会誌	2012	21	3	1-7	不明	A幼稚園に通う園児の保護者207人	横断研究	質問紙調査	朝食摂取 共食 食事作りの知識・技術 食事作りの情報源	保護者の背景および食生活食育への取り組み
403	青柳 頌	子どもの食嗜好と食生活の関連の構造分析	体育測定 評価研究	2009	9		13-22	不明	F市内およびT市内の3つの幼稚園および保育園の園児290名とその保護者	横断研究	質問紙調査	食嗜好、食習慣、夕食の同伴者	食嗜好、食習慣
404	島本 和恵, 反町 吉秀, 岩瀬 靖彦	乳幼児の飲料摂取と母親の飲料に対する意識との関連	日本栄養士会雑誌	2016	59	9	555-566	東京都	9か月から3歳児までの乳幼児を持つ日本人の母親275名	横断研究	質問紙調査	母親の飲料に対する意識(飲料を与える理由、飲料を与えない理由)	飲料摂取の実態(飲料を与える頻度、飲料を与える場面)
405	堀田 千津子	母親の栄養成分表示利用行動と幼稚園児の間食との関連	日本食育学会誌	2010	4	3	165-170	三重県	幼稚園4~6歳の幼児を育児している担当者(すべて母親)410名	横断研究	質問紙調査	栄養表示の利用に関連する項目(栄養表示利用度、関心度、市販品の選択基準、栄養成分表示の情報の入手先)	間食についての項目(家庭の管理状況(内容、時間・量)、市販品の利用状況など)
406	木田 春代, 武田 文, 門間 貴史, 朴峠 周子, 浅沼 徹, 藤原 愛子, 香田 奏子	母親の就業状況別にみた幼児の偏食とその関連要因	民族衛生	2015	81	1	3-14	関東地方	公立幼稚園児633名	横断研究	質問紙調査	母親の属性、幼児の属性、幼児の偏食、母親の偏食、幼児に対する食教育	幼児の偏食
407	Yoko Sato, Sachina Suzuki, Tsuyoshi Chiba, Keizo Umegaki	Factors Associated with Dietary Supplement Use among Preschool Children: Results from a Nationwide Survey in Japan.	Journal of Nutritional Science and Vitaminology	2016	62	1	47-53	全国	未就学児を持つ20~40歳の母親2058人	横断研究	インターネット調査	子どものサプリメント摂取	ライフスタイル 食習慣(子ども/母親) 母親の食意識 母親の健康に関する情報源

根拠となりうる研究結果		調査項目の分類			
統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目	小項目	縦軸	
<p>(0歳児保育経験群と0歳児保育未経験群の比較)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2・3歳のグループでは、未経験群より経験群は食事中の行動(行儀良く自分から進んで食べる程度)がより望ましく、一回の食事にかかる時間も短く、内向的問題・外向的問題尺度得点および総得点が低かった。 ・4・5歳のグループでは、未経験群より経験群は食事中の行動(行儀良く自分から進んで食べる程度)がより望ましく、内向的問題尺度得点および総得点が低かった。 <p>(子どもの情緒的・行動問題のリスク関連要因についての検討)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・内向的問題と食事行動は有意に関連しており、母親が子どもの食事行動を1ポイントネガティブに認知すると、問題群となるリスクは増えることが示された。 	<p>統計解析: 共分散分析、ロジスティック回帰分析、χ^2検定</p> <p>調整変数: 年齢(月齢)</p>	<p>*育児、遊戯と玩具、行動、*行動症状(診断)、食行動、睡眠、*心理的ストレス(診断)、母、*不安(診断)、分岐分析、保育所、ロジスティックモデル、幼児、行動評価尺度</p>	<p>生活</p> <p>食事への関心・行動</p> <p>食事・間食・飲料</p>	<p>食事を食べる力(食事マナー、だから食べる、速く食べる)</p> <p>精神的(内向的傾向・外向的傾向)</p> <p>2)親に子の食生活への関心をもってもらう(0歳児保育の経験)</p> <p>3)子の食事への関心・行動変容を促し、親・子の食事づくり力、食べる力を向上してもらう(0歳児保育の経験)</p> <p>4)親に子の生活習慣を見直してもらい、自身の生活習慣の子の食生活への関心を理解してもらう(0歳児保育の経験)</p>	<p>子どもの心配ごと</p> <p>「子どもの心配ごと」「保護者の活動」</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・1歳6か月児において「食事中にテレビをつけない」ことを心掛けていない者は、「食事を整えるための知識や技術がない者」が多かった。 ・3歳6か月児で「食事中にテレビをつけない」ことを(保護者が)意識していないと、「DVD視聴時間」が3〜5時間と有意に長かった。 ・3歳6か月児で「食前2時間以内におやつを食べない」ことを(保護者が)意識していないと、「食事を整えるための知識や技術がない」者が多かった。 	<p>統計解析: Fisherの正確確率検定</p> <p>調整変数: なし</p>	<p>食生活・食教育</p>	<p>生活</p> <p>食事への関心・行動</p> <p>食事・間食・飲料</p>	<p>生活習慣(電子メディアの視聴時間が長い)</p> <p>質(間食(甘いもの)に気をつけていない)</p> <p>自身の生活の理解(食事中にテレビをつけないよ)にしている)</p> <p>食事づくり力、食べる力(食事づくりの得意・不得意さ)</p> <p>子の食事への関心・理解(子の食量・味付け・食べ方の理解がない)</p>	<p>子どもの心配ごと</p> <p>保護者</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・有職者より専業主婦が朝食を毎日摂取していた。 ・食事作りの知識・技術が「あり群」より「なし群」よりも朝食を毎日摂取していた。 ・保護者が毎日朝食を摂っている群およびバランスの良い朝食をとっている群が、そうでない群よりも子どもの共食ができていた。 ・有職者より専業主婦の方がバランスの良い朝食をとっていた。 ・食事作りの知識・技術において「なし群」より「あり群」がバランスの良い朝食をとっていた。 ・保護者が朝食を毎日食べている群、および栄養バランスの良い朝食をとる群が食育に取り組んでいた。 ・保護者の食事作りの知識・技術がある群、食育に関心のある群の方が食育に取り組んでいた。 	<p>統計解析: χ^2検定</p> <p>調整変数: なし</p>	<p>幼児</p> <p>保護者</p> <p>食生活</p> <p>食育</p>	<p>生活</p> <p>食事への関心・行動</p> <p>食事・間食・飲料</p>	<p>食事を食べる力(家族や保護者と一緒に食べる機会が少ない)</p> <p>自身の生活の理解(親の朝食摂取、就労状況、栄養バランス)</p> <p>食事づくり力、食べる力(食事づくりの得意・不得意さ)</p> <p>子の食事への関心・理解(保護者による食育、食育への関心)</p>	<p>子どもの心配ごと</p> <p>保護者</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・「夜食」「洋風食嗜好」「間食」に高い類似性、「健康的食嗜好」「食事時間」に高い類似性がみられた。 ・母親と兄弟の共食は好ましい・健康的な食嗜好・食生活と関連し、祖父父母や母親以外の者と共食は母親の共食とは逆の関連を示した。 ・孤食は洋風化された食嗜好やテレビの視聴と正の関連を示した。 	<p>統計解析: グッドマンクラスカルの順序連関係数、因子分析、重回帰分析</p> <p>調整変数: なし</p>	<p>構造分析、生活習慣病、多次元尺度構成法</p>	<p>食事・間食・飲料</p>	<p>生活習慣(電子メディアの視聴時間が長い)</p> <p>食事を食べる力(家族や保護者と一緒に食べる機会が少ない)</p> <p>量(間食の回数)</p> <p>質(料理の種類がよくない)</p>	<p>子どもの心配ごと</p> <p>保護者</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・「野菜+果実100%飲料」「牛乳」「イオン・機能性飲料」「野菜100%」「発酵乳・乳酸菌飲料」を「よく与える群」において、母親の飲料を与える理由が「子どもが好きだから」と回答した割合が有意に高かった。加えて「牛乳」は「水分補給」「発酵乳・乳酸菌飲料」は「機能性成分があると回答した割合が有意に高かった。 	<p>統計解析: χ^2検定、Fisherの正確確率検定</p> <p>調整変数: なし</p>	<p>幼児</p> <p>母親</p> <p>意識</p> <p>飲料摂取、水分補給</p>	<p>食事・間食・飲料</p>	<p>量(飲料の種類と量を管理していない)</p> <p>子の食事への関心・理解(子の食量・食べ方の理解がない)</p>	<p>子どもの心配ごと</p> <p>保護者</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・栄養成分表示の利用群では、非利用群に比べて栄養成分表示への関心が高く、購入時の主な選択基準として「栄養成分」「原材料、加工過程での安全性」が高い割合を示し、甘味料や栄養素が過剰に添加された市販の菓子に対する不安は高い割合を示し、講演会に参加する者が多く、間食を与える時間および量を決めている割合が高かった。 ・栄養成分表示の主な入手先については、利用群が非利用群に比べて「食品の包装」「新聞・雑誌」と「インターネット」が有意に高い割合を示した。一方、非利用群は「情報を得る機会がない」が利用群よりも高く、非利用群が情報を得にくい状況にあった。 ・栄養成分表示の利用度と、「栄養成分表示の関心」「市販の菓子に対する不安」「情報数」「参加度」の間に正の相関が認められた。 	<p>統計解析: χ^2検定、Spearmanの順位相関係数</p> <p>調整変数: なし</p>	<p>幼稚園児、栄養、間食</p> <p>栄養成分表示</p>	<p>食事・間食・飲料</p>	<p>子の食事への関心・理解(栄養バランスへの配慮、食育への関心、食品添加物への不安)</p>	<p>保護者</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・無職の母親は無職の母親よりも、「決まった時刻に食事をさせている」「間食の質・量を決めている」「料理は一人分ずつ盛り付けている」「食事の時間はテレビを消している」の項目によくあてはまる、まああてはまると回答割合が有意に高かった。 ・無職の母親において、母親が偏食ありの場合、幼児の偏食ありの割合が有意に高かった。 ・無職の母親において、「食べ残しをしないように言っていない」「子どもの嫌いな物や苦い物を食事にし出してない」と回答した場合に幼児の偏食ありの割合が有意に高かった。 ・有職の母親において、「料理をする時、子どもに手伝わせていない」と回答した場合に幼児の偏食ありの割合が有意に高かった。 	<p>統計解析: 多変量ロジスティック回帰分析、単変量ロジスティック回帰分析</p> <p>調整変数: 母親の年齢、幼児の年齢、性別</p>	<p>幼児</p> <p>母親</p> <p>偏食</p> <p>食教育</p> <p>就業状況</p>	<p>生活</p> <p>食事への関心・行動</p> <p>食事・間食・飲料</p>	<p>生活習慣(電子メディアの視聴時間が長い(テレビを見ながら食事をする習慣)、食事時間が規則正しくない)</p> <p>食事を食べる力(食べるものが偏る)</p> <p>量(間食の回数)</p> <p>質(食事と間食(甘いもの)に気を付けていない)</p> <p>自身の生活の理解(就労状況、親の偏食)</p> <p>食事づくり・食べる力(子どもと一緒につくることがない、偏食(好き嫌い)をなくす工夫)</p>	<p>子どもの心配ごと</p> <p>保護者</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・サプリメントを摂取する子どもは、摂取しない子どもと比べて、年齢が高く、毎朝元気に起床できず、朝食を欠き、外食が多かった。また、社会環境(幼稚園、保育園、自宅)にも有意差があった。 ・サプリメントを摂取する子どもの母親は、摂取しない子どもの母親と比べて、年齢が高く、飲酒をし、サプリメントを摂取し、食事に関して多くの情報源を使い、食事に関する情報の正誤を判断できるとし、子どもにテーブルマナーを教え、最もよく使う情報源が店舗である者が多かった。また、家庭収入にも有意な差があった。 ・子どものサプリメント摂取と、子どもの年齢、朝食欠食、週に2回以上の外食、母親のサプリメント摂取には正の相関があった。 ・子どものサプリメント摂取と、子どもが毎朝元気に起床することには負の相関があった。 	<p>統計解析: χ^2検定、t検定、ロジスティック回帰分析</p> <p>調整変数: なし</p>	<p>未就学児、栄養補助食品、生活様式、食習慣、母親の意識</p>	<p>生活習慣</p> <p>食事への関心・行動</p> <p>食事・間食・飲料</p>	<p>量(食事・間食の回数(朝食欠食))</p> <p>質(外食、サプリメントを摂取している)</p> <p>生活習慣(起床の方法)</p> <p>子の食事への関心・理解(子の食量・味付け・食べ方の理解がない、食事に対して多くの情報源を使う)</p> <p>食事づくり・食べる力(食事マナーの指導)</p> <p>自身の生活の理解(食生活スタイル(世帯収入、サプリメントを摂取している、飲酒))</p>	<p>子どもの心配ごと</p> <p>保護者</p>

論文情報					調査対象	方法	調査項目				
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年 巻号	ページ	調査地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	研究デザイン/ 介入 期間	調査方法/ 介入内容	テーマに関連する 調査項目	アウトカム指標 (利点、重要性に関する調査 項目)
408	Hitomi Okubo, Yoshihiro Miyake, Satoshi Sasaki, Keiko Tanaka, Kentaro Murakami, Yoshio Hirota, Osaka Maternal, Child Health Study Group	Dietary patterns in infancy and their associations with maternal socio-economic and lifestyle factors among 759 Japanese mother-child pairs: the Osaka Maternal and Child Health Study.	Maternal and Child Nutrition	2014 10 2	213-225	大阪府	16~24か月の子 ども758人とその母親	横断研究	質問紙調査	母親の社会経済的状況 母親のライフスタイル特性	子どもの食事パターン
409	Midori Ishikawa, Kumi Eto, Miki Miyoshi, Tetsuji Yokoyama, Mayu Haraikawa, Nobuo Yoshiike	Parent-child cooking meal together may relate to parental concerns about the diets of their toddlers and preschoolers: a crosssectional analysis in Japan	Nutrition Journal	2019 18 1	記載なし (Article number: 76)	全国	2~6歳の子ども 2237人とその両親	横断研究	質問紙調査	親子で一緒に料理をするこ と	子どもの体格 テレビ・ゲームの視聴時間 食物アレルギー 虫歯 食品群別摂取頻度 子どもの食に関する親の意 識
501	曾我部 夏子, 田 辺 里枝子, 萩川 摩希, 井上 美津 子, 五関 正江 [曾根]	1歳2か月児における外食頻 度と食生活状況との関連	日本食育 学会誌	2016 10 1	pp.25-30	東京都	K区の1歳2か月児 歯科健診を受診し た1歳1~3か月の幼 児502人(男児250 人、女児252人)	横断研究	質問紙調査	外食の頻度	子どものおかずの調理方法 子どもの食事で気を付けて いること 食事作りで困っていること 平日の朝食、昼食、夕食の 共食者
502	矢倉 紀子, 笠置 綱清, 南前 恵子	乳幼児期の食体験と保健指 導効果に関する縦断的研究	小児保健 研究	2001 60 1	75-81	鳥取県境港 市	継続群:1996年1~ 5月に出生した乳児 を持つ母親のうち、 6・8・11・15・18・24・ 30か月時に調査に 協力した40名 コントロール群:1回 のみの調査に参加 した84名	縦断研究 /2年間	陰謀法による 食事調査、質 問紙調査/味 付け継続群の み保健指導 (測定値を報 告し、摂取量 の多いものを 注意)を実施	母親の味付け行動(味付け の継続/移行)、外食行動	塩分摂取量
503	四元 みか, 川越 佳昭	固形食移行期における20食 品の摂取状況についての縦 断的調査~鹿児島県の一 地方自治体における7か月児健 診から3歳児健診までのアン ケート調査~	小児保健 研究	2018 77 1	50-60	鹿児島県	平成21年生まれの 乳幼児健診対象児 1232人(男子646 人、女子586人)、延 べ調査票回収数 3647枚	縦断研究 /3年	質問紙調査 (生後7か月、 9・11か月、1歳 6か月、2歳、3 歳児)	各時期摂取食品数	3歳6か月時摂取食品数
504	砂見 綾香, 多田 由紀, 梶 忍, 二 階堂 邦子, 井上 久美子, 大西 芽 衣, 乳井 恵美, 吉崎 貴大, 横山 友里, 日田 安寿 美, 川野 因	幼稚園児および保護者に対 する食育プログラムが両者の 食生活に及ぼす影響	日本食育 学会誌	2012 6 3	265-272	東京都	私立M幼稚園に通う 園児および保護者 33人	前後比較 試験/2か 月	管理栄養士が 保護者および 園児それぞれ に3色食品群 に関する食育 を実施し、保護 者は行動目標 の設定、モニタ リングを管理 栄養士による サポートの元 で実施し、園 児にはスタン プブックを配布	食物摂取状況	野菜類、果実類、菓子類摂 取量の変化

根拠とならうる研究結果		調査項目の分類			
	統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目 「発育・発達・健康」「食事・間食・飲料」「食事への関心・行動」「生活」	小項目	縦軸 「子どもの心配ごと」「保護者」「支援者の活動」
<ul style="list-style-type: none"> 子どもの主食、肉、魚、卵、野菜、果物、ヨーグルト、お茶の摂取量が多い群は、プリン、ゼリー、チョコレート、せんべい、ジュースの摂取量が多い群と比べて、母親の学歴が高く、働いている者が多く、年収が高く、妊娠中の喫煙が少なく、母親が小麦製品の摂取が少ない食事をし、米・魚・野菜の摂取が多い食事をしてきた。 子どもの菓子・甘味飲料の摂取が多いほど、母親の学歴が高かった。 子どもの菓子・甘味飲料の摂取が多い食事は、母親の米、魚、野菜の摂取が多い食事と負の相関があった。 	統計解析: χ^2 検定、ロジスティック回帰分析 調整変数: 母親の年齢、妊娠前のBMI、学歴、就業状況、家庭収入、家族構成、夫の有無・対象の子どものより年上の兄弟、妊娠中の喫煙、身体活動レベル、母乳育児の期間、離乳の開始時期、子どものテレビ視聴時間、母親の食事パターン	食事パターン、クラスター解析、社会経済的特徴、幼児、母親	生活習慣 食事・間食・飲料	量(間食の回数(多い)、飲料の種類と量を管理していない) 質(食品・料理の種類・組み合わせが良くない、食事と間食(甘いもの)に気をつけていない) 自身の生活の理解(食生活スタイル(摂取食品群頻度、妊娠中の喫煙、世帯収入)、母親の学歴)	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> 親子で一緒に料理をする子どもは、しない子どもと比べて、平日及び週末にテレビ、ビデオ、ゲームの視聴に使う時間が少なかった。 親子で一緒に料理をしない親は、する親と比べて、子どもが食事中に食べ物や道具で遊ぶことや、食べすぎを気にしていた。 親子で一緒に料理をする親では、子どもの好き嫌い、食事中に食べ物で遊ぶことを気にしない者が(気にする者と比べて)多かった。食べすぎを気にする者が(気にしない者と比べて)多かった。 親子で一緒に料理をする子どもは、しない子どもと比べて、魚・大豆・大豆製品、野菜、牛乳の摂取頻度が高く、ファストフードの摂取頻度が低かった。 	統計解析: χ^2 検定、ロジスティック回帰分析 調整変数: 子どもの性別、母親の就業状況、同居している家族、主観的経済状況、余暇、日中の保育者	一緒に料理をする、子ども、親、好き嫌い、食事中に食べ物/道具で遊ぶ、食べ過ぎ	生活習慣 食事への関心・行動 食事・間食・飲料	量(食べる量が多い) 質(食品の種類、ファストフードが多い) 食事をつくる力(料理づくりのお手伝いをしていない) 食事を食べる力(食べるものが偏る(好き嫌い)、あそび食がある) 生活習慣(電子メディアの視聴時間が長い)	子どもの心配ごと 支援者の活動
<ul style="list-style-type: none"> 子どものおかずの調理方法が大人と同じと回答した者の割合は外食あり群で高かった。 子の食事で、使用する食材が偏らないように気をつけている者の割合は、外食なし群で高かった。 朝食を「家族の誰かと一緒に食べる」、「家族そろって食べる」者の割合は、外食なし群に比べて外食あり群で高く、逆に「子どものみ」で食べる者の割合は外食あり群で高かった。 	統計解析: χ^2 検定 調整変数: なし	幼児 外食 食習慣 食育	食事への関心・行動 食事・間食・飲料	食事を食べる力(家族や保護者と一緒に食べる機会が少ない) 質(外食) 食事づくり・食べる力(家でおかずの調理法) 子の食事への関心・理解(食材が偏らないようにする)	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> 継続群における塩分摂取量は、コントロール群と比較して、11か月までは低かったが、18か月以降では、むしろ高かった。 生後11か月を境に家族と同じ味付けへの移行群の増加などから、幼児期への移行と共に味付けを含めた食事作りへの母親の配慮がゆりみ、離乳完了期以降は保健指導の効果がほとんどなかった。 18か月児では外食頻度が高いと塩分摂取量が多かった。 	統計解析: 無記入 調整変数: なし	離乳食・塩分・保健指導	食事への関心・行動 食事・間食・飲料	質(栄養素等摂取量、外食) 2)親に子の食生活への関心をもってもら	子どもの心配ごと 支援者の活動
<ul style="list-style-type: none"> 1歳7か月において摂取食品数が多い群では、3歳6か月における摂取食品群が有意に多かった。また、2歳7か月においても同様の結果が得られた。一方、7か月における摂取食品数が多いほど、1歳7か月、2歳7か月の摂取食品数は有意に多かったが、3歳6か月食品数に影響を及ぼす(1歳半頃の摂取食品数と3歳6か月における摂取食品数)との有意な関連は得られなかった。 	統計解析: Mann-WhitneyU 検定 調整変数: なし	固形食移行期、食品接種、咀嚼機能	食事への関心・行動	食事を食べる力(食べるものが偏る) 質(食品・料理の種類・組み合わせが良くない)	子どもの心配ごと
<ul style="list-style-type: none"> 食育プログラム実施前と比較して、保護者の野菜摂取量は増加し、園児および保護者の菓子類によるエネルギー摂取量は減少した。野菜増加量、果実類増加量、菓子類によるエネルギー摂取量の減少量は、いずれも保護者と児童で有意に相関していた。 目標設定無し群に比べて目標設定あり群のほうが、果実類の変化量が有意に多かった。 	統計解析: t検定、Wilcoxonの符号付順位和検定、Mann-WhitneyのU検定(Pearsonの相関係数、Spearmanの順位相関係数) 調整変数: なし	食育、保護者、食物摂取頻度調査	生活 食事・間食・飲料	質(食品・料理の種類・組み合わせが良くない、食事と間食(甘いもの)に気をつけていない) 自身の生活の理解(食生活スタイル) 2)親に子の食生活への関心をもってもら	子どもの心配ごと 保護者 支援者の活動

論文情報				調査対象	方法	調査項目							
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年	巻号	ページ	調査地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	研究デザイン/ 介入期間	調査方法/ 介入内容	テーマに関連する 調査項目	アウトカム指標 (利益、重要性に関する調査 項目)	
505	高尾 優, 足立 奈緒子, 松本 麻 衣, 池本 真二	保育園児への食育介入および保護者への教育介入の有効性に関する検討	日本栄養 士会雑誌	2010	53	3	246- 251	東京都	A区の公立保育園 の4歳~5歳児135 名(男児81名、女児 54名)とその保護者 のうち46名	前後比較 デザイン /9か月	質問紙調査 /園児への介 入は、5テーマ 全18回の参加 型教育媒体を 用いた情報発 信を行った。保 護者への介入 については6 テーマ全18 回のリーフレッ トによる情報発 信を行った。	〈保育園〉 I 園児の身体測定値 II 園独自の食育への取組 III 保育士としての食育介入 に対する評価 (園児) I 早寝・早起き・朝ごはんに ついて II 虫歯・食中毒について III 3色食品群について IV 食事マナーについて (保護者) I 子どもの生活について II 食育介入の評価 III 子どもと保護者の変化	介入前と介入後の園児のアンケートの総合得点、園児と保護者の調査終了時における家庭での変化
506	松添 直隆, 川上 育代, 中嶋 名葉, 和島 孝浩, 北野 直子	園児を取り巻く食環境の現状	保育と保健	2012	18	2	92-96	熊本県	保育園に通う4・5歳 児の保護者849名	横断研究	質問紙調査	保護者の食の情報源、食行 動、保育園における食育活 動	園児を取り巻く食環境の実 態
507	Harada Tetsuo, Hirofumi Masaaki, Maeda Mari, Nomura Hiromi, Takeuchi Hitomi	Correlation between breakfast tryptophan content and morning-evening in Japanese infants and students aged 0-15 yrs	Journal of Physiologic al Anthropolo gy	2007	26	2	201-207	高知県	高知市の0~6歳の 幼児1,055名、小学 生751名、および中 学生473名	横断研究	質問紙調査	M-E(朝型-夜型)スコア、睡 眠習慣、精神状況、食事	朝食中のトリプトファン量
508	早瀬 須美子, 熊 谷 佳子, 庄司 史香, 福安 智哉, 藤本 理代, 徳留 裕子, 山中 克己	幼児の骨量に関連する要因 の検討-母親との類似性を 中心に-	名古屋栄 養科学雑 誌 = Nagoya Journal of Nutritional Sciences	2016	2	1-11	不明	保育園年長園児と その保護者101組	横断研究	骨量測定、遺 伝子解析、食 事調査	ビタミンD受容体遺伝子多 型、食物摂取頻度	音響的骨評価値(OSL)	
601	池谷 真梨子, 柳 沢 幸江	保育所における手づかみ食 べに対する取組みの現状と 保育士からみた手づかみ食 べの意義とその関連要因	日本家政 学会誌	2017	68	2	70-79	東京都	認可保育所のうち、 0歳児保育を行っている 604園の0歳児 クラス担任602名	横断研究	質問紙調査	手づかみ食べに対する取組 みの現状	職員間の連携(保育士間、 栄養士等)と保護者への働 きかけ
602	廣 陽子, 庄司 圭子	幼児の野菜生長認識と幼児 及び保護者の食に関わる態 度との関連性	論攷	2011	56	9-18	兵庫県	幼稚園児4,5歳 計392名とその保護 者	横断研究	質問紙調査	野菜成長クイズ正答得点	〈幼児の食に関わる態度〉 ①食への興味関心 ②共食教養 ③食事時の注意散漫 ④積極的摂取行動 〈保護者の食に関わる態度〉 下位尺度得点 ①家族団欒配慮 ②家族の食への配慮 ③子どもに対する食教育推 進 ④食事提供の工夫 ⑤子どもの偏食に対する工 夫	
603	金田 直子, 高塚 安紀穂, 西岡 愛 梨, 春木 敏	幼稚園と家庭をつなぐ食育プ ログラムと食育だよりの評価	学校保健 研究	2017	58	6	350-360	不明	A市の公立幼稚園・ 私立幼稚園の園児 とその保護者各々 65名、幼稚園教諭	前後比較 デザイン /6か月	質問紙調査/ 園児を対象と する食育(食育 プログラム)、 保護者を対象 とする食育(食 育だより)	食育家の評価、食育だより を読んだ程度、家庭におけ る食育の実施状況、子ども と保護者の食生活状況	食育家の評価、家庭におけ る食育の実施状況、子ども と保護者の食生活状況

根拠となりうる研究結果		調査項目の分類			
	統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目	小項目	縦軸
<p>・園児のアンケートの総合得点を介入前と介入後で比較すると、Ⅲの3色食品群についての項目の「赤のグループの食べ物はどれか」、「黄色のグループの食べ物はどれか」「血や肉のもとになる食べ物はどれか」で有意に得点が上昇した。また、「体に良い食品の組み合わせはどれか」においても有意に得点が上昇した。</p>	統計解析: χ^2 検定 調整変数: なし	保育園、食育、幼児、参加型教育、エプロンアター、パネルアター	生活 食育への関心・行動 食事・間食・飲料	食事をつくる力(食に関する知識) 2) 親子の食生活への関心をもってもらう(栄養教育)、子に自身の食生活への関心をもってもらう(栄養教育) 3) 子の食事への関心・行動変容を促し、親・子の食事づくり力、食べる力を向上してもらう(栄養教育)	子どもの心配ごと 保護者 支援者の活動
<p>・「こんぶやいりこでだしをとり、料理をしていますか」では、「毎日作る」と回答した3世代以上世帯は2世代世帯よりも有意に多かった。一方、「1か月に数回」もしくは「作らない」と回答した2世代世帯は3世代以上世帯よりも有意に多かった。 ・外食の頻度の「週1日」は、2世代世帯が3世代以上世帯よりも多い傾向があった。 ・中食の利用頻度の「週1日」は2世代世帯が3世代以上世帯よりも有意に多く、「中食を食べない」3世代世帯は2世代世帯よりも有意に多かった。</p>	統計解析: χ^2 検定 調整変数: なし	育児、家族特性、食行動、データ収集、保育園、幼児、食育、自己報告式質問調査、*保護者、実態調査	生活 食育への関心・行動 食事・間食・飲料	質(ファストフード・即席めん・加工食品が多い(調理済み食品の使用)、外食)自身の生活の理解(祖父母の存在) 食事づくり・食べる力(調理の工夫)	子どもの心配ごと 保護者
<p>・9～15歳ではM-E(朝型-夜型)スコアと朝食トリプトファン指数に有意な関連がなかったが、0～8歳では有意な正の相関を認めた。(0～8歳では朝食トリプトファン指標が少なく寝つき・寝起きが悪い)</p>	統計解析: Pearsonの相関係数、Wilcoxon検定、Mann-WhitneyのU検定、ANOVA 調整変数: なし	サーカディアンリズム、Melatonin、Serotonin、Tryptophan、質問紙法、怒り、食行動、食品中のタンパク質、睡眠、乳児、幼児、抑うつ、中学生、小学生、高知市	生活 食事・間食・飲料	生活習慣(就寝・起床時間が遅い、起床の方法) 質(栄養素等摂取量)	子どもの心配ごと
<p>・幼児と母親間の摂取食品群頻度は、カルシウム供給源食品、たんぱく質供給源食品、ビタミン供給源食品、ビタミンD供給源食品の摂取頻度で有意な正の相関があった。</p>	統計解析: Pearsonの相関係数、対応のない検定、Mann-Whitney検定、Kruskal-Wallis検定 調整変数: なし	幼児、母親、骨量、ビタミンD受容体遺伝子多型	生活 食事・間食・飲料	質(食品・料理の種類・組み合わせが良くない)自身の生活の理解(摂取食品群頻度)	子どもの心配ごと 保護者
<p>・手づかみ食べを「とても積極的にやっている保育所」は職員間(保育士、栄養士等)の連携がとれており、保護者への働きかけもよく行っていた。 ・手づかみ食べに積極的な保育士では、食物の提供方法への工夫や家庭での手づかみ食べの促進を行っており、手づかみ食べの頻度による園児の特徴が「非常にある」と回答した割合が高かった。</p>	統計解析: Fisherの直接確率検定、Mann-WhitneyのU検定 調整変数: なし	手づかみ食べ、保育園、保育士	生活 食事をつくり・食べる 食事・間食	4) 親に保育園等での食事の様子を理解してもらおう 3) 親・子の食べる力を向上してもらおう	支援者の活動
<p>・正答得点と幼児の食に関わる態度では、①「食への興味・関心」因子のみに有意差が認められた。野菜の成長認識の高い幼児は「日頃の生活の中で、野菜に興味・関心を持っている」や「健康と食べ物に関心がある」「食材や料理する人に関心がある」といった、食に関わることへの興味・関心が高かった。 ・正答得点と保護者の食に関わる態度では、①～⑤のすべての因子(①家族団らん尊重②家族の食への配慮③子どもに対する食教育推進④食事提供の工夫⑤子どもの偏食に対する工夫)に有意差が認められた。幼児の野菜成長認識の高さは、保護者の食卓を通しての家族への関わりを大切にすることや、子どもへの食教育充実、食事提供の工夫といった行動や意識の高さと相互に結びついていた。 ・幼児および保護者の食に関わる態度との相互関連性では、すべての下位尺度間で有意な相互関係が認められた。食に関わる態度が高い保護者に養育された幼児は「食への興味・関心」が高かった。「子どもに対する食教育推進」が高い保護者に育成された幼児は「食に関わる態度」が高かった。</p>	統計解析: 主因法・Promax回転による因子分析 調整変数: なし	幼児、保護者、野菜生長認識、食に関わる態度	食育への関心・行動 食事・間食・飲料	食事をつくる力(食に関する知識) 食事づくり・食べる力(偏食をなくす工夫) 子の食事への関心・理解(食生活・食習慣への配慮、保護者による食育)	子どもの心配ごと 保護者
<p>〈食育だよりを読んだ程度別にみた家庭における食育の実施状況〉 ・4歳児食育「食べ物に親しむ」においては食育だよりを全て読んだ保護者の家庭において、4歳児食育の全般にわたり、幼稚園での食育を家庭でよく実践しており、題材別にみると「野菜」、「米」、「魚」において有意差がみられた。 ・5歳児食育「作って食べよう」においては食育だよりを全て読んだ保護者の家庭において、5歳児食育の全般にわたり、「子どもによる食育内容の家族への伝達」「子どもによる家庭での料理または工作の催促」「親子での料理または工作の実践」がよくなされていた。 〈食育だよりを読んだ程度別にみた子どもと保護者の食生活状況〉 ・5歳児食育実施後において、食育だよりを全て読んだ群と一部読んだ群を比較すると、子どもによる「料理の手伝い」「食事の催促」「食べ物に関する話」「食事への感想」に差がみられ、食育だよりを全て読んだ保護者は「よく言う」と回答した者が多かった。加えて「子どもとの食べ物・料理についての会話」「家庭における食育の認識」について差がみられ、食育だよりを全て読んだ保護者は「子どもと食べ物・料理についてよく会話する」「家庭での食育を実践している」と回答した者が多かった。</p>	統計解析: χ^2 検定、Fisherの正確確立検定、Mann-WhitneyのU検定、McNemar検定、Wilcoxonの符号順位和検定 調整変数: なし	食育プログラム、幼稚園児、保護者、幼稚園教諭、幼稚園と家庭の連携	食育への関心・行動 食事・間食・飲料	食事をつくる力(食べ物への関心がない、料理づくりのお手伝いをしていない) 食事づくり・食べる力(子どもと一緒にすることができない) 子の食事への関心・理解(保護者による食育、食育への関心)	子どもの心配ごと 保護者

論文情報				調査対象		方法		調査項目					
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年	巻号	ページ	調査地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	研究デザイン/ 介入期間	調査方法/ 介入内容	テーマに関連する 調査項目	アウトカム指標 (利益、重要性に関する調査 項目)	
604	菅野 靖子, 村山 伸子	幼稚園の4歳児における単独の野菜栽培体験が野菜摂取に及ぼす影響	新潟医療福祉学会誌(1346-8774)	2011	11	2	64-69	新潟県	幼稚園の4歳児32人	前後比較試験/3か月	質問紙調査および「なす」の栽培、収穫、調理、摂食	幼稚園給食でのなす料理の摂取状況 家庭でのなす料理の摂取状況	
605	林 伸子, 岡村 真理子, 小松 啓子	幼稚園における食材体験活動と子どもたちの野菜嗜好の変化	生活体験学習研究	2002		2	55-64	不明	幼稚園5歳児17名(男児8名, 女児9名)	前後比較試験/約6か月	質問紙調査、食材体験活動	日常の食事によく利用される野菜29品目に対する子どもの嗜好	
701	会退 友美, 市川 三紗, 赤松 利恵	幼児の朝食共食頻度と生活習慣および家族の育児参加との関連	栄養学雑誌	2011	69	6	pp.304-311	東京都	都内の幼稚園及び幼保一元化施設10園に通う3歳以上の園児を持つ母親524人	横断研究	質問紙調査 家族そろっての朝食共食頻度 家族そろっての夕食共食頻度	食事の規則正しさ 間食の規則正しさ 食前に食べ物を与える頻度 起床時間 就寝時間	
702	今本 美幸, 西川 貴子, 伊達 佐和子, 森下 敏子	子どもの料理教室における「食」への関心の高まりについて	論叢	2011		56	39-46	不明	P保育園5, 6歳児, M保育園5, 6歳児, S保育園4, 5, 6歳児, 58名	介入研究 /1年	質問紙調査/ 保育園の年長児対象の料理教室を実施した。	好き嫌い、食習慣、調理体験後の子どもの様子	好き嫌い
703	増村 美佐子, 深谷 友香, 前田 典子, 和田 早苗, 曲木 美枝, 矢埜 みどり	食育だよりの配布による幼児と保護者の食行動の変化	兵庫大学論集	2015		20	251-259	不明	H幼稚園の年中組の園児および保護者86名	前後比較試験/ デザイン/10か月	質問紙調査/ 食育だよりの配布(月1回)	子どもの健康状態、子どもの食生活、保護者の食生活、食育だよりの必要項目、食育だよりの実施度	幼児と保護者の食行動
704	曲木 美枝, 前田 典子, 増村 美佐子, 和田 早苗, 矢埜 みどり	1年間の継続した食育講座がもたらす保護者の変化および5ヵ月後の効果	兵庫大学論集	2015	なし	20	231-236	不明	K幼稚園の年中組の親子18組35名	前後比較試験/1年5か月	質問紙調査/ 栄養マネジメント 「食」が学食活動「平成25年度食のちびっこ応援隊クラブ」(2か月ごと全5回の親子クッキング)	子どもの食事マナー、お手伝いの状況	
705	會退 友美, 赤松 利恵, 杉本 尚子	幼児期前期における嫌いな食べ物の質的变化に関する縦断研究	栄養学雑誌	2013	71	6	323-329	静岡県	10か月児、1歳6か月児、3歳児健康診査すべてに参加した乳幼児の家庭での育児に携わる者13113人	縦断研究 /2年2か月	質問紙調査	属性	好き嫌い
706	松添 直隆, 川上 育代, 中嶋 名菜, 和島 孝浩, 北野 直子	園児と保護者の食嗜好の現状	保育と保健	2013	19	1	35-40	熊本県	保育園40園に通う4・5歳児の保護者849名	横断研究	質問紙調査	園児と保護者の食意識並びに食行動	園児と保護者の食嗜好の現状
707	松尾 瑞穂, 泉 秀生, 前橋 明	保育園幼児の生活実態(2010年調査報告)とその課題	保育と保健	2012	18	2	61-67	東京都、大阪府、宮城県、埼玉県、神奈川県、石川県、三重県、滋賀県、和歌山県、兵庫県、岡山県、高知県、福岡県、長崎県、沖縄県	1~6歳の保育園幼児20,518名の保護者	横断研究	質問紙調査	就寝時刻、睡眠時間、起床時刻、朝食摂食状況、朝の排便状況、主なあそび場、テレビ・ビデオ視聴時間、夕食開始時刻	幼児の生活実態
708	峯木 真知子, 戸塚 清子	魚介類及びその料理に対する全国保育園児の嗜好(2006年) - 肉類・乳類に対する嗜好との比較 -	日本家政学会誌(0913-5227)	2011	62	6	387-394	北海道、秋田県、宮城県、栃木県、東京都、神奈川県、山梨県、長野県、富山県、和歌山県、鳥取県、高知県、福岡県、鹿児島県、沖縄県	保育所に通所する3歳以上の保育園児1342名	横断研究	質問紙調査	母親および父親の魚介類、肉類および乳類に対する嗜好、魚介類料理・肉類料理および乳類の料理が食事に占める割合、魚介類料理の工夫、保護者は魚介類料理が得意かどうか、幼児の食事・気をつけていること、乳・乳製品を使った料理をつくるか	子どもの魚介類、肉類および乳類に対する嗜好、幼児の魚が嫌いな理由、魚介類の調理法に対する幼児の嗜好、幼児が好んで食べる乳・乳製品の料理法

根拠となりうる研究結果	調査項目の分類				
	統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目 「発育・発達・健康」「食事・間食・飲料」「食事への関心・行動」「生活」	小項目	縦軸 「子どもの心配ごと」「保護者の活動」
<p>・「なす」の味噌炒め。カレー炒めともに、事前に比べ事後で摂取量が有意に多かった。</p> <p>・通常給食の副菜の野菜摂取率は、事前のひじき入りサラダと事後のきざみ昆布の炒り煮では事後で有意に高かった。</p> <p>(「家庭で「なす」料理が出されたときに「食べる」割合は、事前と事後で有意な差はみられなかった。)</p>	統計解析: 対応のあるt検定、Wilcoxonの符号付順位検定、McNemar検定 調整変数: なし	野菜栽培、野菜摂取、幼稚園給食、前後比較デザイン	食事への関心・行動 食事・間食・飲料	食事をつくる力(食材の栽培体験がない) 量(食べる量が少ない・多い)	子どもの心配ごと
<p>・活動前後で子どもたちの備食状況を比較すると、男児8名中4名、女児9名中全員の野菜に対する嗜好性が、プラスに変化した。</p>	統計解析: なし 調整変数: なし	連続的な食生活体験: 備食改善、幼児	食事への関心・行動	食事をつくる力(食材の栽培体験がない) 食事を食べる力(食べるものが偏る)	子どもの心配ごと
<p>・朝食共食頻度が高い者は、夕食共食頻度も高かった。</p> <p>・朝食共食頻度の高さには、食事時間が規則正しく決まっていること、間食時間が規則正しく決まっていること、7時前に起床していること、21時以前に就寝していることが関連していた。</p>	統計解析: χ^2 検定、単変量と多変量ロジスティックス回帰分析 調整変数: なし	共食 幼児 朝食 母親 育児参加	生活 食事への関心・行動	生活習慣(就寝・起床時間が遅い、食事時間が規則正しくない(食事時刻・間食時刻を決めていない)) 食事を食べる力(家族や保護者と一緒に食べる機会が少ない)	子どもの心配ごと
<p>・家庭において親子で料理をする子どもは、していない子どもと比較して嫌いな食品や苦手な食品の数が有意に少なかった。</p>	統計解析: 記載なし 調整変数: なし	子ども、料理教室、食育、体験	食事への関心・行動	食事をつくる力(料理づくりのお手伝いをしていない) 食事を食べる力(食べるものが偏る) 食事づくり・食べる力(子どもと一緒にすることがない)	子どもの心配ごと 保護者
<p>・園児のマナーは、「苦手な物も食べる」「茶碗を正しく持つ」園児が増加した。</p> <p>・保護者のマナーは、「マナーが気になる」保護者が増加した。</p> <p>・保護者が食育だよりが必要と思う項目は、B群(食育だより熟読群)において「簡単メニュー」は有意に減少した。</p>	統計解析: χ^2 検定、Wilcoxon検定 調整変数: なし	幼児、食育だより、保護者教育	食事への関心・行動 食事・間食・飲料	食事を食べる力(食べるものが偏る(嫌いでも努力して食べる)) 子の食事への関心・理解(食育への関心) 2)親に子の食生活への関心をもってもらう(食育) 3)子の食事への関心・行動変容を促し、親・子の食事づくり力、食べる力を向上してもらう(食育)	子どもの心配ごと 保護者 支援者の活動
<p>・「お茶碗を正しく持つ」子どもが有意に増加した。</p>	統計解析: McNemar検定 調整変数: なし	幼稚園児、継続食育教室、アンケート調査	食事への関心・行動	食事を食べる力(食事マナー) 3)子の食事への関心・行動変容を促し、親・子の食事づくり・食べる力を向上してもらう	子どもの心配ごと 支援者の活動
<p>・1歳6か月児において、好き嫌いがいない子の方が祖父母と同居していた。</p>	統計解析: McNemar検定、 χ^2 検定、対応のあるt検定 調整変数: なし	幼児、嫌いな食べ物、縦断研究、内容分析	生活 食事を食べる力	食事を食べる力(食べるものが偏る(好き嫌い)) 自身の生活の理解(祖父母の存在)	子どもの心配ごと 保護者
<p>・園児が好きな料理を好む母親の割合は、3世代以上世帯に比べて2世代世帯で有意に高かった。</p> <p>・園児が嫌いな野菜を家庭でよく食べる世帯は、2世代世帯に比べて3世代以上世帯で有意に多かった。</p>	統計解析: χ^2 検定 調整変数: なし	家族特性、食行動、食物の嗜好、保育所、幼児、食育、自己報告式質問調査、保護者	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料	食事を食べる力(食べるものが偏る(好き嫌い)) 自身の生活の理解(祖父母の存在)	子どもの心配ごと 保護者
<p>〈生活要因相互の関連性〉</p> <p>・男児では、①夕食時刻が遅いと就寝時刻が遅い、②就寝時刻が遅いと睡眠時間は短く、起床時刻や朝食開始時刻が遅い、③起床時刻が遅いと朝食開始時刻や通園時刻が遅い、④朝食開始時刻が遅いと通園時刻が遅いという結果になった。</p> <p>・女児では、①夕食開始時刻が遅いと、就寝時刻が遅い、②就寝時刻が遅いと、睡眠時間が短く、起床時刻や朝食開始時刻が遅い、③起床時刻が遅いと、朝食開始時刻や通園時刻が遅い、④朝食開始時刻が遅いと、通園時刻が遅いという結果になった。</p>	統計解析: χ^2 検定 調整変数: なし	人間活動、遊戯と玩具、食行動、睡眠、テレビジョン、乳児、排便、疲労、保育所、ビデオ記録、幼児、生活時間	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料	生活習慣(就寝・起床時間が遅い、食事のタイムラグが遅い)	子どもの心配ごと
<p>・幼児の魚介類に対する嗜好と母親および父親の魚介類に対する嗜好、魚介類が夕食に上がる頻度との間には、有意な正の相関がみられた。</p> <p>・幼児の肉類に対する嗜好と母親の肉類に対する嗜好の間には有意な正の相関がみられた。</p>	統計解析: χ^2 検定、スピアマン順位相関係数 調整変数: なし	嗜好、幼児、海産食品、肉、乳・乳製品、アンケート	生活 食事への関心・行動	食事を食べる力(食べるものが偏る) 自身の生活の理解(親の偏食)	子どもの心配ごと 保護者

論文情報						調査対象	方法	調査項目					
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年	巻号	ページ	調査地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	研究デザイン/ 介入期間	調査方法/ 介入内容	テーマに関連する 調査項目	アウトカム指標 (利点、重要性に関する調査 項目)	
801	五味 葉子, 前橋 明	朝食時のテレビ視聴が幼児の生活習慣とそのリズムに及ぼす影響	レジャー・レクリエーション研究	2019	87	17-27	山形県 新潟県 静岡県 岐阜県 広島県 沖縄県	136園の3~6歳の保育園幼児5,891人(男児3,073人、女児2,818人)	横断研究	質問紙調査	就寝時刻、起床時刻、朝食をいつも一緒に食べる人の有無、排便時刻、排便状況、テレビ視聴時間、朝食時のテレビ視聴、習い事等	幼児の生活習慣とそのリズム	
802	佐野 祥平, 松尾 瑞穂, 前橋 明	保育園幼児の生活要因(時間)相互の関連性とその課題	保育と保健	2013	19	1	53-55	不明	3~6歳の幼稚園児36,047名(男児18,010名、女児18,037名)	横断研究	質問紙調査	夕食開始時刻	就寝時刻、睡眠時間、起床時刻、朝食開始時刻、通園開始時刻
803	泉 秀生, 前橋 明, 町田 和彦	幼児期の生活実態に関する研究 母親の就労のある日とない日の保育園5・6歳児の生活実態	小児保健研究	2012	71	3	371-377	埼玉県	公立保育園に通う5・6歳児とその母親121名	横断研究	質問紙調査	母親の就労状況に関する項目(就労の有無、就労開始時刻、就労終了時刻)	母親と子どもの生活習慣(起床時刻、朝食開始時刻、家を出る時刻、帰宅時刻、夕食開始時刻、帰宅後から就寝までのテレビ視聴時間、入浴開始時刻、就寝時刻)
804	中村 加奈重, 肥田 有紀子, 沢口 茂代, 関口 久恵, 山下 益美, 北川 ゆかり, 神山 潤	子どもの生活リズム改善の取り組み 生活リズム調査がもたらす養育者の行動変容に関する考察	小児保健研究	2009	68	2	293-297	東京都	1~3歳児の親子計188組	横断研究	質問紙調査	生活リズム(1週間の平均の起床時刻、朝食時刻、昼食時刻、昼寝時間、外遊びの時間、メディアとの接触時間、夕食時刻、睡眠時間)、子どもの身体活動量	生活リズム(就寝時刻)
805	古谷 真樹, 山尾 碧, 田中 秀樹	幼児の夜ふかしと主養育者に対する睡眠教育の重要性	小児保健研究	2008	67	3	504-512	不明	5歳3か月から6歳3か月の男児14名、女児15名とその保護者	横断研究	質問紙調査	睡眠習慣、日本語版VSR、精神健康調査(GHQ)、生活習慣、生活習慣改善目標	生活習慣
806	堀 妙子, 奈良間 美保	職業をもつ母親の養育行動と幼児の生活習慣に関する実態調査 規則的な生活習慣に焦点を当てて	小児保健研究	2002	61	2	334-340	東海地区	H市内の保育園に通園する1歳から6歳までの幼児の職業をもっている母親(男児51名、女児37名)	横断研究	質問紙調査	母親の規則的養育(排泄、食事、睡眠、清潔)、家族背景(年齢、家族構成、職業)	幼児の生活習慣
1001	倉内 静香, 西村 美八, 古川 照美	幼児の親における健康管理認識と子どもへの生活習慣配慮との関連	保健科学研究	2012	2	45-54	不明	A県B町で実施された1歳6か月児健康診査、2歳児歯科健康診査、3歳児健康診査、4歳児健康相談の対象児の親で協力が得られた延べ507名	横断研究	質問紙調査	自身・家族の健康管理実施の有無	親の生活習慣 子供への食習慣配慮得点	
1002	會退 友美, 赤松 利恵	社会的認知理論を活用した幼児の偏食に関するプログラムの実践—保護者の関わり方について—	栄養学雑誌	2012	70	6	337-345	東京都	都内幼稚園1園に通う園児と保護者および児童館1館の幼児クラブの幼児と保護者(幼稚園62名、児童館29名)	前後比較 試験/3か月間	質問紙調査/ 社会的認知理論を活用した幼児の偏食に関する保護者の関わり方についての親子対象プログラム(パネルシアター会と食育だよりの配布)	<事前と事後の調査報告> ①子どもが食べないことに対する不安 ②子どもが苦手な食べ物を食卓に出す頻度 ③保護者が食卓でとる行動 ④子どもが食べない頻度	保護者の認知、行動の変化、子どもが食べない頻度の変化、食育だよりに対するプロセス評価
1701	Ishikawa M, Eto K, Haraikawa M, Sasaki K, Yamagata Z, Yokoyama T, Kato N, Morinaga Y, Yamazaki Y	Multi-professional meetings on health checks and communication in providing nutritional guidance for infants and toddlers in Japan: a cross-sectional, national survey-based study (健康診断と乳児と幼児のための栄養ガイドに関する専門家会議)	BMC pediatrics	2018	18	325	全国988市区町村	母子保健事業の栄養担当者	横断研究	質問紙調査	事前・事後カンファレンスの実施、歯科健診データの活用、小学校入学前のフォローアップ評価	母子栄養指導における地域連携	

根拠となりうる研究結果		調査項目の分類			
	統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目 「発育・発達・健康」「食事・間食・飲料」「食事への関心・行動」「生活」	小項目	縦軸 「子どもの心配ごと」「保護者」「支援者の活動」
<ul style="list-style-type: none"> ・II群幼児(朝食時にテレビをいつも見ない群)において、テレビ・ビデオ視聴時間とあそび時間に有意な正の相関を確認した。 ・I群幼児(朝食時にいつもテレビを見ている群)はII群幼児よりも、平均就寝時刻が有意に遅く、平均睡眠時間が有意に短かった。 	統計解析:対応のないt検定、Personの相関係数 調整変数:なし	記載なし	生活	生活習慣(就寝・起床時間が遅い、遊び(遊び時間)、電子メディアの視聴時間が長い(テレビを見ながら食事をする習慣))	子どもの心配ごと
<ul style="list-style-type: none"> ・夕食開始時刻が遅くなると就寝時刻は遅れるという有意な関係性が認められた。 ・就寝時刻が遅いと睡眠時間は短く、起床時刻は遅く、朝食開始時刻も遅れるという有意な関連性が認められた。 ・起床時刻が遅いと、朝食開始時刻が遅くなり、朝の在宅時間は短く、通園開始時刻は遅れるという関係が確認された。 ・通園時刻が遅くなると、朝食開始時刻が遅くなり、その結果、朝の在宅時間は長くなっていった。 	統計解析:相関係数 調整変数:なし	質問紙法、育児、人間活動、食行動、睡眠、ライフスタイル、保育所、幼児、実態調査、生活時間	生活	生活習慣(就寝・起床時間が遅い、食事のタイムラグが遅い)	子どもの心配ごと
<ul style="list-style-type: none"> ・幼児と母親に共通して、母親の就労の「ある日」の方が、「ない日」に比べて、夕食開始時刻が遅くなり、朝食開始時刻は有意に早く、睡眠時間や帰宅後のテレビ・ビデオ視聴時間が有意に短かった。 ・母親の就労の「ある日」において、子どもの朝食開始時刻は、子どもの起床時刻、母親の起床時刻、朝食開始時刻と正の相関がみられた。また、母親の朝食開始時刻は、母親の家をでる時刻と正の相関がみられた。 ・母親の就労の「ある日」において、子どもの夕食開始時刻は、母親の夕食開始時刻と正の相関がみられ、母親の夕食開始時刻と母親の帰宅時刻との間に正の相関がみられた。 ・母親の就労の「ない日」において、子どもの朝食開始時刻は、子どもの起床時刻、睡眠時間、母親の起床時刻、朝食開始時刻と正の相関がみられた。 ・母親の就労の「ない日」において、子どもの夕食開始時刻は、保護者の夕食開始時刻と正の相関がみられた。 	統計解析:対応のないt検定、 χ^2 検定 調整変数:なし	保育園、生活実態、母親、就労日	生活	生活習慣(就寝・起床時間が遅い、電子メディアの視聴時間が長い、食事のタイミングが遅い)自身の生活の理解(起床就寝時刻、就労状況)	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> ・早寝群(21時以前)が遅寝群(22時以降)よりも有意に起床時刻、朝食時刻、夕食時刻が早く、総睡眠時間が長かった。 	統計解析:対応のないt検定 調整変数:なし	生活習慣、早起き早寝、行動変容、情報共有	生活	生活習慣(就寝・起床時間が遅い、食事のタイムラグが遅い)	子どもの心配ごと
<ul style="list-style-type: none"> ・朝食開始時刻、夕食開始時刻において、平日・休日ともに就寝時刻が遅い幼児の家庭の方が早い幼児の家庭よりも有意に遅かった。 	統計解析:t検定、 χ^2 検定 調整変数:なし	質問紙法、育児、行動症状、小児の行動、ライフスタイル、不安、幼児、抑うつ、家族教育、睡眠覚醒リズム、GHQ(精神健康調査)	生活	生活習慣(就寝・起床時間が遅い、食事のタイムラグが遅い)	子どもの心配ごと
<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の生活習慣に関して、「食事やおやつ前に手を洗う」は、1~3歳で増加し、4・5歳で減少、6歳で全員達成するといった、年齢と間に有意な関連性が認められた。 ・母親の規則的養育の項目間の関係性では、「毎日決まった時間に食事を食べさせている」について「全くその通り」または「その通り」と回答していた母親は、「毎日決まった時間に寝床に連れていく」について「全くその通り」または「その通り」と回答する割合が有意に高かった。 	統計解析: χ^2 検定 調整変数:なし	質問紙法、育児、行動、職業、ライフスタイル、母、幼児、就労女性、実態調査	生活	生活習慣(就寝・起床時間が遅い、食事時刻を決めていない)	子どもの心配ごと
<ul style="list-style-type: none"> ・自身と家族の健康管理ができていと認識している親は、朝食摂取者の割合が高かった。 ・自身と家族の健康管理ができていと認識している親は、子どもへの食習慣配慮(食事時間や間食・夜食の摂取栄養バランスへの配慮)をしている割合が多かった。 ・自身と家族の健康管理ができていないと認識している親は、子どもの好き嫌いをなくすための工夫をしている割合が少なかった。 	統計解析:共分散分析とBonferroni法による多重比較、Fisherの直接法 調整変数:子どもの年齢、親の年齢、親の性別	健康管理認識、幼児の生活習慣病予防、幼児健診	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料	自身の生活の理解(親の朝食摂取、自身の健康管理及び食生活に関する認識) 食事づくり・食べる力(偏食(好き嫌い)をなくす工夫) 子の食事への関心・理解(食生活への配慮)	保護者
<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが食べない際の保護者の関わり方である“過去の成功体験を思い出させる方法”は、幼稚園で用いる者が増加した。 	統計解析:対応のないt検定、McNemar-Bowker検定 調整変数:なし	幼児、保護者、社会的認知理論、偏食、実践	食事への関心・行動 食事・間食・飲料	食事づくり・食べる力(偏食への対応) 子の食事への関心・理解(食育への関心) 3)子の食事への関心・行動変容を促し、親・子の食事づくり力、食べる力を向上してもらう(食育) 2)親に子の食生活への関心をもってもらう(食育)	保護者 支援者の活動
<ul style="list-style-type: none"> 乳幼児健診における多職種による事後カンファレンスの実施、小学校入学前のフォローアップ、歯科健診結果の活用が栄養指導を提供する上での地域連携の成功と関連していた。 	統計解析:単変量ロジスティック回帰分析 調整変数:配布された母子保健ハンドブックの年間数、フォローアップ評価を受けた乳児の年間数、健康診断を受けた3歳児の年間数	乳幼児健診、栄養指導、地域連携、多職種連携	—	5)子・親の食生活支援のために組織内の多職種と連携し、地域の様々な組織・団体と連携する。	支援者の活動

表3-2. 採択した幼児期の発育・食事・食行動などに関する論文の概要(実態を示した論文)

論文番号	著者名	論文情報				調査対象	方法	調査項目					
		論文名	雑誌名	出版年	巻号			ページ	調査方法/介入内容	テーマに関連する調査項目	アウトカム指標(利点、重要性に関する調査項目)		
103※ 再掲	江田 節子	幼児の朝食の共食状況と生活習慣、健康状態との関連について	小児保健研究	2006	65	1	pp.55-61	神奈川県	横浜市M幼稚園の3～6歳の園児161人(男児71人、女児90人)	横断研究	質問紙調査 最近1週間の家庭での食事状況調査	朝食の共食状況、夕食の共食状況	健康(食物アレルギー、排便、う歯、肥満等12項目) 食物の摂取状況 朝食と夕食の食後生活時間(起床時刻、朝食の時刻、就寝時刻)
106※ 再掲	志澤 美保、森村 さや香、趙 朔、十一元三、星野 明、桂 敬樹	幼児期の食行動に関連する要因の研究:自閉症的傾向、感覚特性および育児環境に焦点をあてて	日本公衆衛生学会誌	2018	65	8	411-419	不明	A県2市に研究協力の同意が得られた保育所、幼稚園、療育機関に通う4～6歳の子供583人の養育者	横断研究	質問紙調査	自閉症的傾向 感覚情報処理評価尺度 育児環境指標(家族で食事をする機会を含む)	食行動の問題数 ※食行動の問題として、偏食、じっと座ってられない、立ち歩く、気が散る、食事中おしゃべりが多く、なかなか進まない、口にいっぱい詰め込んでしまう、よく噛まないで飲み込む、時々詰まりそうになる、いつも同じ食べ物を食べたがる、スプーン・フォークや箸がうまく使えない、いつまで口のためになかなか飲み込まない、決まった時間に食べられない、一度食べたものを口から出すなどを質問。
108※ 再掲	竹下 登紀子、小嶋 汐美、大村 雅美、白木 まさ子	幼児の食・生活習慣・健康に関する調査～母親の食育への関心の有無による検討～	日本栄養士会雑誌	2016	59	8	24-32	静岡県	静岡市公立保育所10か所で実施したアンケート調査回答者606名	横断研究	質問紙調査	母親の食育への関心の有無	園児の健康状態、生活習慣、食事の状況
110※ 再掲	佐藤 ななえ、吉池 信男	実験食における咀嚼回数を指標とする小児の咀嚼行動に関連する因子の検討	栄養学雑誌	2010	68	4	253-262	岩手県	盛岡市の対象幼稚園2園の5歳児61名	横断研究	実測および質問紙調査	身体状況、口腔診査、食事に要した時間、咬合力、咀嚼高度にかかわる生活習慣・食習慣、日常の食事の状況、周囲の大人の配慮の状況	咀嚼回数
112※ 再掲	服部 伸一、足立 正、嶋崎 博嗣、三宅 孝昭	テレビ視聴時間の長短が幼児の生活習慣に及ぼす影響	小児保健研究	2004	63	5	516-523	岡山県	岡山県内の公立保育所4園と公立幼稚園5園の3～5歳児を持つ保護者459名	横断研究	質問紙調査	テレビ視聴時間	幼児の生活習慣
115※ 再掲	武副 礼子、平井 和子、前田 昭子、辻野 もと子、山本 照子、岡田 祥子、樋口 寿、岡本 佳子、前田 雅子	幼児に対する健康管理と両親の健康意識	日本食生活学雑誌	2002	13	3	192-197	大阪府 奈良県 神奈川県	幼稚園と保育所に通う5～6歳児(男女各々大阪269名と277名、奈良130名と118名、神奈川79名と92名)とその両親(父母各々大阪425名と489名、奈良226名と233名、神奈川108名と147名)	横断研究	質問紙調査	排便頻度	食生活に関する意識、排便に関する意識

根拠とならうる研究結果		調査項目の分類			
	統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目 「発育・発達・健康」「食事・間食・飲料」「食事への関心・行動」「生活」	小項目	縦軸 「子どもの心配ごと」「保護者」「支援者の活動」
<p>・朝食の共食状況では、「母親と食べる」幼児の割合が最も高く(54.0%)、次いで、「家族全員で食べる」幼児の割合が高かった(20.5%)。</p> <p>・朝食を「子どもだけで食べる(「ひとり」を含む)」幼児は、4歳児5.7%、5歳児18.2%、6歳児28.6%で年齢が増すにつれ高い割合を示した。一方、夕食における割合はごくわずかであった。</p> <p>・起床時刻では、7～8時の起床が66.5%で高い割合を示した。</p> <p>・就寝時刻では、21～22時の就寝が49.7%を占めた。</p> <p>・健康状態のうち、虫歯がある幼児は30.4%、便秘がちな幼児は11.8%であった。</p> <p>・食事で困っていることについて、好き嫌いがある幼児の割合がもっとも高く37.9%、むら食いがある幼児は30.4%、食べるのに時間がかかる幼児は24.8%、少食である幼児は15.5%であった。</p> <p>・朝食の食欲は、普通がもっとも高く52.8%、食欲のない幼児は全体の1/3を占めた。</p> <p>・朝食の食欲は4歳児(3歳児を含む)28.2%、5歳児34.8%、6歳児37.5%と年齢が増すにつれ低下していた。</p>	統計解析: χ^2 検定、Welchの検定 調整変数なし	共食状況 食欲 生活習慣 健康状態	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	生活習慣(就寝・起床時間が遅い) 食事を食べる力(家族や保護者と一緒に食べる機会が少ない、だたら食べる) 量(食べる量が少ない、むら食いがある) 食事を食べる力(食べるものが偏る(好き嫌い)) 身体的(便秘、食事時におなかがすいていない) 口腔機能(虫歯)	子どもの心配ごと
<p>・養育者の捉える食行動の問題数は、一人平均2.43±2.26個、男女ともに約4割に偏食が認められ、次に「じっと座っていられない」は約9割に認められた。</p> <p>・食行動の問題のうち、「口にいっぱい詰め込んでしまう」、「よく噛まないで飲み込む、時々詰まりそうになる」は女児よりも男児の割合が高かった。</p>	統計解析: 重回帰分析(ステップワイズ法) 調整変数なし	食行動、自閉症的傾向、感覚特性、育児環境、養育者支援	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	食事を食べる力(あそび食べがある(じっとしてられない)、よく噛まない、つめこむ)	子どもの心配ごと
・食育へ関心を持つ母親は概ね9割	統計解析: χ^2 検定 調整変数なし	母親・食育・生活習慣	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	子の食事への関心・理解(食育への関心)	保護者
・時間調整咀嚼回数および食事に要した時間の平均値土標準偏差は、528.0±240.5回、21.9±7.5分であった。	統計解析: 重回帰分析(ステップワイズ法による変数選択を行った) 調整変数なし	咀嚼行動	食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	食事を食べる力(だたら食べる、速く食べる(食事に要する時間)、よく噛まない(咀嚼回数))	子どもの心配ごと
・平均就寝時刻は9時17分±38分、平均起床時刻は午前7時7分±25分、平均睡眠時間は9時間47分±45分 ・テレビ視聴時間が「1時間未満」の幼児は12.4%、「1時間以上2時間未満」43.8%、「2時間以上3時間未満」35.3%、「3時間以上」18.5%	統計解析: χ^2 検定、一元配置の分散分析、多重比較(LSD法) 調整変数なし	幼児、テレビ視聴時間、生活習慣	生活 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	生活習慣(就寝・起床時間が遅い、電子メディアの視聴時間が長い)	子どもの心配ごと
<p>・「健康に適した食生活をしていない理由」は、幼児では「偏食」が、父親は「不規則」が、母親は「過食」が多く、健康管理上の食生活問題点として、幼児、父親、母親で異なることが認められた。</p> <p>・幼児に対する「健康に適した食生活」への意識が大阪が高かった。(3地域間$p < 0.05$)</p> <p>・幼児に対する「望ましい1日の摂取量」を「知らない」は神奈川と奈良各々14%に対して大阪8%で少なかった。(幼児3地域間$p < 0.05$)</p> <p>・幼児の偏食状況を比べると「偏食有り」は大阪58%で最も少なく、神奈川60%、奈良63%の順に増加がみられた。(3地域間$p < 0.05$)</p> <p>・幼児において排便を毎日する割合は、大阪71%に対して神奈川63%、奈良61%と少なく、排便頻度に地域差がみられた。(3地域間$p < 0.05$)</p>	統計解析: χ^2 検定 調整変数なし	記載なし	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	食事を食べる力(食べるものが偏る) 身体的(排便習慣) 子の食事への関心・理解(子の食分量・味付け、食べ方の理解がない)	子どもの心配ごと 保護者

論文情報							調査対象	方法	調査項目				
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年	巻号	ページ	調査地域	研究対象者(年齢層・調査対象数)	研究デザイン/介入期間	調査方法/介入内容	テーマに関連する調査項目	アウトカム指標(利点、重要性に関する調査項目)	
129※ 再掲	小林 美智子, 松永 恵子, 島田 友子	育児のQOLについての一考察 三歳児の身体意識と母親のQOL	Quality of Life Journal	2002	13	1	60-71	長崎県	3歳児健診受診者597名(男児324名、女児263名)とその保護者	横断研究	健診時の面接による身体意識調査、QOL質問票	身体部位・動作語認知能力、運動、身体のイメージ形成	QOL
141※ 再掲	Toshihiko Takada, Shingo Fukuma, Sayaka Shimizu, Michio Hayashi, Jun Miyashita, Teruhisa Azuma, Shunichi Fukuhara	Association between daily salt intake of 3-year-old children and that of their mothers: A cross-sectional study.	Journal of clinical hypertension	2018	20	4	730-735	福島県白河市	3歳児641人とその母親	横断研究	3歳児健診	子ども年齢、性別、カウプ指数、兄弟(年上/年下)、祖母との同居、主な養育者、食事を提供する者、保育施設への出席母親年齢、BMI、喫煙、アルコール、仕事、高血圧、糖尿病、脂質異常症、塩分摂取量	3歳児の食塩摂取量
145※ 再掲	会友 友美, 赤松 利恵	幼児の発達過程を通じた食欲と間食の内容・与え方、体格の検討	日本公衆衛生雑誌	2010	57	2	95-103	静岡県伊東市	平成12年度から15年度に出生した子ども1313人	縦断研究	1歳6か月児健診と3歳児健診の間診票	間食の与え方 間食の内容 肥満度	食欲
201※ 再掲	佐藤 公子, 小田 悠, 下野 勉	10か月児のう蝕の関連要因が1歳6か月児う蝕におよぼす影響について	小児保健研究	2008	6	1	89-95		A市Bセンターで10か月児および1歳6か月児歯科健康診査をともに受診した乳幼児415名(男児230名、女児185名)	縦断研究 /8か月	健康診査票および歯科健康診査結果	間食の回数 砂糖を含む甘味飲料水 生後10か月時点の離乳食の種類	う蝕の有無 1歳6か月児の咀嚼状況
202※ 再掲	曾我部 夏子, 丸山 里枝子, 中村 房子, 土屋 律子, 井上 美津子, 五関 正江	都市部在住の乳幼児の口腔発達状況と食生活に関する研究 1歳2か月児歯科健診結果から	日本公衆衛生学会誌	2010	57	8	641-648	東京都	1歳2か月児歯科健診を受診した幼児の保護者420名	横断研究	質問紙調査	乳歯萌出状況、離乳食の開始、離乳食の進行の目安	現在の食事の調理形態
206※ 再掲	曾我部 夏子, 田辺 里枝子, 被川 麻有, 中村 房子, 井上 美津子, 五関 正江	1歳2か月児における母乳・ミルク・牛乳の摂取状況と食生活との関連の検討	日本食育学会誌	2014	8	4	273-281	東京都	1歳2か月児歯科健診を受診した1歳1~3か月の幼児502名(男児250名、女児252名)	横断研究	質問紙調査	母乳、ミルク、牛乳の摂取状況(摂取の有無、摂取回数、摂取時刻)、現在の食事の調理形態、子どもの食事の様子で気になっていること、食事作りで困っていることなどの食生活状況、乳歯萌出状況	食生活状況、乳歯萌出状況
208※ 再掲	木林 美由紀, 大橋 健治, 森下 真行, 奥田 豊子	幼児の咀嚼と食行動および生活行動との関連性	口腔衛生学会雑誌	2004	54	5	550-557	近畿圏	保育所と幼稚園の幼児141名(男児72名、女児69名)とその保護者141名、および幼稚園と保育所の担任教諭と担任保育士4名	横断研究	質問紙調査	対象児の体格、対象児の生活行動および健康状態、食行動、幼児期の育児の様子、保護者自身の食行動、育児に対する考え方、家族の健康への関心の程度	咀嚼能力(咀嚼回数、嚥下率、咬合力)
210※ 再掲	原 正美, 高橋 系一, 上田 寛子, 古川 漸	幼児のむし歯と食事の好き嫌いとの関連性	保育と保健	2013	19	2	63-67	東京都	D幼稚園4・5歳児113名とその保護者	横断研究	質問紙調査	幼児の好き嫌い、歯を磨く回数、歯磨きに関して家庭で注意していること、各食品の摂取頻度	幼児のむし歯の本数

根拠とならうる研究結果	調査項目の分類				
	統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目 「発育・発達・健康」「食事・間食・飲料」「食事への関心・行動」「生活」	小項目	縦軸 「子どもの心配ごと」「保護者」「支援者の活動」
・母親のOOL得点は「子どもに対する気持ち」が最も高く「子どもの食事づくり」「子どもの遊び」「絵本の読み聞かせ」などが続いた。	統計解析: t検定, Spearmanの順位相関係数, プロマックス法による因子分析 調整変数: なし	育児、身体、生活の質、母、幼児、意識調査、イメージ(知覚)	生活 食事への関心・行動 発育・発達・健康	食事づくり・食べる力(食事づくりの得意・不得意)	保護者
・1日の平均の食塩摂取量は子どもで4.5g、母親で10.1gだった。 ・子どもの約半数と母親の90%の食塩摂取量は推奨される量を超えていた。	統計解析: ロバスト回帰分析、忌度分析、多変量ロジスティック分析 調整変数: 子どもの特性、母親の特性	記載なし	生活習慣 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	質(栄養素等摂取量)	子どもの心配ごと
1歳6か月から3歳児になると ・間食の時間を決めていない、親が適当に与える、子どもが欲しがった時に与える割合が減少し、子どもが勝手に食べる割合が増加した。 ・甘いスナックの間食を与える割合が増加し、補食の間食、健康的間食を多く与える割合が減少した。	統計解析: クラスタ分析、McNemar検定、ロジスティック回帰分析 調整変数: 性別、3歳児の間食の与え方、間食の内容、肥満度、1歳6か月児の食欲	幼児、食欲、間食	生活習慣 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	身体的(食事時におなかすいていない(食欲がない)) 質(間食(甘いもの)に気を付けていない) 生活習慣(食事時間が規則正しくない(間食時刻を決めていない))	子どもの心配ごと
・う蝕がある乳幼児は、10ヶ月児では4%、1歳8ヶ月児では28%であった。	統計解析: ロジスティック回帰分析 調整変数: なし	う蝕、間食、摂食行動	食事・間食・飲料 発育・発達・健康	口腔機能(う蝕)	子どもの心配ごと
・離乳食の開始時期は、生後5、6ヶ月齢ごろが81.4%と最も多く、離乳の進め方の目安は「月齢」と回答した者が71.2%と最も多かった。 ・男女別の萌出状況を比較したところ、男女間で有意な差が認められた。 ・第一乳臼歯が4本生え揃っている者は1割程度であったが、生え揃っていないくても奥歯で噛む硬さの食べ物を与えられている者が1~2割みられ、児の口腔の発育段階に応じた食形態への配慮が十分ではないことが推察された。	統計解析: χ^2 検定 調整変数: なし	乳歯萌出、離乳食、口腔機能、食習慣、食形態	食事・間食・飲料 発育・発達・健康	質(食べ物の固さ・大きさがわからない) 口腔機能(歯の萌出状況) 子の口腔機能を確認していない	子どもの心配ごと 保護者
・食事でおかずの固さは、「歯ぐきでかみつぶせる固さ(肉だんご状)」と回答した者が最も多く、265名(52.8%)であった。	統計解析: χ^2 検定 調整変数: なし	記載なし	食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	質(食品・料理の種類・組み合わせが良くない)	子どもの心配ごと
・対象児の摂食時における食環境で、テレビを見ながら食事を「毎回・ほぼ毎回する」対象児は48.2%であった。 ・食べ方で、「食べ物すぐに飲みこまず口にためたような食べ方をするか」という問いに対して「よくある時々ある」と答えた者は45.4%とほぼ半数であった。 ・食事中に水分を飲む程度は「よく飲む+時々飲む」と答えた者は90%を超えていた。 ・対象児の偏食で「多い+やや多い」と答えた者は29.8%「やや少ない+何でも食べる」は38.3%であった。 ・保護者の日常の食生活への関心で「家族の食事を作るとき、意識して堅いものをメニューに加えているか」という問いに「はい」と回答した者はわずか11.0%で、「いいえ」と答えた者が69.9%であった。 ・日常の食事開始時間は、92.9%の家庭がほぼ決まっていた。	統計解析: t検定、 χ^2 検定、一元配置分散分析、多重比較 調整変数: なし	幼児、チューインガム、法、デンタルプレスクール	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	生活習慣(電子メディアの視聴時間が長いテレビを見ながら食事をする習慣)、食事時刻・間食時刻を決めていない) 食事を食べる力(食べるものが偏る(好き嫌い)) 子の食事への関心・理解(堅いものを食べさせる)	子どもの心配ごと 保護者
・むし歯を有する児の好きな食品と高頻度に摂取する食品に共通する食品は、ごはん、パン、ソーセージ、焼き魚、のり、砂糖、アイスクリーム、あめ、チョコレート9食品であった。 ・むし歯のない児の好きな食品と高頻度に摂取する食品に共通する食品は、ごはん、パン、牛乳、ヨーグルト、麦茶、のりの6食品であった。 ・むし歯を有する児の嫌いな食品と低頻度に摂取する食品に共通する食品は、わさび、シュガーレスガム、にら、なす、トマトジュース、マスタードの6食品であった。	統計解析: χ^2 検定 調整変数: なし	う蝕、食行動、食事、食物の嗜好、インタビュー、歯磨き、自己報告式質問調査、食物摂取頻度調査	食事への関心・行動 発育・発達・健康	食事を食べる力(食べるものが偏る(好き嫌い)) 質(食品・料理の種類・組み合わせが良くない) 口腔機能(虫歯)	子どもの心配ごと

論文情報							調査対象	方法	調査項目				
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年	巻 号	ページ	調査地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	研究デザイン/ 介入内容 期間	調査方法/介入 内容	テーマに関連する 調査項目	アウトカム指標 (利点、重要性に関する調査項目)	
216※ 再掲	有木 信子, 木村 千枝, 福田 京子, 福山 千世子, 佐野 祥平, 前橋 明	幼児の口臭の実態および保護者への啓発活動	保育と保健	2007	13	1	23-27	不明	保育園の4歳児と5歳児44名(男児22名、女児20名)	横断研究	口臭測定、口腔内診査、質問紙調査、保護者啓発および職員研修	就寝時刻、起床時刻、朝食摂取時刻、家を出て通園する時刻、朝食の摂取状況、排便状況	口臭成分濃度、歯肉炎や放置したう蝕の有無、舌苔の付着状況
218※ 再掲	北川 真理子, 長岡 友子, 中嶋 久美子, 美子, 菱 亜由美	幼児の歯とそれをとりまく環境について	保育研究	2003	41		126-132	北海道	札幌市内A幼稚園の父母174名	横断研究	質問紙調査	①1日に歯を磨く回数②歯を磨く時間帯③歯並びで気になる点④間食について⑤給食について⑥お弁当について	う蝕の有無
231※ 再掲	上野 祐可子, 佐伯 和子, 良村 貞子	1歳半児の歯の萌出と15品目の食物摂取状況との関連	日本公衆衛生雑誌	2017	64	3	143-149	不明	大都市および近郊の4市で1歳半健診を受診した18~20か月児の保護者202名	横断研究	質問紙調査	歯の萌出状況(本数、奥歯の萌出状況)	食物の硬さ(15品目の食物摂取状況)
303※ 再掲	西野 美佐子	幼稚園教師が把握する幼児の健康実態と健康教育の必要性 生活充実感と健康増進への取り組みとの関連を踏まえて	保育と保健	2010	16	2	64-73	不明	幼稚園教師262名	横断研究	質問紙調査	健康増進活動に対する取り組み状況および、取り組みを実現するために幼稚園教師がとっている園内教師間の相互サポートならびに保護者や地域との連携や行政・社会政策、制度に対する提案等の働きかけの程度	幼児の生活充実度
401※ 再掲	馬場 文, 小林 孝子, 川口 恭子, 小島 亜未, 田畑 真実, 浦田 潤, 斎藤 あり	乳幼児のKey age別に見た食生活及び食教育に関する現状と課題—A町の実態調査よ	人間看護学研究	2019	17		47-55	不明	A町乳幼児健診受診児の保護者90名	横断研究	質問紙調査、健診問診票と健診結果の転記	保護者の食教育行動や意識	保護者の食事準備の知識・技術・負担感、受診児の生活状況
402※ 再掲	白木 裕子	幼児をもつ保護者の食生活と食育への取り組みとの関連	日本小児看護学会誌	2012	21	3	1-7	不明	A幼稚園に通う園児の保護者207人	横断研究	質問紙調査	朝食摂取 共食 食事作りの知識・技術 食事作りの情報源	保護者の背景および食生活食育への取り組み

根拠とならうる研究結果		調査項目の分類			
	統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目 「発育・発達・健康」「食事・間食・飲料」「食事への関心・行動」「生活」	小項目	縦軸 「子どもの心配ごと」「保護者」「支援者の活動」
・朝食の摂取状況を発覚活動前後で比較したところ、「毎朝食べる」は86.7%から93.2%に増加し、「だいたい食べている」は11.1%から4.5%に減少した。	統計解析:相関係数 調整変数:なし	ガス cromatography, Sulfhydryl Compounds、健康教育、口腔症状、口臭、食行動、舌、硫化水素、幼児、小児保健医療サービス、保護者、Methanethiol、舌苔	食事・間食・飲料	量(食事の回数(朝食欠食))	子どもの心配ごと
・間食にどのようなものを与えているかについて、74.0%の親が「市販のもの」と回答した。その内訳は「スナック菓子」が38.3%で最も多かった。・給食に対してどのように感じているかについて、42.0%の親が「満足している」と回答した。その内訳は「豚肉がおいしい」が67.0%で最も多かった。・お弁当を作る上で工夫していることは、「子どもの好きな物を入れる」が64.4%で最も多かった。	統計解析:なし 調整変数:なし	質問紙法、う蝕、給食、食行動、歯列、歯、小児歯科医療、幼児、歯磨き、間食	食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	食事づくり・食べる力(調理の工夫) 子の食事への関心・理解(間食の種類・量を決めている、幼稚園給食への満足度)	子どもの心配ごと 保護者
・15品目の食物摂取状況調査において、「食べた」と回答した人が半数以上であった食品は8品目であった。・そのうち、80%以上であった食品は、「茹でた大根3~4cm」、「肉団子・ハンバーグ」、「耳あひら」の3品。・50%以上、80%未満であった食品は、「りんご薄切り」、「茹でたほうれん草3~4cm」、「豚肉・牛肉薄切り」、「きゅうりスティック」、「炒めキャベツ3~4cm」の5品目であった。・20%未満は、「生にんじんスティック」、「ステーキ・ソーテー1切れ」、「いかの足」の3品目であった。	統計解析:χ ² 検定、Fisherの直接確率検定 調整変数:なし	食物の硬さ、歯の萌出	発育・発達・健康 食事・間食	質(食べるものの固さ・大きさがわからない)	子どもの心配ごと
・幼稚園で取り組まれている32の健康増進活動のうち、取り組んでいると回答した割合が、取り組んでいないと回答した割合より有意に高かった項目は21活動であった。(食事に関わる活動は「早寝・早起き・朝ごはん」のよびかけ、手洗い・食後の歯磨きの励行)	統計解析:χ ² 検定 調整変数:なし	質問紙法、因子分析、学校、教育評価、教員、健康教育、健康増進、健康への態度、生活の質、ライフスタイル、人間関係、幼児、実態調査、幼稚園	食事・間食・飲料 発育・発達・健康	2)親に子の食生活への関心をもってもらう(食育)	支援者の活動
・起床時刻は、7時台が最も多かった。・就寝時刻は、21時台が最も多かった。・1日あたりのDVD・テレビ・動画等の視聴時間の平均は、10か月児で1.85時間、1歳6か月児で2.64時間、2歳6か月児で2.79時間、3歳6か月児で2.61時間であった。全体の最長時間は6時間、最短時間は1時間であった。・1日の間食回数は、2歳6か月児では2回が最も多く、それ以外の年齢では、1回が最も多かった。・健診の間診票に記載された飲料のうち、糖分含有飲料は12.2%であった。間食のうち、糖分含有の菓子は53.3%であった。	統計解析:Fisherの正確確率検定 調整変数:なし	食生活・食教育	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料	生活習慣(就寝・起床時間が遅い、電子メディアの視聴時間が長い) 量(飲料の種類と量を管理していない、間食の回数) 質(間食(甘いもの)に気がついていない)	子どもの心配ごと
・子どもの朝食摂取状況は「毎日食べる」が97.1%、「週に1~2日食べない日がある」が1.9%、「週に3~4日食べない日がある」が0.50%であった。・保護者の朝食摂取状況は「毎日食べる」が67.0%、「週に1~2日食べない日がある」が7.2%、「週に3~4日食べない日がある」が2.4%、「ほとんど食べない」が3.4%であった。・子どもの共食については、朝食では「一緒に食べる」が47.3%、夕食では「一緒に食べる」が81.6%であった。・食事作りの知識・技術については「十分にある」が5.8%、「まあまあある」が58.0%、「あまりない」が33.8%、「全くない」が1.9%であった。・食育への関心について「ある」が48.8%、「少しある」が44.40%、「あまりない」が5.3%、「全くない」が1.0%であった。・家庭において食育に取り組んでいるのは76.8%、取り組んでいないのは20.8%であった。・食育に取り組んでいると回答した者に内容をたずねたところ、「朝食を必ず食べる」が最も多く96.9%、次いで「栄養のバランス」が69.8%、「早寝早起き」が67.9%であった。	統計解析:χ ² 検定 調整変数:なし	幼児保護者食生活食育	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料	食事を食べる力(家族や保護者と一緒に食べる機会が少ない) 量(食事・間食の回数(朝食欠食)) 自身の生活の理解(親の朝食摂取) 子の食事への関心・理解(保護者による食育、食事への関心)	子どもの心配ごと 保護者

論文情報							調査対象	方法	調査項目				
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年	巻号	ページ	調査地域	研究対象者(年齢層・調査対象数)	研究デザイン/介入内容/期間	調査方法/介入内容	テーマに関連する調査項目	アウトカム指標(利点、重要性に関する調査項目)	
404※ 再掲	島本 和恵, 反町 吉秀, 岩瀬 靖彦	乳幼児の飲料摂取と母親の飲料に対する意識との関連	日本栄養士会雑誌	2016	59	9	555-566	東京都	9か月から3歳児までの乳幼児を持つ日本人の母親275名	横断研究	質問紙調査	母親の飲料に対する意識(飲料を与える理由、飲料を与えない理由)	飲料摂取の実態(飲料を与える頻度、飲料を与える場面)
405※ 再掲	堀田 千津子	母親の栄養成分表示利用行動と幼稚園児の間食との関連	日本食育学会誌	2010	4	3	165-170	三重県	幼稚園4～6歳の幼児を育児している担当者(すべて母親)410名	横断研究	質問紙調査	栄養表示の利用に関連する項目(栄養表示利用度、関心度、市販品の選択基準、栄養成分表示の情報の入手先)	間食についての項目[家庭の管理状況(内容、時間・量)、市販品の利用状況など]
407※ 再掲	Yoko Sato, Sachina Suzuki, Tsuyoshi Chiba, Keizo Umegaki	Factors Associated with Dietary Supplement Use among Preschool Children: Results from a Nationwide Survey in Japan.	Journal of Nutritional Science and Vitaminology	2016	62	1	47-53	全国	未就学児を持つ20～40歳の母親2058人	横断研究	インターネット調査	子どものサプリメント摂取	ライフスタイル 食習慣(子ども/母親) 母親の食意識 母親の健康に関する情報源
501※ 再掲	曾我部 夏子, 田辺 里枝子, 蔵川 摩有, 井上 美津子, 五関 正江[曾根]	1歳2か月児における外食頻度と食生活状況との関連	日本食育学会誌	2016	10	1	pp.25-30	東京都	K区の1歳2か月児園科健診を受診した1歳1～3ヶ月の幼児502人(男児250人、女児252人)	横断研究	質問紙調査	外食の頻度	子どものおかずの調理方法 子どもの食事で気を付けていること 食事作りで困っていること 平日の朝食、昼食、夕食の共食者
502※ 再掲	矢倉 紀子, 笠置 綱清, 南前 恵子	乳幼児期の食体験と保健指導効果に関する縦断的研究	小児保健研究	2001	60	1	75-81	鳥取県境港市	縦断群:1996年1～5月に出生した乳児を持つ母親のうち、6・8・11・15・18・24・30か月時に調査に協力した40名 コントロール群:1回のみ調査に参加した84名	縦断研究 /2年間	陰膳法による食事調査、質問紙調査/継続のみ保健指導(測定値を報告し、摂取量の多いものを注意)を実施	母親の味付け行動(味付けの継続/移行)、外食行動	塩分摂取量
506※ 再掲	松添 直隆, 川上 育代, 中嶋 名菜, 和島 孝浩, 北野 直子	園児を取り巻く食環境の現状	保育と保健	2012	18	2	92-96	熊本県	保育園に通う4・5歳児の保護者849名	横断研究	質問紙調査	保護者の食の情報源、食行動、保育園における食育活動	園児を取り巻く食環境の実態

根拠となりうる研究結果		調査項目の分類			
統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目 「発育・発達・健康」「食事・間食・飲料」「食事への関心・行動」「生活」	小項目	縦軸 「子どもの心配ごと」「保護者」「支援者の活動」	
<ul style="list-style-type: none"> ・母親が飲料を与える頻度は、「水・お茶」(99.6%)、「野菜+果実100%・果汁100%」(68.0%)、「牛乳」(64.0%)の順で高かった。 ・「水・お茶」を与える理由には、「水分補給」のほか「食べ物がのみこみやすくなる」、「スープや汁物の代わり」が多かった。 ・「野菜+果実100%・果汁100%」を与える理由には、「野菜の代わり」、「果物の代わり」が多かった。 ・「牛乳」を与える理由には、「栄養が豊富」、「子どもが好きだから」が多かった。 ・「水・お茶」、「母乳」以外の飲料を与えない理由として、「まだ早い」、「必要ない」が挙げられていた。一方、飲料を与えない理由として、「食事摂取量・食欲に影響」は挙げられていなかった。 	統計解析: χ^2 検定、Fisherの正確確率検定 調整変数: なし	乳幼児、母親の意識、飲料摂取、水分補給	食事・間食・飲料 量(飲料の種類と量を管理していない) 子の食事への関心・理解(子の食事量・食べ方の理解がない)	子どもの心配ごと 保護者	
<ul style="list-style-type: none"> ・園児に間食を与えている家庭は、「毎日与える」80.0%、「時々与えている」20.0%であり、ほぼ毎日間食が与えられていた。 ・間食の内容は、「いつも手作り品」10.7%、「市販品も手作り品もある」62.7%、「いつも市販品」136.0%であり、市販品の利用が身近なものになっていた。 ・「購入時に栄養成分表示を参考にしているか」に関して、「いつも参考にしている」17.6%、「時々参考にしている」136.6%、「あまり参考にしない」48.3%、「参考にしない」17.6%であった。 ・参考にしていない栄養成分表示は、「エネルギー」を参考にしているが55.2%と半数を占めた。次いで、「カルシウム」が32.6%という結果であった。 ・参考にしないで購入する理由は、「数字をみても判断がつかない」65.6%、「面倒」15.3%、「実際の食べる量と表示量に隔たりがある」14.4%であった。 	統計解析: χ^2 検定、Spearmanの順位相関係数 調整変数: なし	幼稚園児、栄養、間食、栄養成分表示	食事・間食・飲料 量(間食の回数) 質(間食に気をつけていない) 子の食事への関心・理解(栄養バランスへの配慮)	子どもの心配ごと 保護者	
<ul style="list-style-type: none"> ・80%の子どもがサプリメントを摂取していた。 	統計解析: カイ2乗検定、t検定、ロジスティック回帰分析 調整変数: なし	未就学児、栄養補助食品、生活様式、食習慣、母親の意識	生活習慣 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 質(サプリメントを使用している)	子どもの心配ごと	
<ul style="list-style-type: none"> ・外食の頻度は、月1~2回が最も多く51.6%であった。 ・外食時に子どもが食べているものは、「家族の注文した料理から取り分けたもの」が最も多く51.5%であった。 ・家庭でのおかずの調理方法は、「大人用から調理途中で取り分ける」が最も多かった。 ・普段、子の食事でお気をつけていることは、「料理の味付けを薄くする」が最も多かった。 ・子の食事作りで困っていることは、「食べ物の種類が偏る」が最も多かった。 ・平日の朝食、昼食、夕食の共食状況は、「家族の誰かと食べる」が最も多く、朝食では、外食あり群で59.0%、外食なし群で85.7%、昼食では、外食あり群で98.0%、外食なし群で67.2%、夕食では、外食あり群で58.0%、外食なし群で53.7%であり、いずれにおいても過半数を超えてた。 	統計解析: χ^2 検定 調整変数: なし	幼児 外食 食習慣 食育	食事への関心・行動 食事・間食・飲料 食事を食べる力(家族や保護者と一緒に食べる機会が少ない) 質(外食) 食事づくり、食べる力(家でおかずの調理法) 子の食事への関心・理解(子の味付けへの理解がない(薄味への配慮))	子どもの心配ごと 保護者	
<ul style="list-style-type: none"> ・月齢別の味付け度について、6.8,11ヶ月までは家族より薄くしているものがほぼ70%を占めていたが、逆に15ヶ月を境に一部でも家族の味付けに移行している者が80%以上を占め、24ヶ月には、約60%の者がすべて家族の味付けに移行していた。 ・外食について、週に1回以上の高頻度で外食している者は、何れの月齢も10%代であった。 ・母親が食事作りでお気をつけていることとして最も多かったのは、薄味(82%)、次いで衛生面(56%)、食品の選択(55%)、栄養バランス(39%)であった。 	統計解析: 無記入 調整変数: なし	離乳食・塩分・保健指導	食事への関心・行動 食事・間食・飲料 質(外食) 子の食事への関心・理解(子の味付けへの理解がない(薄味への配慮)) 栄養バランスへの配慮、食品選択への配慮	子どもの心配ごと 保護者	
<ul style="list-style-type: none"> ・「子育てに関する食の情報源」は、2世代世帯、3世代世帯ともに「テレビや新聞等のメディア」という回答が最も多かった。 ・「現代の子ども環境づくりに大切なこと」は「家庭から子どもへの働きかけ」という回答が多かった。 ・「1日に1回は家族そろって食事をしていますか」では、いずれの世帯においても「毎日する」が最も多かった。 ・保護者とその子どもに対する質問の「食事の挨拶をしていますか」では、いずれの世帯においても「いつもしている」が6割以上であった。 ・朝食の摂取内容は2世代世帯の保護者とその子どもでは平日・休日ともに「主食+1品」が最も多かった。3世代以上世帯の保護者では「主食+2品」、その子供では「主食+1品」が最も多かった。 ・子どもの食事状況で最も気になることはいずれの世帯とも「偏食」(2世代世帯27.4%、3世代以上世帯16.0%)であった。偏食の一番の原因は世帯状況に関わらず「野菜の好き嫌い」であった。 ・保育園における食育(取り組み)の認知度で「十分知っている」はいずれの世帯においても4分の1程度であった。また、食育の情報源として最も多かったのは「園からのお便り」であった。 ・「保育園での野菜作りが園と家庭のコミュニケーションに有益ですか」では、いずれの世帯においても9割以上が「とても有益である」「有益である」との回答であった。 	統計解析: χ^2 検定 調整変数: なし	育児、家族特性、食行動、データ収集、保育所、幼児、食育、自己報告式質問調査、保護者、実態調査	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料 食事をつくる力(食材の栽培体験がない) 食事を食べる力(食べるものが偏る、家族や保護者と一緒に食べる機会が少ない) 質(食品・料理の種類・組み合わせが良くない) 4親に保育園等での食事の様子や保育者の関わりについて理解してもらう	子どもの心配ごと 支援者の活動	

論文情報							調査対象	方法	調査項目				
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年	巻号	ページ	調査地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	研究デザイン/ 介入内容/ 期間	調査方法/ 介入内容	テーマに関連する 調査項目	アウトカム指標 (利点、重要性に関する調査項目)	
601※ 再掲	池谷 真梨子, 柳 沢 幸江	保育所における手づかみ食 べに対する取組みの現状と 保育士からみた手づかみ食 べの意義とその関連要因	日本家政 学会誌	2017	68	2	70-79	東京都	認可保育所のうち、 0歳児保育を行って いる604園の0歳児ク ラス担任602名	横断研究	質問紙調査	手づかみ食べに対する取 組みの現状	職員間の連携(保育士間、栄養 士等)と保護者への働きかけ
604※ 再掲	菅野 靖子, 村山 伸子	幼稚園の4歳児における単独 の野菜栽培体験が野菜摂取 に及ぼす影響	新潟医療 福祉学会 誌	2011	11	2	64-69	新潟県	幼稚園の4歳児32人	前後比較 試験/3か 月	質問紙調査お よび「なす」の 栽培、収穫、 調理、摂食		幼稚園給食のでのなす料理の 摂取状況 家庭でのなす料理の摂取状況
705※ 再掲	會退 友美, 赤松 利恵, 杉本 尚子	幼児期前期における嫌いな 食べ物の質的変化に関する 縦断研究	栄養学雑 誌	2013	71	6	323-329	静岡県	10か月児、1歳6か 月児、3歳児健康診 査すべてに参加した 乳幼児の家庭での 育児に携わる者 13113人	縦断研究 /2年2か 月	質問紙調査	属性	好き嫌い
706※ 再掲	松添 直隆, 川上 育代, 中嶋 名菜, 和島 孝浩, 北野 直子	園児と保護者の食嗜好の現 状	保育と保健	2013	19	1	35-40	熊本県	保育園40園に通う 4・5歳児の保護者 849名	横断研究	質問紙調査	園児と保護者の食意識並 びに食行動	園児と保護者の食嗜好の現状 びに食行動
707※ 再掲	松尾 瑞穂, 泉 秀生, 前橋 明	保育園幼児の生活実態(2010 年調査報告)とその課題	保育と保健	2012	18	2	61-67	東京都、大阪 府、宮城県、 埼玉県、神奈 川県、石川 県、三重県、 滋賀県、和歌 山県、兵庫 県、岡山県、 高知県、福岡 県、長崎県、 沖縄県	1~6歳の保育園幼 児20,518名の保護 者	横断研究	質問紙調査	就寝時刻、睡眠時間、起 床時刻、朝食摂食状況、 朝の排便状況、主なあそ び場、テレビ・ビデオ視聴 時間、夕食開始時刻	幼児の生活実態
708※ 再掲	峯木 真知子, 戸 塚 清子	魚介類及びその料理に対す る全国保育園児の嗜好(2006 年) 肉類・乳類に対する嗜好 との比較	日本家政 学会誌	2011	62	6	387-394	北海道、秋田 県、宮城県、 栃木県、東京 都、神奈川 県、山梨県、 長野県、富山 県、和歌山 県、鳥取県、 高知県、福岡 県、鹿児島 県、沖縄県	保育所に通所する3 歳以上の保育園児 1342名	横断研究	質問紙調査	母親および父親の魚介 類、肉類および乳類に対 する嗜好、魚介類料理、 肉類料理および乳類の料 理が食卓に上がる頻度、保 護者は魚介類調理が得意 かどうか、幼児の食事で 気をつけていること、乳・ 乳製品を使った料理をつ くるか	子どもの魚介類、肉類および乳 類に対する嗜好、幼児の魚が嫌 いな理由、魚介類の調理法に 対する幼児の嗜好、幼児が好んで 食べる乳、乳製品の料理法

根拠とならうる研究結果		調査項目の分類			
	統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目 「発育・発達・健康」「食事・間食・飲料」「食事への関心・行動」「生活」	小項目	縦軸 「子どもの心配ごと」「保護者」「支援者の活動」
<ul style="list-style-type: none"> 手づかみ食への開始月齢は10ヶ月が最も多かった。 保育所において手づかみ食を積極的にやっている園は94.5%であった。 手づかみ食に積極的な保育士は、現場での経験からその重要性を感じていた者が多く、積極的に取り組む理由として、園児の食べる意欲を育てるためであった。 多くの保育士が手づかみ食を多くする園児は、その後、食に意欲的であると感じていた。 	統計解析: Fisherの直接確率検定、Mann-WhitneyのU検定 調整変数: なし	手づかみ食、保育所、保育士	生活 食事をつくり・食べる 食事・間食	食事をつくる力(食べ物への関心がない) ③親・子の食べる力を向上してもらう	子どもの心配ごと 支援者の活動
<ul style="list-style-type: none"> 子どもが嫌いな野菜は、調理上の工夫をして食べさせようとする保護者が68.0%であった。 自宅でも子どもと一緒に野菜栽培をしているとした保護者は60.0%であった。 	統計解析: 対応のある検定、Wilcoxonの符号付順位検定、McNemar検定 調整変数: なし	野菜栽培、野菜摂取、幼稚園給食、前後比較デザイン	食事への関心・行動 食事・間食・飲料	食事つくり・食べる力(子どもの一緒につくることがない、偏食をなくす工夫)	保護者
<ul style="list-style-type: none"> 1歳6か月児と3歳児の好き嫌いの有無において、その人数分布は有意に変化し、あり→あり456人(38.7%)、あり→なし150人(12.7%)、なし→あり233人(19.8%)、なし→なし339人(28.8%)であった。 「あり→あり」のうち、「嫌いな食べ物継続」は91人(7.7%)、嫌いな食べ物が継続しなかった「嫌いな食べ物変化」は154人(13.0%)、「判断不能の者」は211人(17.9%)であった。 嫌いな食べ物が継続した者の食べ物内容では、野菜が最も多く(61.2%)、嫌いな食べ物が増えた者の食べ物内容でも野菜が最も多かった(65.4%)。 	統計解析: McNemar検定、 χ^2 検定、対応のあるt検定 調整変数: なし	幼児、嫌いな食べ物、縦断研究、内容分析	生活 食事を食べる力	食事を食べる力(食べるものが偏る(好き嫌い))	子どもの心配ごと
<ul style="list-style-type: none"> 保護者が考える食育はいずれの世代においても「命の尊さを学び、生きる力を養うこと」(2世代世帯44.6%、3世代以上世帯47.9%)や「食べ物の働きを知り、健康につながること」(2世代世帯46.8%、3世代以上世帯43.1%)が多かった。 園児と保護者の好きな料理(和食、洋食、中華)は、いずれも洋食(2世代世帯56.7%、3世代以上世帯57.8%)であり、また両親の好きな料理を「両親とともに好む」割合が最も多かった(2世代世帯32.9%、3世代以上世帯35.3%)。 嫌いな野菜の数は1つ～5つ(2世代世帯70.1%、3世代以上世帯75.3%)で、野菜嫌いが現れた年齢は3～4歳(2世代世帯67.1%、3世代以上世帯73.3%)で最も多かった。 園児の嫌いな野菜は世帯状況に関わらず「本人のみが嫌う」が約79%と高かった。 	統計解析: χ^2 検定 調整変数: なし	家族特性、食行動、食物の嗜好、保育所、幼児、食育、自己報告式質問調査、保護者	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料	食事を食べる力(食べるものが偏る(好き嫌い)) 自身の生活の理解(親の偏食) 子の食事への関心・理解(食育への関心)	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> 朝食を「毎日食べている」子どもは821～89.6%いた。 夕食開始時刻は午後6時41分～午後6時55分の範囲であった。 食事中のわが子の様子を見て気になることとして挙げたのは、4歳児までは「遊びながら食べるので時間がかかる」あるいは「あまり噛まないで食べる」であったが、5・6歳児では「テレビを見ながら食べる」が増加し、男女児ともに最多となった。 	統計解析: χ^2 検定 調整変数: なし	人間活動、遊戯と玩具、食行動、睡眠、テレビジョン、乳児、排泄、疲労、保育所、ビデオ記録、幼児、生活時間	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料	生活習慣(電子メディアの視聴時間が長いテレビを見ながら食事をする習慣)、食事タイミング 食事を食べる力(あそび食べがある、だから食べる、よく噛まない) 量(食事の回数(朝食欠食))	子どもの心配ごと
<ul style="list-style-type: none"> 幼児の魚介類に対する嗜好では、好むと答えた割合は73.1%、普通23.3%、きらい23.1%であった。 幼児の肉類に対する嗜好では、好むと答えた割合は73.6%、普通22.7%、きらいが2.8%であった。 幼児の乳類に対する嗜好では、好むと答えた幼児が77.0%、普通19.9%、きらいが2.0%であった。 幼児の好む魚介類の調理法は焼く、生、煮るの順に多かった。 保護者の魚介類調理に対する工夫では、好きな調理法で出す、味付けを工夫、においを消したりつけたりして調理法を工夫の順に多かった。 幼児の魚介類が嫌いな理由では、骨があって食べにくい、味やにおいが嫌い、口触りや舌触りが嫌いな順に多かった。 幼児が好む魚種は、えび(73.9%)、さけ・ます(73.7%)、まぐろ(68.1%)、しらす(64.5%)、あさり(63.6%)の順に多かった。 	統計解析: χ^2 検定、スピアマン順位相関係数 調整変数: なし	嗜好、幼児、海産食品、肉、乳・乳製品、アンケート	生活 食事への関心・行動	食事を食べる力(食べるものが偏る) 食事をつくり・食べる力(調理の工夫)	子どもの心配ごと 保護者

論文情報							調査対象	方法	調査項目				
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年	巻号	ページ	調査地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	研究デザイン/ 介入内容 期間	調査方法/ 介入内容	テーマに関連する 調査項目	アウトカム指標 (利点、重要性に関する調査項目)	
801※ 再掲	五味 葉子, 前橋 明	朝食時のテレビ視聴が幼児の生活習慣とそのリズムに及ぼす影響	レジャー・レクリエーション研究	2019	87	17-27	山形県 新潟県 静岡県 岐阜県 広島県 沖縄県	136園の3～6歳の保育園幼児5,891人(男児3,073人、女児2,818人)	横断研究	質問紙調査	就寝時刻、起床時刻、朝食をいつも一緒に食べる人の有無、排便時刻、排便状況、テレビ視聴時間、朝食時のテレビ視聴、習い事等	幼児の生活習慣とそのリズム	
1002※ 再掲	會道 友美, 赤松 利恵	社会的認知理論を活用した幼児の偏食に関するプログラムの実践—保護者の関わり方について—	栄養学雑誌	2012	70	6	337-345	東京都	都内幼稚園1園に通う園児と保護者および児童館1館の幼児クラブの幼児と保護者(幼稚園62名、児童館29名)	前後比較 試験/3か月間	質問紙調査/ 社会的認知理論を活用した 幼児の偏食に関する保護者の関わり方についての親子対象プログラム(パネルシタター会と食育だよりの配布)	<事前と事後の調査報告> ①子どもが食べないことに対する不安 ②子どもが苦手な食べ物を食卓に出す頻度を食卓でとる行動 ③保護者が食卓でとる行動 ④子どもが食べない頻度	保護者の認知、行動の変化、子どもが食べない頻度の変化、食育だよりに対するプロセス評価
8801	亀崎 明子, 田中 満由実, 野崎 亜希	乳幼児期の子どもをもつ母親への栄養指導と離乳食の実態	山口県母性衛生学会誌	2011	27	12-17	不明	A市内の研究同意が得られた保育園に子供が通う母親208名(子どもの平均月齢24.3±6.9歳)	横断研究	質問紙調査	分娩施設入院中に乳幼児の栄養に関する指導を受けたか、受けた場合その内容	子どもの食事に関する項目 ・偏食の有無 ・外食の頻度 ・調整済み食品やインスタント食品の利用頻度	
8802	高橋 希, 越川 麻有, 新美 志帆, 衛 久美, 石川 みどり, 加藤 則子, 横山 徹爾, 山崎 嘉久	市町村母子保健事業の栄養担当者の視点による母子の心配事の特徴 妊娠期・乳児期・幼児期に関する栄養担当者の自由記述の分析	日本公衆衛生雑誌	2016	63	9	569-577	全国1,034市区町村	母子保健事業の栄養担当者	横断研究	インターネット調査	母子の心配事(全般)	
8803	衛藤 久美, 石川 みどり, 高橋 希, 越川 麻有, 新美 志帆, 佐々木 漢円, 横山 徹爾, 加藤 則子, 山崎 嘉久	全国市区町村における乳幼児期を対象とした栄養指導の実態 施設状況および指導内容の実態	厚生省の指標	2017	64	4	27-34	全国498市区町村	母子保健事業の栄養担当者	横断研究	インターネット調査	栄養指導の項目(全般)	
8804	本林 悦子, 上野 恭裕, 鏡森 定信	集団保育施設(幼稚園・保育所)における食育・栄養教育についての調査研究	栄養学雑誌	2000	58	1	29-36	近畿地区	集団保育施設71校	横断研究	質問紙調査	昼食方法・形態、栄養士の有無及び業務、幼児に対する食育・栄養教育内容、幼児の母親と集団保育側との食生活に関するコミュニケーションについて、成長期の食生活指針の幼児期について	

根拠とならうる研究結果	調査項目の分類				
	統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目 「発育・発達・健康」「食事・間食・飲料」「食事への関心・行動」「生活」	小項目	縦軸 「子どもの心配ごと」「保護者」「支援者の活動」
<p>・朝食時にいつもテレビを見ている幼児は899人(15.2%)おり、朝食時にテレビをいつも見ない幼児は1,955人(33.2%)いた。</p>	<p>統計解析:対応のない検定、Pearsonの相関係数 調整変数:なし</p>	<p>記載なし</p>	<p>生活</p>	<p>生活習慣(電子メディアの視聴時間が長い(テレビを見ながら食事をする習慣))</p>	<p>子どもの心配ごと</p>
<p>・プログラム全体のコメントでは、食育だよりの内容を知っている者が多く、最新の知見などを掲載することが求められた。その他、子どもの偏食に対する不安が軽減されたと回答している者もあった。</p>	<p>統計解析:対応のあるt検定、McNemar-Bowker検定 調整変数:なし</p>	<p>幼児、保護者、社会的認知理論、備食、実践</p>	<p>食事への関心・行動 食事・間食・飲料</p>	<p>自身の生活の理解(育児不安)</p>	<p>保護者</p>
<p>・幼児期に偏食がある子どもは42.3%であった。 ・離乳食について困ったことがあると回答したものは71.2%であり、困った内容(複数回答)は、「食べるものの種類が偏っている」と回答したものが94名と最も多く、以下「作るのが苦痛、面倒である」65名、「食べる量が少ない」39名、「食べるのを嫌がる」35名、「作り方が分からない」18名などであった。 ・分娩施設に乳幼児期の栄養に関する指導を受けた者は42.3%であった。 ・分娩施設において乳幼児期の栄養に関する指導を受けたものと受けていないものについて子どもの偏食の有無を比較したが、関連は認められなかった。</p>	<p>統計解析:χ²検定、Mann-WhitneyのU検定 調整変数:なし</p>	<p>乳幼児期、離乳、備食、授乳・離乳の支援ガイド</p>	<p>食事への関心・行動</p>	<p>食事を食べる力(食べるものが偏る) ①子の食事への関心・行動変容を促し、親・子の食事づくり力・食べる力を向上してもらう(栄養教育)</p>	<p>子どもの心配ごと 支援者の活動</p>
<p>栄養担当者の視点による母親の心配事の内容は、幼児期では子供の発育・発達により個人差が生じる「食べ方」(偏食・好き嫌い、小食、むら食、よく噛まない、遊び食べ)および家庭により対応が異なる「間食の与え方」が把握された。</p>	<p>統計解析:なし 調整変数:なし</p>	<p>市町村、母子保健、食生活支援、心配事</p>	<p>食事への関心・行動 食事・間食・飲料</p>	<p>食事を食べる力(食べるものが偏る、あそび食べがある、よく噛まない) 量(食べる量が少ない、むら食いがある) 質(食事と間食(甘いもの)に気を付けていない)</p>	<p>子どもの心配ごと 保護者</p>
<p>乳幼児健診における栄養指導内容 ・1歳6か月健診および3歳児健診における母子への集団指導において、1日3回の食事や間食のリズム、食事を楽しむことが共通して多かった。また、1歳6ヶ月児健診では、家族と一緒に食べることを楽しむこと、3歳児健診では、色々な食品に親しむことが多く挙がった。 ・1歳6か月児健診および3歳児健診における母親への集団指導では、間食のとり方に関する知識や主食・主菜・副菜のバランスが多く挙がった。 ・1歳6か月児健診および3歳児健診における子どもへの集団指導では、よく噛んで食べる事が多く挙がった。また、1歳6ヶ月児健診では、いろいろな食品に親しむこと、3歳児健診では、「副菜」緑黄色野菜を積極的に食べることが多く挙がった。 ・1歳6か月児健診および3歳児健診個別指導では、1日3回の食事や間食のリズム、間食のとり方に関する知識、主食・主菜・副菜のバランスといった食事や間食のとり方に関する内容が多く挙がった。</p>	<p>統計解析:なし 調整変数:なし</p>	<p>乳幼児健診、栄養指導、離乳食、食事や間食のリズム、食事を楽しむこと</p>	<p>食事への関心・行動 食事・間食・飲料</p>	<p>①子の食べる力を向上してもらう、親・子に楽しく食事することの大切さを理解してもらう(栄養教育) ②親に子の食生活への関心をもってもらい、親に子の食事量、食べ方の特徴を理解してもらう(栄養教育)</p>	<p>支援者の活動</p>
<p>・昼食の食事形態は、幼稚園で「家庭よりお弁当を持つ」が77%で最も多かったのに対し、保育所では「専属の調理師が昼食を作っている」が92%で最も多かった。 ・回答が得られた集団保育施設のうち、栄養士がいる施設は77.1%であった。また、栄養士がいる集団保育施設で、栄養士が行っている業務として、フードサービス以外に幼児への食生活・栄養教育を行っていることは25%であった。 ・幼児に対する食育・栄養教育の内容としては、幼稚園、保育園とも「残さず食べる」、「食事マナー」、「食べ方」、「会食の楽しさ」の順に多かった。「うす味嗜好」、「おやつを食べかた」の教育は保育園の方が多かった。 ・幼児の母親と集団保育施設側の食生活に関するコミュニケーション方法では、「給食の献立予定の配布」が最も多く、集団保育施設の93%で行われていた。「給食やおやつ」の時間における個々の幼児の態度や状況報告、「アレルギーや肥満児のための食事指導」については幼稚園よりも保育園で多く行われていた。 ・母親などへの幼児の食育・栄養教育を行っていることと答えた集団保育施設は30.4%で、50.7%の集団保育施設が「現在のコミュニケーション内容は十分ではない」と答えていた。 ・幼児に対し可能と思われる、食習慣の基礎づくりのための「バランスのとれた良い食事」教育では、「主食・主菜・副菜の区別」の教育が可能であると答えたところが49.2%で最も多かった。 ・「専属の調理師が昼食をつくっている」「母親にアレルギーや肥満児のための食事指導を行っている」「母親などへ幼児のための食育・栄養教育が不十分だと思っている」「バランスのとれた良い食事の教育を行っている」と回答した集団保育施設において、食育・栄養教育の取り組み内容の回答数が有意に高かった。</p>	<p>統計解析:χ²検定、t検定 調整変数:なし</p>	<p>栄養教育</p>	<p>食事への関心・行動 食事・間食・飲料</p>	<p>②親に子の食生活への関心をもってもらい、親に子の食事量、食べ方の特徴を理解してもらう(昼食の食事形態・栄養士の存在) ③子の食事への関心・行動変容を促し、親に子の食事づくり量、食べる力を向上してもらう(食育)</p>	<p>支援者の活動</p>

論文情報							調査対象	方法	調査項目				
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年	巻号	ページ	調査地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	研究デザイン/ 介入内容 期間	調査方法/ 介入内容	テーマに関連する 調査項目	アウトカム指標 (利点、重要性に関する調査項目)	
8805	木川 眞美, 吉澤 さやか, 牧野 薫子, 水野 あゆみ, 鈴木 隆	幼稚園における持参弁当を介した親に対する食育	日本食育学会誌	2012	6	2	215-223	東京都	私立幼稚園7園 弁当の実態調査:4 歳児20名、5歳児19 名および保護者39 名 リーフレット作成と配布:4~6歳児42名	横断研究	質問紙調査	弁当の栄養バランス 弁当の色合い、品目数、 使用頻度の高い食品、低い食品 弁当作りで配慮していること、 弁当作りの参考とするものの 子どもの好きな食品・嫌いな食品を弁当に積極的に いれるか 弁当箱を選ぶ際の基準 弁当作りで困っていること	
8806	綾部 園子, 小西 史子, 大塚 恵美子	朝食からみた幼児の食生活と保護者の食事意識	栄養学雑誌	2005	63	5	273-283	群馬県高崎市	私立幼稚園、私立保育園、公立保育園の園児とその保護者441人	横断研究	質問紙調査	幼児の生活実態 朝食摂取、保護者の食事意識	
8807	古谷 佳世, 小谷 清子, 猿渡 綾子, 青井 渉, 和田 依里, 東 あかね	保育所に通う幼児とその母親を対象とした朝食摂取状況調査～男女別比較～	日本栄養士会雑誌	2017	60	1	29-38	京都府精華町	3～5歳児337人(男児187人、女児150人)	横断研究	質問紙調査	子どもの身体特性、子どもの生活習慣、朝食および夕食摂取状況、子どもの朝食品目、保護者の食習慣および子どもの食に対する心掛け	
8808	豊崎 俊幸, 大友 可奈子, 横川 千花, 渡邊 未夫, 尾崎 友莉亜, 上野 沙織, 宇都 沙織, 坂倉 梨子, 中山 純香, 森山 久子, 河野 博行, 濱田 尚志, 宮崎 貴美子	幼児と保護者に対する食生活に関する意識とその経年変化	日本食育学会誌	2009	3	4	317-323	不明	幼稚園および保育園の園児とその保護者	縦断研究	質問紙調査	食事の回数、朝食の時間、夕食の時間、おやつの内容、栄養バランス、歯磨きの頻度、園児の朝食と夕食の内容(食事の写真、献立名、食材料名)	
8809	藤元 恭子, 宮本 賢作, 藤原 章司, 山神 真一	幼稚園児の朝食の実態に関する研究	小児保健研究	2012	71	4	547-551	香川県	幼稚園に通う園児135名(5歳児54名、4歳児47名、3歳児34名)	横断研究	質問紙調査	朝食の摂取、朝食の内容、4群点数法による食事の得点	

根拠とならうる研究結果	調査項目の分類				
	統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目	小項目	縦軸
			「発育・発達・健康」「食事・間食・飲料」「食事への関心・行動」「生活」		「子どもの心配ごと」「保護者」「支援者の活動」
<ul style="list-style-type: none"> ・弁当に入っている食事バランスガイドの料理区分の状況は、3区分が49.3%、4区分が41.8%であった。 ・主食、主菜、副菜の3区分はほぼすべての弁当に使用されていたが、乳製品は22.4%、果物は41.8%とあまり使用されていなかった。 ・子どもが嫌いな食品を積極的に使用する母親は14.6%であった。(リフレット配布による効果は検証していない) 	統計解析: χ^2 検定(※今回抜粋した結果においては、統計解析なし) 調整変数: なし	弁当、保護者、食事バランスガイド	食事への関心・行動 食事・間食・飲料	質(栄養バランスが良くない) 食事づくり・食べる力(子のきらいな食品を積極的に使用する)	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園と保育園の合計では、朝食摂取頻度は「毎朝食べる」95%、「食べない」は1% ・毎朝かさかさ食べるものが「ある」と答えた割合は38%であり、その内容は「牛乳」が最も多く38%を占め、次いで「みそ汁」「卵」「ヨーグルト」「納豆」と続いた。 ・朝食の形式は「主食+汁+おかず」が最も多く47%、「主食+汁」が19%、「主食+ふりかけ」が16%、「主食のみ」が16%、ヨーグルトだけ、お菓子だけなどの「その他(主食なし)」が2%であった。 ・主食の種類は「ご飯」が79%、「パン」が39%、「コーンフレーク」が7%、「めん類」が2%であった。 ・「家族全員で食べる」と答えた割合が37%、「父親以外の家族全員で食べる」と答えた割合が34%であった。 ・「子どもだけで食べる」と答えた割合は19%、「1人で食べる」と答えた割合は5%。 ・保育園児と幼稚園児の比較 <ul style="list-style-type: none"> ・保育園児は幼稚園児に比べて21時以降に就寝する幼児が多く、7時まで起床する幼児が多かった。 ・保育園児は睡眠時間が10時間以上の割合が幼稚園児より少なかった。 ・保育園児のほうが幼稚園児よりも「主食+汁+おかず」をとっている割合が多く、「ご飯」を主食とする割合が多かった。 ・幼稚園児は保育園児より「パン」「コーンフレーク」を主食とする割合が多かった。 ・保育園児は幼稚園児より「全員で食べる」「父親以外の家族全員で食べる」とする割合が多かった。 ・「好き嫌いで困っている」割合は、保育園児より幼稚園児に多かった。 ・野菜を嫌う割合は保育園児より幼稚園児に多かった。 ・幼稚園児の保護者には「悩みありグループ」が多いのに対して「食生活優良グループ」が少なく、保育園児の保護者は幼稚園児の保護者とは逆に「食生活優良グループ」が多いのに対して「悩みありグループ」は少なかった。 	統計解析: χ^2 検定、一元配置分散分析、マクネマー検定、残差分析、数量化理論第Ⅲ類による分析 調整変数: なし	幼児の食生活 食事意識 保護者 朝食	生活 食事への関心・行動 食事・間食・飲料	生活習慣(就寝・起床時間が遅い) 食事を食べる力(食べるものが偏る、家族や保護者と一緒に食べる機会が少ない) 量(むら食いがある、食事・間食の回数(朝食欠食)) 質(食品・料理の種類・組み合わせが良くない) 子の食事への関心・理解(食育への関心)	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> ・朝食状況において、「ひとり」は男児(1.6%)より女児(6.0%)が有意に高かった。 ・子どもの朝食食品目において、「主菜」と「牛乳」は男児(50.8%)より、女児(36.7%)が有意に低かった。 	統計解析: χ^2 検定、Mann-WhitneyのU検定 調整変数: なし	保育所、幼児、日記式アンケート、朝食摂取、ひとり食べ	食事への関心・行動 食事・間食・飲料	食事を食べる力(家族や保護者と一緒に食べる機会がない) 質(食品・料理の種類・組み合わせが良くない)	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> 〈今回調査の結果〉 ・「1日に3食、食べている」幼児は100%であった。 ・朝食を「ほぼ決まった時間に食べている」幼児は約88%、「ときどき不規則になる」幼児は12%であった。 ・夕食を「ほぼ決まった時間に食べている」幼児は78%、「ときどき不規則になる」幼児は22%であった。 ・おやつの内容は、「スナック菓子・チョコレート類」が約82%であった。 ・「栄養バランスについて考えている」保護者は約81%であった。 ・「家族全員で食べている」幼稚園児は34%、保育園児は54%であった。 	統計解析: なし 調整変数: なし	記載なし	食事への関心・行動 食事・間食・飲料	食事を食べる力(家族や保護者と一緒に食べる機会が少ない) 質(食事と間食(甘いもの)に気をつけていない) 子の食事への関心・理解(栄養バランスへの配慮)	子どもの心配ごと 保護者
<ul style="list-style-type: none"> ・朝食の摂取点数の基準点に対する摂取比では、第3群(野菜、芋類、果物)が基準の40%程度の摂取と不足が目立っていた。 ・1週間の個人平均摂取状況では、たんぱく源(第1群、第2群)、第3群、第4群で不足がみられた一方、たんぱく源(第1群、第2群)では、一部過剰摂取もみられた。 ・1週間の個人平均摂取状況から求めた第1~4群の合計点をみると、15%前後の園児が大きく不足しており、過剰と思われる園児も5%程度いた。 ・朝食に味噌汁、スープといった汁物がある場合、ない朝食と比べ、第2,3,4群、合計点で有意に高得点であった。 	統計解析: 対応のない検定 調整変数: なし	幼稚園児、朝食、栄養	食事・間食・飲料	質(栄養バランスが良くない、栄養素等摂取量、食品・料理の種類・組み合わせが良くない)	子どもの心配ごと

論文情報							調査対象	方法	調査項目				
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年	巻号	ページ	調査地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	研究デザイン/ 介入内容/ 期間	調査方法/ 介入内容	テーマに関連する 調査項目	アウトカム指標 (利点、重要性に関する調査項目)	
8810	原正美, 高橋系一, 上田 眞子, 佐々木 榮一, 梶谷 ミワ, 井筒 茂子, 古川 漸	園児の好きな食べ物・嫌いな食べ物の年齢別差異	保育と保健	2011	17	1	31-34	東京都	幼稚園・保育園に通う3~5歳児の園児 231名	横断研究	園児に食品の絵を見せて、好きか嫌いかを質問した	年齢、好きな食べ物、嫌いな食べ物	
8811	藤村 真理子, 岩崎 久志, 小谷 正登, 三宅 靖子, 来栖 清美, 白石 大介	乳幼児の保護者・保育者への生活実態調査 自由記述 報告	臨床教育学研究	2009	15	39-66	不明	A市の公立幼稚園・保育所の子ども、保護者4,188名、保育者590名	横断研究	質問紙調査	保護者・子育てや教育についての困りごと、保育者・保育をしていて気になる子、問題行動について感じること、幼稚園・保育所の課題		
8812	大森 麻美, 加藤 由香梨, 高橋 麻菜美, 山本 麻未	幼児の基礎体温の低下と生活習慣	保育研究	2008	46	8-14	北海道	札幌大谷大学附属幼稚園年長組の保護者63名	横断研究	質問紙調査	子どもの年齢および性別、子どもの体格、生活活について、運動状況について、睡眠状態について、入浴について、テレビ視聴およびテレビゲームについて	基礎体温	
8813	梶 美保, 豊田 和子	幼児期からの健全な食生活推進に関する一考察 家庭と保育園へのアンケート調査より	東海学校保健研究	2008	32	1	13-23	不明	I市の14保育園の乳幼児の保護者と担当保育士(2歳児保護者217名、5歳児保護者322名、2歳児保育士53名、5歳児保育士18名)	横断研究	質問紙調査	保護者・家庭における食実態、食についての意識、食について気になること等 保育士・園における食状況と食援助の状況等	
8814	藤田 小矢香, 西村 正子	幼児の食事に関する実態調査 疾病予防から考える食事の問題点	チャイルドヘルス	2008	11	9	661-664	不明	A市内の保育所・幼稚園に通園している児をもつ母親161名(3歳児33名、4歳児68名、5歳児60名)	横断研究	質問紙調査	対象の属性、子どもの食事内容、子どもの栄養摂取量	
8815	菅原 博子, 幸地 省子	1歳6か月児と3歳児の飲み物摂取についての比較	小児保健研究	2007	66	3	427-434	宮城県	3歳児健診を受診した幼児884名と1歳6か月児健診を受診した幼児985名	縦断研究 /2年	質問紙調査	全身状況、のどが渇いたときに飲む飲み物、飲み物の摂取頻度、食事の中の飲み物摂取	

根拠となりうる研究結果		調査項目の分類			
	統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目 「発育・発達・健康」「食事・間食・飲料」「食事への関心・行動」「生活」	小項目	縦軸 「子どもの心配ごと」「保護者」「支援者の活動」
<ul style="list-style-type: none"> 好きな食品のうち、「牛乳」は3歳児の好きな食べ物の1位であったが、4歳児では2位、5歳児では3位と、好きと答えた者の割合が有意に少なかった。 「バナナ」は3・4歳児が2位であったが、5歳児では5位で、好きと答えた者の割合が有意に少なかった。 「ラーメン」は3歳児では好きな食べ物の3位であったが、4・5歳児では1位であり、好きと答えた者の割合が有意に多かった。 「魚肉ソーセージ」は3・4歳児で5位であったが、5歳児では4位で、好きと答えた者の割合が有意に高かった。 嫌いな食べ物のうち、「トマトジュース」と「なす」は、3歳児に比べて5歳児で嫌いと感じた者の割合が有意に高かった。 「ごぼう」「たまねぎ」「納豆」「トマト」「こんにやく」は、年齢が上がるほど嫌いと感じた者の割合が有意に低かった。 好きなおやつのうち、「ポテトチップ」「グミ」「ラムネ」は3歳児に比べて5歳児で好きと答えた者の割合が有意に高かった。 「ヨーグルト」は、3歳児に比べて5歳児で好きと答えた者の割合が有意に低かった。 好きな野菜のうち、「きゅうり」は3歳児に比べて5歳児で好きと答えた者の割合が有意に高かった。 好きな飲み物のうち、「コーラ」は、年齢が上がるほど好きと答えた者の割合が有意に高かった。 好きな果物に、年齢による相違はみられなかった。 	統計解析: χ^2 検定 調整変数: なし	飲料、菓子、食物の嗜好、保育所、インタビュー、野菜、幼児、年齢因子、間食、幼稚園	食事への関心・行動	食事を食べる力(食べるものが偏る(好き嫌い))	子どもの心配ごと
<p>〈保護者の記述〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもの生活習慣について課題を感じている事例のうち、多くを「食事」が占めており、「偏食がある」が最も多く、その後に「食事の遅さ」「食事態度」「食事量」が続いた。 <p>〈保育者の記述〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 気になる子、問題行動について生活習慣に触れた事例のうち、最も多かったのが「食生活に問題」であり、その代表的な記述として「保育所ではバランスのとれた食事をしているが、家庭での食生活に問題がある。」「キレイやすい子などは、家庭環境にも問題があるが、食生活も影響していると感じる(ファーストフード、ジュース、スナック等)」があった。 	統計解析: なし 調整変数: なし	質問紙法、育児、心理的ストレス、ライフスタイル、乳児、人間関係、保育所、幼児、発達・健康調査、幼稚園	食事への関心・行動	食事を食べる力(食事マナー、食べるものが偏る、だらだら食べる)量(食べる量が少ない・多い、飲料の種類と量を管理していない)	子どもの心配ごと
<ul style="list-style-type: none"> 日ごろ、冷たいもの、甘いものを沢山摂る子どもの基礎体温は35.9度、時々摂る子どもでは36.0度、あまり摂らない子どもでは36.4度であった。 朝食を毎日食べる子どもの基礎体温は36.0度、食べないことがある子どもの基礎体温は35.9度であった。 	統計解析: なし 調整変数: なし	質問紙法、食行動、身体運動、睡眠、ライフスタイル、体温、幼児、BMI、基礎体温	食事・間食・飲料	量(食事の回数(朝食欠食)) 質(食品・料理の種類・組み合わせが良くない) 身体的(体温)	子どもの心配ごと
<p>〈2歳児保護者、5歳児保護者の回答結果〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 「食事の摂り方は、2歳児で94.0%、5歳児で92.9%が「家族と一緒に」に食事を摂っていた。 テレビを見ながらの食事について、2歳児で64.5%、5歳児で71.4%が「テレビをいつも見る」で見ていることが多いと回答した。 朝食について、2歳児で92.6%、5歳児で98.4%が「食べている」「だいたい食べている」と回答した。 間食について、2歳児で59.4%、5歳児で54.3%が「ほしい時」に与えていた。 外食の頻度について、2歳児で40.8%、5歳児で40.0%が「月に2~3回」であった。 <p>〈2歳児保育士、5歳児保育士の回答結果〉</p> <ul style="list-style-type: none"> 食援助助をする上で大切にしていることは、2歳児では「楽しい食事の雰囲気作り」「自分で食べたいという気持ち」等、5歳児では「活動量に配慮し、食欲が増すようにしている」「食べ物の名前や働きを知らせ、食べ物への興味や関心が持てるようにしている」等の記述があった。 食に關して保護者との連携で考慮していることは、2歳児では「家庭と保育園の食事の様子を伝え合う」「車の移行などの進め方」等、5歳児では、「食事の様子を伝え合う」「苦手なものが食べられた時は必ず伝える」「展示食を活用して食事の様子やあり方を伝える」「朝食の大切さ」等の記述があった。 	統計解析: なし 調整変数: なし	質問紙法、食行動、生活、食事への関心・行動	生活習慣(電子メディアの視聴時間が長い(テレビを見ながら食事をする習慣)) 食事を食べる力(家族や保護者と一緒に食べる機会が少ない) 量(食事・間食の回数(朝食欠食)) 質(外食) 2)親に子の食生活への関心をもってもらう 3)子の食事への関心・行動変容を促し、親・子の食事づくり力・食べる力を向上してもらう 4)親に保育園等での食事の様子や保育者の関わりについて理解してもらう	子どもの心配ごと 支援者の活動	
<ul style="list-style-type: none"> それぞれの栄養素の充足状況について、充足率が20%以上下回っていたのはビタミンB₁₂42.1%、ビタミンB₆41.0%、カルシウム39.2%、ビタミンE27.5%、食物繊維とコレステロールはそれぞれ26.9%であった。一方、充足率20%以上上回っていたのは食塩53.2%、ナイアシン51.5%、脂質48.0%、鉄45.0%、ビタミンB₁₂42.1%であった。 	統計解析: なし 調整変数: なし	質問紙法、う蝕、栄養状態、栄養必要量、小児栄養生理学的現象、食行動、食事調査、母、幼児、生活習慣病	食事・間食・飲料	質(栄養素等摂取量)	子どもの心配ごと
<ul style="list-style-type: none"> 排便が毎日ある幼児の割合は、3歳児に比べて1歳6か月児で有意に増加した。 ものが溜いたときに飲む飲み物の割合は、1歳6か月児に比べて3歳児で、牛乳、スポーツ飲料、麦茶飲料・ココア、フルーツ乳飲料・コーヒー牛乳が有意に高く、果物ジュース、トマト・野菜ジュース、フォローアップミルクが有意に減少した。 牛乳の摂取頻度は、「毎日飲む」ものが3歳児に比べて1歳6か月児で有意に増加した。 ジュース・清涼飲料水を「毎日飲む」ものが3歳児に比べて1歳6か月児で有意に減少したが、「週に2~3回」および「週に1回」のものには有意に増加した。「ほとんど飲まない」ものは有意に減少した。 スポーツ飲料を「週に2~3回」および「週に1回」のものは有意に増加した。「ほとんど飲まない」ものは有意に減少した。 乳酸飲料を「毎日飲む」ものが3歳児に比べて1歳6か月児で有意に増加した。「ほとんど飲まない」ものは有意に減少した。 食事中に味噌汁やスープがあっても、水や牛乳を「必ず飲む」者の割合は、1歳6か月児に比べて3歳児で有意に増加した。 	統計解析: χ^2 検定 調整変数: なし	飲み物、口腔機能、食生活習慣、1歳6か月児、3歳児	食事・間食・飲料	量(飲料の種類と量を管理していない) 身体的(排便習慣)	子どもの心配ごと

論文情報							調査対象	方法	調査項目			
論文番号	著者名	論文名	雑誌名	出版年	巻号	ページ	調査地域	研究対象者 (年齢層・ 調査対象数)	研究デザイン/ 介入/介入 期間	調査方法/介 入内容	テーマに関連する 調査項目	アウトカム指標 (利点、重要性に関する調査項目)
8816	松岡 貴子, 内坂 直樹, 鈴木 牧 朝倉 功, 日比野 健一, 伊東 充宏, 池谷 健, 香川 二郎	藤枝市内A保育園児の生活習慣アンケート調査について	藤枝市立総合病院 学術誌	2006	12	1	20-23	静岡県 藤枝市内A保育園児 91名	横断研究	質問紙調査	起床時刻、就寝時刻、食事、朝食、お稽古事など	
8817	山田 千ヨ, 長尾 美智子, 高橋 美樹, 佐々木 幸子, 寺井 直子, 市村 知恵子, 菅川 邦子, 松田トミ子, 笠原 賀子	幼児の食生活の実態と課題に関する研究	保育と保健	2004	10	2	62-63	新潟県 長岡市の保育園に通園する3歳前後園児193名	横断研究	食物摂取状況調査	栄養素等摂取状況、食品群別摂取状況	
8818	作本 怜奈, 丸茂 実香, 山口 亜希子, 横山 美紀子, 吉岡 樹里	現代の『女性と幼児』の便秘について	保育研究	2003	41		146-152	北海道 女子短期大学生117名 幼稚園児100名	横断研究	質問紙調査	(女子短期大学性) ①年齢②生活環境③排便について④食生活について⑤運動量について⑥便秘時の体の変化について⑦便秘時に行う対策 (幼稚園児) ①年齢②排便について③食生活について④便秘時に行う対策	
8819	岩田 富士彦, 岡田 知雄	幼少期の生活習慣の現状と健康障害：北京市との比較と将来への提言	臨床スポーツ医学	2003	20	4	419-424	北京市、東京都 (北京市) 西城区の寄宿制幼稚園と通園制幼稚園に在籍する4~6歳までの幼児225名 (男児113名、女児112名) (東京都) 4~6歳までの幼児339名(男児193名、女児146名)	横断研究	身体測定、質問紙調査	食事状況、身体活動状況、家族状況、肥満度	
8820	長谷川 智子, 今田 純雄	食物嗜好の発達心理学的研究(第1報) 幼児と大学生における食物嗜好の比較と嗜好の変化の時期	小児保健研究	2001	60	4	472-478	東京都 私立幼稚園に在園する4歳児78名(男児36名、女児42名)、5歳児71名(男児30名、女児41名) 私立大学及び専門学校に在籍する学生181名	横断研究	食物嗜好判定カードを用いた調査	食物嗜好	
8821	田辺 香穂子	栄養指導の現場から食行動について	幼児の保健の科 咽喉と嚥学	2001	43	4	309-312	群馬県 群馬女子短期大学付属幼稚園児177名とその保護者	横断研究	観察調査、質問紙調査	幼児の着せ、咽喉状況、幼児への「着せ」の疑の有無	
8822	島本 和恵, 岩瀬 靖彦, 森岡 加代, 阿部 和子, 柴山 豊等	母親の飲料特性の理解が乳幼児の飲料摂取に与える影響	人間生活文化研究	2013	23		216-221	東京都 A保育園の0歳児クラス15人、1歳児クラス13人、2歳児クラス9人、併設子育てサロン来所者39人	横断研究	質問紙調査	子どもの年齢、出生順位、家族構成、身長、体重、排便、母親の年齢と飲料嗜好、子どもに飲料を与えるときの場面、母親の飲料特性の理解、母親の子どもへの食に関する悩み	

※関連性を示した論文(表3-1)のうち、実態を特記したものを再掲した。

根拠とならうる研究結果		調査項目の分類			
	統計解析・調整変数	キーワード	横軸大項目 「発育・発達・健康」「食事・間食・飲料」「食事への関心・行動」「生活」	小項目	縦軸 「子どもの心配ごと」「保護者」「支援者の活動」
<p>・食事回数に関する質問において、3歳児、4歳児、5歳児クラスでは朝ごはんを食べない日があるとの回答が10%前後であった。昼ごはん、夕ごはんを食べていないと答えた者はいなかった。</p> <p>・夕ごはんを誰と食べるか(複数回答)について、各クラスの89～100%が「母と」、27～50%が「父と」、26～43%が「祖父母と」であった。孤食はいなかった。</p> <p>・偏食があるとの回答は各クラスの43～67%であった。偏食の内容は野菜、肉などを食べないとの回答が多かった。</p> <p>・児の食欲については、年長になるほど、少食と思う割合が増えた。</p>	統計解析:なし 調整変数:なし	質問紙法、覚醒、時間、食行動、食物の嗜好、睡眠、ライフスタイル、幼児、保育所、幼児、年齢分布、マスメディア、藤枝市	食事への関心・行動 食事・間食・飲料 発育・発達・健康	食事を食べる力(家族や保護者と一緒に食べる機会が少ない) 量(食事の回数(朝食欠食)) 身体的(食事時におながすしていない(食欲がない))	子どもの心配ごと
<p>〈栄養素等摂取量の充足状況〉 栄養素等摂取量はPF01においては適正であったが、その充足状況は、充足率を20%以上下回っている者がエネルギー30.1%、脂質が50.0%であった。一方たんぱく質は34.2%の者が、充足率を20%以上上回り、レチノール当量93.8%、カリウム93.4%と高く、マグネシウムはすべての者が上回っていた。食塩も目標摂取量(5g/日)を超える者が43.6%を占めた。また、カルシウムは充足率を20%以上上回っている者が27.0%である反面、20%を下回っている物も20.2%であり、個人差があった。</p> <p>〈食品群別摂取量の充足状況〉 充足率を20%以上下回っている者は、油脂類76.2%、緑黄色野菜79.8%、その他の野菜82.9%、海藻類0.3%、卵類65.8%と顕著であった。一方、充足率を20%以上下回っている者は、菓子類49.8%、調味料・嗜好飲料類67.9%、調理加工食品81.3%と高く、乳類は120%以上の充足率を示す割合が33.1%である反面、80%未満も29.1%であり、個人差があった。</p>	統計解析:なし 調整変数:なし	栄養評価、食行動、幼児、長岡市	食事・間食・飲料	質(栄養バランスが良くない、栄養素等摂取量、食品・料理の種類・組合せが良くない)	子どもの心配ごと
<p>〈幼稚園児のアンケート結果〉 ・食事の回数について、3食食べるが98%、2食が2%であった。 ・栄養バランスについて、バランスよく食べるが51%、偏食がちが44%、その他が3%であった。 ・食事の量について、よく食べるが62%、あまり食べないが26%、ほとんど食べないが1%、その他は11%であった。 ・食事の時間について、規則正しいが90%、不規則が7%であった。</p>	統計解析:なし 調整変数:なし	質問紙法、食行動、食事調査、女性、*便秘、水、幼児、大学生	食事・間食・飲料	量(食べる量が少ない・多い、食事の回数) 質(栄養バランスが良くない)	子どもの心配ごと
<p>・東京の幼児において、朝食を「毎日食べる」は84.7%、「食べる日が多い」は8.0%、「食べない日が多い」は7.3%であった。</p> <p>・東京の幼児において、間食を「ほとんど毎日食べる」は68.0%、「時々食べる」が27.0%、「ほとんど食べない」が5.0%であった。</p> <p>・東京の幼児において、清涼飲料水を「毎日飲む」が42.2%、「あまり飲まない」が57.8%であった。</p>	統計解析:なし 調整変数:なし	質問紙法、飲料、運動活性、健康状態指標、食事調査、*ライフスタイル、肥満指数、幼児、東京都、北京、間食	食事・間食・飲料	量(食事・間食の回数(朝食欠食)、飲料の種類と量を把握していない)	子どもの心配ごと
<p>・幼児は大学生よりも「健康に必要な食べ物」(なす、長ネギ、野菜の煮物など野菜を用いた料理、レバー、焼き魚、大豆の煮物などタンパク質が豊富な料理など)を好まず、「おやつとなる食べ物」(さつまいも、りんご、バナナなど主に糖質が含まれる食べ物)を好むことが明らかとなった。</p> <p>・食物嗜好は、発達するに従って、児童期から思春期にかけて嫌いから好きへの方向の変化が見られ、その傾向は特に「健康に必要な食べ物」において顕著であった。</p>	統計解析:主因法による因子分析 調整変数:なし	学生、食物、食物の嗜好、心理学、幼児	食事への関心・行動 食事・間食・飲料	食事を食べる力(食べるものが偏る) 質(食品・料理の種類・組合せが良くない)	子どもの心配ごと
<p>・幼児の着せについて、「標準的な持ち方」の児は年少組には見られず、年中組で13%、年長組で10%であった。「中指が適正に使えないが、やや形になっている」児は年少組で13%、年中組で44%、年長組で78%であった。「握りこんだり、極端に不自然な持ち方をしている」児は年少組で25%、年中組で15%、年長組で7%であった。「まだ箸が使えず、スプーンやフォークを使用している」児は年少組で37%、年中組で28%、年長組で6%であった。</p> <p>・一口ほおばった米飯を全部食べきるまでの咀嚼回数は、年少組で17.7±7.1回、年中組で17.1±6.4回、年長組で16.0±5.5回であった。</p> <p>・母親が「着せ方を教えている」は全体の85.9%であった。</p>	統計解析:なし 調整変数:なし	質問紙法、栄養生理学的現象、患者教育、食行動、咀嚼、幼児、栄養指導	食事への関心・行動	食事を食べる力(食事マナー、咀嚼回数、食具を使えない) 食すづくり・食べる力(箸の持ち方指導)	子どもの心配ごと 保護者
<p>〈子どもの摂取飲料〉 ・食事の時の飲み物について、保育園児、子育てサロン児ともに最も多かったのは「水・お茶」であり、前者51.8%、後者72.7%であった。 ・おやつの時の飲み物について、保育園児、子育てサロン児ともに最も多かったのは「水・お茶」であり、前者47.7%、後者50.8%であった。 ・体調不良の時の飲み物について、保育園児、子育てサロン児ともに最も多かったのは「その他の」飲料であった。前者54.3%、後者60.3%で、その内訳はイオン飲料、野菜+果実100%ジュース、果実100%以外のジュース等であった。 ・起床、外出・外遊び、昼寝後、入浴後、就寝前などといった場面では、保育園児、子育てサロン児ともに最も多かったのは「水・お茶」であり、前者57.9%、後者78.5%であった。</p>	統計解析:なし 調整変数:なし	乳幼児、母親、飲料	食事・間食・飲料	量(飲料の種類と量を管理していない)	子どもの心配ごと